
モノクロ漬し

新藤悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロ潰し

【Nコード】

N6867Z

【作者名】

新藤悟

【あらすじ】

「死にたがり」

雨水・鏡は自身の死を常に意識していた。「緩やかな死」を夢見て、今日も一日を生きていく。

ただ漫然と生きていた、それだけなのに彼は彼女と出会った。

寒い。凍えそつだ。

手袋をしていてもかじかむ両手に力を込め、僕は自転車を走らせる。南国九州とはいえ、冬は当然寒い。現に暗い空からは小雪がちらついで、学校指定のコートの前面にだけ張り付いている。ペダルを漕ぐ足をそのままに片手で雪を払い落とす。地面に落ちた小さな塊は、冷えたアスファルトに落ちて僕の自転車に取り残されていた。冬の風は強く冷たい。空気は凜として、見上げると、夏とは違った白い雲に覆われていて夜空を微かに白黒まだらに変えていた。僕の回りには誰もいない。時折そばを車が通りすぎていく。雪だけが今は僕のそばにいる。

雪は好きだけど冬は僕は嫌いだ。だけど冬特有の澄んだ空気の夜は大好きで、風が無かったらどんなにいいだろうか。雪が巻き上げられて、車もまばらな国道沿いの街灯に照らされて綺麗に見える。それが風のおかげだというのが少し腹立たしい。

左手に着けた腕時計をしてみる。時刻は午後九時を回っていた。

風に負けないよう前傾姿勢にしていた体を起こし、周囲の建物を見る。もう三年間も通り続けた道だから、建物を見れば自分の居場所と帰りつくまでの時間はだいたい分かる。斜め前に煌々と輝くコンビニエンスストアがあった。そこは、冬にはたまに肉まんを買うことがあって、いつ入っても客は僕くらいしかいない。よく経営が成り立ってるな、と思わないでも無いが、それは僕とは関係の無いことだ。僕にとって重宝していれば問題は無い。それに家と高校の

ちょうど中間点に位置しているから目安にしやすいで、だから家まではまだ後三十分は掛かる。

寒さに負けて、ちよっと寄って行くこうかとも思う。だけど、今日はいつてもより遅い。学校に遅くまで残り過ぎた。

センター試験も終わって、国立大学の前期試験まで後二週間。受験生にとっては最後の追い込みの時期だ。他の同級生はみんな街の塾に通っているけど、中には学校に残って自力で勉強している人もいて、かく言う僕もその内の一人になる。幸いにして成績はまあまあ良かった僕は地元の進学校に入学できて、ウチの高校は高三生だけに夜遅くまで校舎を開放している。暖房の無い冬の教室で勉強するのが嫌なのか、あまり利用する生徒はいないけれど、僕はその恩恵を最大限に享受していると言える。

遅くまで、とは言ってもだいたい七時過ぎには見回りの教師が来て帰らされる。でも今日は取り組んでいた数学の問題が解けないのが悔しくて、もうちよっとだけ、と無理を言って時間を伸ばしてもらい、気づけば八時前までになっていた。

見回りに来た担任の数学教師も何も言わず黙って付き添ってくれていたが、途中から時計をチラチラと見始めていた。週末だし、色々と行く所があるのだろう。流石にこれ以上の無理は言えず、そこで中断せざるを得なかったのが残念だった。

人のいないコンビニの横を通り過ぎていく。腹が減っているけど、小遣いも心許ないし、遅くなると母さんが心配するだろう。電話しようにも携帯は持ってないし、そもそも最近少なくなった電話ボックスを探すよりも、さっさと帰った方がマシな気がする。向かい風に負けないよう両足に力を込める。立ちこぎに移行して自転車を加速。眼鏡に張り付く雪が邪魔だけど無視することにする。

寒い。冷たい風が、頬を切り裂いた様な痛みを与えてくる。

(早く帰ろう……)

僕は自転車のハンドルを右に切った。国道から逸れて細い道に入っ
ていき、住宅街に出た。同じ様な家が並ぶそこは、たまに帰り道
として使う道だ。こっちの方が近くて時間は短縮できるが、夜に通
ると街灯が殆ど無いので少し危ない。たまに無灯火で自転車が走っ
てるから夜にはあまり通らないのだけれど、この日は危なさよりも、
早く寒さから脱出したい気持ちの方が勝った。アスファルトの黒と、道
と家を隔てる壁の白さがモノクロの世界を作り出す。壁越しにのぞ
く常緑樹の緑は、今は夜の色に染められていた。

この住宅地は、ともすれば迷路の様で、曲がるタイミングを間違
えるとすぐ行き止まりに突き当たる。同じ業者が建てた家ばかりな
ので、景色で判断はつかない。始めて入ったときは、脱出するのに
無駄に一時間ほどさ迷ったのも、今となってはいい思い出と言えな
くもない。

(もう、ここを通ることも無くなるんだな……)

受験が終わって合格すれば、僕は県外に行くことになる。こうし
て自転車でここや、三年間通り続けた通学路を走ることはなくなる。
そう考えると、少しだけ感慨深い。

だけでもまた、引越した先で同じ様に通り慣れた道ができて、
毎日同じ生活を繰り返し返り始めていくんだらう。新鮮さは失われて、
日常が作り上げられていく。非日常はそこには無い。でもそれで構
わない。大切なのはいかに素早く新しい事に慣れて日常に組み込む
か、だ。

毎日が冒険、なんてのは漫画やアニメの中だけでいい。それらを
読んで、空想して、時々退屈な日常を残念がる。僕にとってはそれ
で十分だ。そうして僕らは歳を重ねて大人になり、空想に憧れる少
年を笑いながら死んでいく。

そんな事を考えて時折、我ながら若さが無いな、と自嘲してみる。
自嘲して、自分の中でうすぐ何かに言い訳するみたいにそれで良い、

と言い聞かせた。

そんな事を考えて意識が散漫になっていたんだろう。あるいは、慣れた道程に油断してたのか。何度目か分からない角を曲がって、もう少して住宅地を抜けよう、というところで、曲がりしなに何かを見つけた。暗くて分からなかった何かは角に隠れていて、見つけた時には間に合わなかった。

「つつっ！」

ハンドルを慌てて切り、何とかそれと直撃するのを避ける。思い切りぶつかるのは避けられたが、代わりにバランスを崩した自転車は呆気無く倒れ、僕は硬いアスファルトに投げ出された。痛みが背中を襲い、肺の空気が押し出されて一瞬呼吸が止まった錯覚に陥る。遅れてガシャン、と自転車音が塀にぶつかる音が聞こえる。

何に僕はぶつかりそうになったのか。もし、これが自分の見間違えだったらひどく間抜けだ。かと言ってぶつかって何かを壊してしまつたのなら、それはそれで困る。弁償できるほどの余裕はウチには無いのだから。

痛む背中を押さえつつ不安になりながらも立ち上がって、そつと何かがあつた場所に近づく。暗くて確認できないが、何も無い、ということは無く、確かに何かはあつた。眼が悪くて夜眼が効きにくい僕は更に近づく。そして息を飲んだ。

それは人だつた。少なくとも僕よりは大柄な男の人で、その人は塀にもたれかかるようにして倒れていた。

一瞬だけ僕がぶつかったせいかな、とも思ったけど、そういう訳でも無いことはすぐ分かった。

黒いコートの下からのぞく白いワイシャツ。それは汚れていて、何箇所か破れていた。顔の一部には火傷らしき跡があつて、だけでも塀の影にいるせいで程度は分からない。

だけでも何よりもひどかつたのは腹部だつた。コートに隠されて

いたけど、シャツにはべつとりと赤い血が付いていた。まだそれが新しいことは、微かに当たる向かいの家の灯りで分かった。あまりにも生々しく瑞々しい。僕は呆然とそれを眺めてしまった。どうすれば良い。

ひどく非日常的な光景に、その言葉だけがリフレインされる。鼓動は、激しい。慌てるな。まずは落ち着け。冷静に、冷静に。自分に言い聞かせ、深呼吸をする。二度、三度繰り返す。

眼を閉じた。そして開いてみても景色は変わらない。だけでも、なんだかひどく落ち着いた自分がそこにいた。

ひんやりした空気が頬を撫で、頭の中が澄み渡っていくのが感じる。夜空を見上げてみると、雪はもう止んでいたけれど、分厚くなつた雲に覆われて星は見えない。

改めて思う。どうしようかと。

選択肢は単純で、助けるか、見捨てるか。人として助けるのは当然な事は知っている。でも、僕の中ではこういう事件とは関わり合いになりたくない、との考えも渦巻いている。

どう考えても普通じゃない出来事。きっと何かの事件だろう。ここで通報すれば、この人は助かるかもしれないし、助からないかもしれない。どちらにせよ、救急車に乗って病院まで付き添って、警察に事情を聞かれて、見ず知らずの人と喋り話をしていなければならぬ。それが僕にとってはひどく億劫で、想像するだけで胃が痛くなりそうだった。

足元の人物は時折うめき、荒い呼吸を繰り返している。僕はそれを冷たく見下ろしていた。閑静な住宅地で、冬の夜に人影は全くと言っていいほど無い。そしてそれは、この人物の生死の可能性を僕が一手に握っているとも言えた。

ひどく面倒臭い。そう思った。時計を見る。時刻は九時三十分になるうとしている。

(母さんは…もう帰ってる頃か……)

もしそうなら、誰もいない家に驚いてるだろう。そして落ち着かずにタバコを何本も消費してるに違いない。僕が帰ってくるのを待って、夕飯にも手をつけずに。あの人はそういう人だ。

「大丈夫ですか？　すぐに救急車を呼びますんでちよっと待っててくださいね」

冷え切った男の人の肩を軽く揺すりながら話しかける。小さなうめきだけが返ってきたかと思うと、一度大きく咳き込んだ。血の混じった飛沫が僕に飛んできてつい顔を顰めてしまう。

コートでそれを拭き取り、僕は倒れていた自転車を起こすと乗り込んで住宅地の外へと走らせた。

「もしもし、救急車をお願いします。え？　ええ、怪我人です。お腹から結構出血がありました。場所は……」

電話を掛けながら僕はあの人の感触を思い出す。そして思った。冷たい人間だな、と。母さんにも「少し遅くなる」と電話で伝えて、僕はすぐに元の場所に戻る。男の人は変わらずそこにいた。血は止まっているのかどうか分からない。けども、僕はこれ以上何もする気は無かった。

程なくして救急車がけたたましい音を響かせながら住宅地へ入ってくる。あまりの音に近所の人も家から飛び出してきた。野次馬か、と何とも言えない、ひどく詰まらない気分になりながら彼らを見る。救急車の邪魔をしないよう道だけは開けているものの、好奇心に染まった彼らの存在が正直鬱陶しい。その瞳と、救急車の赤色灯が白と黒の世界にひどく場違いだった。

そんな場所にいるのと吹きつけてくる冷たい風が嫌で、僕は救急車の中に逃げ込んだ。あまり暖かくは無かったけれど、外にいるよ

りはマシに思える。走りだした車内で、救急隊員の人が手際よく処置をしていく。明るい車内で、男の人の傷を見ることができた。きっと、助からないだろう。止まらない出血に何となくそう思った。病院に連絡を取る人と、状況報告の声を上げる人。運転しながら何かを叫ぶ人。それぞれがそれぞれの役目を果たしている。

そんな中で僕だけが何もしないのが何だか申し訳なく感じてきて、偶然目の前に降りてきた男の人の手を僕は握った。

大きな手はゴツゴツしていて、冷え切っている。そして僕の手を弱々しく握り返してきた。うめき声が変わる。声は意味のある言葉に変わって、何かを伝えようとしているみたいで、僕は耳を口元へと近づけていった。

「だめ…だ…俺に触っちゃ…いけない…」

ゴメン、もう触ってしまいました。心の中で、半ば嘲笑うような気持ちでそうつぶやいてみる。今、彼はどんな夢を、もしくは走馬灯を見ているのだろうか。生と死の狭間で、何を思っているのだろうか。

偶然か、必然か。そんな僕の疑問に答えるかの様に、口から零れる言葉が変わった。

一度、腹に溜めて、そして彼は搾り出した。

「……死に…たくない……」

かすれた声で彼は確かにそう言った。

それから後は、驚くほどに僕の予想通りだった。病院に到着した時には、彼は完全に意識を失い、一時間も経たずに息を引き取った。死に顔は静かで安らか。青ざめた顔はもう動くことは無い。僕はそれを見ても何も思わなかった。恐怖も、悲しみも無い。少しだけ、ホンの少しだけ羨望に似た感情が僕の中に、僕の予想通りに湧き上

がって消えた。

何となく、ただ現場に居合わせた、という理由だけで僕は彼の最期を看取り、そして同じ理由で警察から事情聴取を受けた。僕はそれに事務的に答え、知ってる限りをありのままを伝えた。それが終わり、病院の玄関に向かうと連絡を受けた母さんが迎えに来てくれていた。付き添って歩いてくれる母さんの横を僕も歩く。車に乗り込む前にコートを脱ぎ、後部座席に背負っていたリュックと一緒に放り込む。

車が動き出し、僕は深くため息をついた。母さんからタバコを一本だけもらい、1mgのタールと0.1mgのニコチンを肺に吸い込んでもう一度ため息をつく。母さんが心配そうに何かを話し掛けてくる。それに僕は相槌を打って、そして出来るだけ笑顔を浮かべて答えてみせる。大丈夫だよ、と。その時の表情は、きつと本当にいつもと変わらないものだったと思ってる。

翌日、学校に行くと、昼休みに担任に呼び出されて職員室に僕はいた。警察か、それとも母さんからか、学校にも連絡がいついていらしくて、担任に同じく大丈夫か、とかいろいろと心配の声を掛けられた。

僕は大丈夫ですよ、といつもと変わりなく答える。そして少しハニカんでみせながら、不謹慎ですけどいい経験になりました、と言つてのける。それを聞いて担任も安心したらしく、すぐに解放された。

予定調和の出来事。こういう時に取る行動はパターンがあつて、それに沿って動けば予想と大きく外れた事は起きない。ただ、僕の予想と大きく外れた事と、少しだけ外れた事があつた。

『だめ……だ……俺に触っちゃ……いけない……』

あの時、僕が触れたのは間違いだったのかもしれない。そうじゃないのかもしれない。答えは分からないけれど、少なくともこの後

の未来は僕には予想できなかった。

そしてもう一つ、少しだけ予想と外れた事。
敗した。

僕は大学入試に失

- 第一話 幻想、現想 -

- 第一話 幻想、現想 -

- 零 -

死ぬ程楽だった？ 何を君は言ってるんだい？
死ぬことより楽なことなんてあるわけ無いだろう？

- 一 -

春が来た。長く感じた冬が終わり、枯れた木々には花が咲いて、この季節の定番である桜がそこかしこで咲き、そしてあっけなく散っていく。分厚いコートで身を守ってた人々も段々と薄着に変わって身軽になっていく。何となく曇天が多かったような空は晴れの日が多くなり、微かな温もりを与えるだけだった太陽は今は確かな暖かさを僕らに感じさせてくれていた。

そして僕は大学生になった。あの事件はどうやら僕に何らかの精神的ダメージを与えていたのか、予想以上にあっさりと前期試験を失敗してしまった。元々が先生に持ち上げられて挑戦したようなもので、僕自身はあまり受かるとは思ってたからダメージは大きくはない。

なまじ成績が良かったから誤解されがちだが、僕自身の能力はそ

れほど高くはない。確かに高校では上位にいたけれど、それだつてただ勉強をしていたからそのポジションに入れただけだ。部活にも入らず、あまり趣味もない。一人遠くから通っていたから近くに友達もいないし、僕自身あまり友達と遊ぼうという気にもなれなかった。

気軽に話せる友達はいた。けれども彼らは同じ塾に通っている仲間同士で仲が良かったから僕が深く入り込むスペースは無い。その程度の付き合いの友人とつるむ気も起きず、だから僕は時たまテレビを観るだけで、勉強をするくらいしか無かった。

人並み以上に勉強はしたつもりだ。それでいて第一志望校にかかるうじて受かる程度の実力しか無い。教科書レベル、もしくはそれより少し程度の高い問題しか解けないのだ。もうすでに学力レベルは僕の限界に達していて、だからこそ受験に失敗しても「やっぱりか」程度にしか思えなかった。

何にしる、期待されるのは僕にとって過大評価に過ぎない。過ぎなくて、でもその期待に応えたいとは思ってしまふ。そして、期待に応えられなかったのは悔しい。自分の能力不足を棚に上げて、原因をあの事件に求めてしまふのはきつと僕を持つ弱さなんだろう。

幸いにして後期試験で別の大学に合格し、晴れて僕は大学生という気楽な肩書きを手に入れる事ができた。本来ならばここでも必死に勉強に励むべきなのだろうけど、そんな気概を持っている学生が日本全国にどれだけいるのだろうか。誰かそのところを調べてみてくれないだろうか。もっとも、僕は調べるつもりは猫の毛先ほどもないけれど。

大学生。そこそこの責任と大きな自由。モラトリアムの時間。何と素晴らしい。そこで得るのは経験か、墮落か、それとも怠惰か。きつとそのどれでも無くて、その全てなんだろう。

僕自身は奨学金を受けて学生をしている以上、ある程度真面目に勉強するつもりではある。けれど、周囲に流されやすい僕がそれを継続できるかという和我ながら怪しさバツグンで、それなのに無理

に抗うのも面倒な話だ。だから僕も大多数の学生の中に埋もれてしまっただろう。

「えー、こうして運動方程式を立てていくと微分方程式ができあがるわけですが、この場合の微分方程式を解くためにはまず『e』のラムダエックス乗をこの式に代入します。そして……」

夢も目標も無く毎日を僕は過ごしてきた。その流れに乗ったまま入学式で人生初のスーツを経験し、大学近くの安い木造アパートを借りて一人暮らしをスタートさせた。大学の寮なら家賃はずっと安いけれど、キッチンも風呂もトイレも共同、という環境が嫌で、アパートを借りた。最低でも風呂やトイレくらいは一人で入りたい。よって少々無理したわけだが、まあバイトをすれば何とかなるだろう。どうせお金を使うこともそうそうあるまいし。

「こうするとは未知定数Aが出てきまして、ここで初期値を使います。t=0の時の……」

何もかも初めて。だけど初めて尽くしの慣れない環境での時間はあっという間に終りを告げた。これまでとは違う教育システムにさえ、まるでずっと前から知っていたようにすぐに馴染んだ。

不慣れは慣れに、特殊は平凡、非日常は日常に。

目標は暇つぶしに、希望は退屈に食い潰され、努力は怠惰に塗り潰される。

そうして一ヶ月が過ぎた。

チャイムが鳴り響く。それと同時にため息に似た何かそれぞれの中から吐出された。それは学生だけでなく授業をしていた教授さえも同様にして同等。

「それでは今日はここまで。さっき言った問題をレポートとします

ので、やってくるように」

教科書に印を付け、閉じる。顔を上げると教授はすでに黒板消しで黒板をモスグリーン一色に染め始めていた。

気の早い学生はすでに教室を飛び出していく。大多数は片付けそつちのけで友達とおしゃべりに興じ、静かだった部屋は今ももう違った色に塗り潰されていた。

僕もため息を吐き出し、ルーズリーフを教科書に挟みこんで教室を出て行く。吐き出された息には空気以外の何が含まれているのか、僕は興味はない。

古い建物の、少しだけ暗い教室から出ると空は五月晴れの快晴だった。燦々と降り注ぐ日光に瞳を焼かれて白く染まり、僕は立ちくらむ。

「おつす！ 鏡、お疲れっ！」

そんな僕を後ろからの衝撃が現実を引き戻す。振り返るまでもない。背後から底なしの元気で僕に飛び掛ってくるのは一人しかない。

「なんだ、ちゃんと来てたのか」

「ちよっ、それお前ひどくね？」

口では非難するものの、その表情に気にした様子も無い。もちろん僕もそれが分かってるからこそ、他人に軽口を叩けるのだ。

生来なのか、それとも成長していく中でひねくれてしまったのか、僕は口があまり良くない。無論、他人にやたら噛み付いたり失礼なことは言わないが（というより言えないのだが）、一度親しくなると自由に口を開けるようになる。自由に口を利ける、という事は一切の気兼ねがなくなるということで、僕は態度もそれ相応に変わる。

だから言葉を交わす人間はそれなりにいても友人と言えるのは少ない。というよりも、失礼な態度をとっても大丈夫な人間としかあまり付き合わない、というのが正解か。となれば当然親しい、と言える人間は限られてきて、たった今僕に飛び掛ってきたこの君原正祐も残念ながら僕がそんな態度をとっても大丈夫という、名誉ある称号を勝手に授けられた人間だった。

「嘘だよ。授業中にコソツと後ろから入ってくるのが見えた。ずいぶんと社長出勤だな。大方、先週教えてやったレポートもやってないんだろ？ わざわざノートまで貸してやったのに」

「うっ……それは、まあ、なんだ、その……」

途端に曖昧な笑みを浮かべてしどろもどろになる正祐に、僕はこれ見よがしにため息をついて見せる。わざとらしく肩を竦めて、呆れた、といった態度を示す。もちろんこれもポーズだ。

身長一七三cmと、一七二cmの僕とほぼ同じ背丈で体重もほぼ同じ。だけでも日本人特有さを大事にしている僕とは違って正祐は、昔からなのかそれともいわゆる大学デビューなのかは知らないけど、髪を見事なまでの金髪に染めていた。男の顔なんぞ見ても嬉しくもなんとも無いが、髪の色以外の容姿は至って普通。ややイケメンよ。りか。初回の授業から寝坊し、入学当初から合コンや徹夜で遊び倒すという、まさに絵に描いたような大学生生活を満喫している。テニスサークルに所属していて、今も形だけのラケットを肩から下げているコイツに「テニス好きなのか？」と尋ねた時は予想通りの返事が返ってきて逆に驚いた。「だって楽しい大学生活を送るためにはテニスサークルは必須でしょっ!？」ノリが良いのは構わないが、少々世の中をなめてるんじゃないのか、と思わないでも無い。

黒髪黒目黒ぶちメガネで工学部所属。他人の性格評価で「落ち着きすぎてて若さが足りない」というなんとも有難い評価を得た地味な僕とは正反対の若々しい、ともすれば幼すぎる、とも形容できる

正祐とは何故か気が合った。同じ学科の懇親会会場で話したのがきっかけだったが、それ以来一緒に過ごすことが多くなっている。主に僕が世話をしている気がしないでもないが。

「もういいや。めんどくせえ。単位落としまえよ」

「いやいやいや！ まだ大丈夫大丈夫！ まだ一ヶ月だし、ほら、もう一通り楽しんだからこれからは心を入れ替えて生活するし！」

僕なんかと一緒にいるよりも、もっと楽しく過ごせる人間がいるんじゃないのか、と思わないでもないが、僕としてもまあこういった話し相手はそうそう得られるわけでも無いのでそこは黙っておく。実はマゾなんじゃないか、と思ったのはあくまで秘密で。

「もう一ヶ月だし、そろそろお前もバイト始めるんじゃないのか？」

「この前言ってただろ」

「あーうー……」

「あーうー、じゃねえよ。ま、どうせ僕には関係ないけどな」

「いやー、そこはね、ほらさ、友達を助けると思っただけノートなんぞを貸してくれると嬉しいかなー、なんて……」

「やだ」

「頼む！」

そう言ってパン、とやけに景気いい音を立てて手を合わせてくる。無論僕は神様でも仏様でも無いのでご利益は無い。無いはずなんだけど……

「……」

狭いキャンパスのど真ん中でこつこつも真剣に拝まれると、どうもやりづらい。今も他の人がチラチラとこつちを見ながら通り過ぎてい

つて、僕としては異常に居心地が悪い。大した事では無いと分かってはいるのだが、大勢に注目されるのはどうも苦手だ。太陽の熱とは別の意味で背中にびっしりと汗が浮き出てくるのが分かって、この異常事態を終わらせるために僕はもう一度ため息をついてみせた。

「分かったよ……でも寝ててもいいから授業だけはちゃんと参加してろよ。出席点が足りないのはどうしようもないからな」

「さんきゅっ！ 心の友よ、恩に着るぜっ！」

何処かのいじめっ子みたいなセリフを口にしながら抱きついてくる正祐。そっち系の趣味など織毛の先ほども無い僕は横に逸れて、それを丁寧にお断りする。

「とりあえず食堂に行くか……」

「あれっ、なんで？」

と一人でつぶやいてる正祐を無視して僕は食堂に足を向けた。くだらない会話に時間を取られて、いつの間にか周囲の人影もだいぶ減っている。このままだと席が空いてるかどうか。後ろで呆然としてるだろう正祐を促そうと僕は振り返った。

「おい、ボーっとしてないで……」

「何してんだ？ さっさと飯食おうぜー」

後ろにいたはずの正祐が何故かすでに前にいて僕を呼ぶ。テレポーターか、貴様は。

くだらない葛藤をよそに悩みの種が解消されたからか、実に晴れやかな表情だ。他力本願なのが癪にさわらないでもないが、まあこれモコイツの生き方なんだろう。別に悪いことじゃない。

「？ おーい。もしもーし」

でもまあ、コイツのおかげでそこそこに退屈しない学生生活を送れそうだし、事実、高校時代よりも楽しいと僕は感じられてる。その代償と考えれば単位の世話くらい安いものだろう。

止めていた足を動き出し、正祐の隣に並ぶ。少しだけ僕の前を歩いているのが表してるみたいに、僕をこれからも引っ張っていつてくれるんじゃないかと予感してる。いや、これは願望か。ずっとレールの上を歩き続けてる僕が、ちょっとだけ道を外すのを許してくれるという。

「ん？」

一歩二歩と歩き始めたその途端に何かの気配を感じて僕は振り向いた。けれど振り向いた先には誰もおらず、感じた気配もすでに無くなっていった。誰かに見られてた、というのはちよつと違う。誰かに見られてる意識というのはずっと昔から強く感じてきたから良く知っている。今回感じたのはそれとはまた違った、妙な感じ。例えるなら急に生暖かい風が首筋を撫でたような、空気の異常。明確な違いは感じた僕にしか分からず、誰にも説明できない歯がゆい違和感。それが指向性を持って僕に襲いかかってきていた。

「どうしたんだ？」

「いや、何でもないよ」

首を振って正祐に僕は答えた。どうせ大した事は無い。どうにも僕は周囲に対して敏感すぎるのだ。自分に関係ない事でも気になってしまう、僕の悪い癖。そんなのでデリケートな胃にダメージを与えるのもバカらしい。些細な事だ、どうせ。

関係ない、と割り切って僕は忘れる事にした。僕と関係ない事な

らそれで良い。関係してくるならその時、だ。どうせ原因も分からないなら対処のしようが無い。

「あつ！」

食堂に入った途端に正祐はそんな声を上げた。違和感について考えてたせいで、正祐が何かを見つけたのかと思っただけ、正祐は自分の財布をこれでもか、と言わんばかりに凝視してた。賑わってるこのキャンパス唯一の食堂のせいであまり周りの関心は集めなかったが、ワナワナと震えながら大声を出しやがったおかげですぐ後ろの人から何事か、という視線をビシビシと感ずる。だがコイツはそんな事お構いなしに、またしても僕に向かって手を合わせてきた。

「……金貸してくんない？」

そう言って四円しかない財布を見せてきた正祐を僕はグーで殴っていたりする。

・
二
・

大学に入った途端に年齢というものはスキップされるものだと僕は考えている。具体的には入学した瞬間に誰であろうと二十歳になる。それくらいお酒についてみんな頓着は無くなるし、周りの大人

たちも誰も注意はしない。よほど無茶な飲み方をしない限りは目くじらをたてることも無い。実際、入学早々お酒を飲む機会には事欠かないし、今日もまた僕はその席で一人黙々とグラスを傾けていた。酒の場は嫌いではない。けれど、見知らぬ人たちの中で心から楽しむことなど僕には到底無理だと、大学入学してからの一ヶ月で学んでいる。酒を思いつきり飲むのは気心の知れた友人とだけ。そう決めていた僕は今日開かれたとあるサークルの歓迎会に、ただ食費が浮くからという理由だけで参加して、勧誘に近寄ってくる先輩たちと適当に話を合わせながら料理と酒を楽しんだ。周りの空気にあてられてそれなりに楽しくはあったけど、所詮それだけだ。僕という人間がそんな会で心から楽しめるはずもなく、僕も最初からそれが分かっていたから、二次会のお誘いも断って一人夜空を時折見上げながらアパートへの帰路を歩いていった。

夜空を眺めるのは良い。特に雲一つない時は最高だ。星座の名前に興味は無いけれど、星を見ると何となく心は落ち着く。まだ少し肌寒い夜風が火照った体に心地良く効いてくる。

鞆を持たず、財布と携帯と鍵の三種の神器だけを身につけて、誰への気兼ねなく歓迎会の行われた賑やかな街を歩き続けたつもりだった。金曜のおかげで何処の店もドアが開く度に店内の喧噪が漏れ出て街を彩り、そして僕の神経を密やかに逆撫でする。

楽しそうな声。そして僕には縁の無い世界。

僕と言う人間が馴染めないのはいささか残念ではあるが、それが僕である以上仕方無い事だ。

角を曲がって路地へ。路地は路地でお店がいっぱいあって、店員らしき人が道行く人たちに声を掛けている。そんな路地をさらにもう二、三か所曲がれば急速に声は小さくなり、あつという間に静かな場所が広がる。そしてそこそが僕の居るべき場所。

逃げたわけじゃない。逃げたわけじゃなくて、僕を繕わないでも大丈夫な世界へと戻っただけ。

「とは言っても…言い訳だよなあ……」

ぼやいてみるが、別に気が晴れるわけでもない。

自然と視線は地面へと下がって視野が狭くなる。それに引きずられるみたいに酒のせいで高めだったテンションも急降下。いつもの高さに落ち着く。暗がりには道行く人が捨てていったゴミがそこかしこに散らばって、まだ夜も早いというのに誰かが胃の中身を戻した跡があった。脇には猫の死体。車にでも跳ねられたのか、寂しく一人で亡くなっている。

「死ぬ時ってどんなだろう……？」

猫の向こう側に車の影を想像する。急速に迫ってくる車。鳴り響くクラクション。そして衝突音。僕の視界はグルグルと回り回って地面に激突。暖かさも冷たさも何も感じずに意識が黒く染まっていた。

そして僕の想像は途絶えた。いつの間にか閉じていた眼を開く。猫は死んで、僕はまだ生きていた。

「みんな何を考えながら生きてるんだらうね」

歩きながら独りごちる。

毎日が楽しくないわけじゃない。一日の中にも楽しい時間、面倒な時間、辛い時間、悲しい時間があって、辛い時や悲しい時よりもずっと楽しい時間が多い。

友達と過ごす時間は楽しい。

ご飯を食べている時は幸せ。

眠い時に眠る。それも幸せ。

幸せだと思える時間はそれなりにあるはずで、毎日それを僕は享受している。だから僕は幸せなはずだ。

なのに。

その幸せな時間さえも面倒だと感じている僕がいる。生きることが面倒だと感じている僕が確かにそこにいる。

罰当たりだ、と思う。生きたいのに生きられない人、生きることが拒否される人は世の中にはいて、僕はその中で生きることがまだ許されている。これだけでも幸せなんだろう、きつと。

「そのはずなんだけど……」

死んでもいい、と思ってる自身を否定できない。別に死にたいわけじゃないし、そこまで世の中に絶望してるわけでもない。そもそもが絶望なんてしょうが無い。希望が無いから。だから生きていても死んでしまおうが構わない。消極的自殺願望者というべきか。

願うのは緩やかにして急速な死。いつ死んでも誰も恨まないし、死ぬ時はあっさりとして死んでしまいたいという僕のわがまま。そしてそれはたぶん、実現しないんだろう。世界はそこまで僕に都合良くはできていない。

こんな風に考えてしまうのは僕だけなんだろうか。もしそうなら、他の人は何を願って生きているんだろうか。

「まったたく……」

自分にため息が出る。いつまで経っても治らない僕の癖。どれだけ歳を無駄に食べばこの思春期みたいな思考から抜け出せるんだろうか。

「さっさと帰って寝るか……」

こんな何の生産性も無いクソツタレな考えは寝て忘れてしまっに限る。寝て起きればまたいつもと同じ朝。そして相似な一日を過す

していただけた。

と言いつつも気づけば僕は見慣れない場所へと入り込んでいた。元々があまり通ったことの無い道だったから、何処かで曲がる場所を間違えたのだろうか。少しは酒が入っていたせいもあるかもしれない。立ち止まって振り返ってみるけど、もうすでに自分が何処にいるのか分からなかった。戻るか、それとも進むか。

普段だったら戻るんだろうけど、と思いつつも僕は前に足を進める。アルコールが入ると無駄にアクティブになるのも僕の悪癖の一つだ。真っ直ぐ進めばその内に大通りに出るだろう。地球は丸いものだから。酔った頭で気楽にそう考えながら、静まり返った狭い路地が多くある住宅街を歩いた。

そうして十分も歩いただろうか。時計を見てなかったのどくらい経ったかは分からない。そしてふと気づく。

「風が無いな……」

昼間の陽気そのままの格好の僕に肌寒い風が吹いていたけど、今は完全に止んでいた。いや、止んでいたと表現するのは正しくない。

「よどんでいる、の方が正解かな」

全くの無風。風が無いどころの話では無い。木々は静まり返り、服は揺れず、空気の流れが一切感じられない。妙に息苦しくて、自分が暑いのかそれとも寒いのかも微妙。もしこの状態が続けば、空気も腐り落ちてしまうのではないかとさえ思える。

「まるで世界が隔離されてしまったみたいだ……」

小説でよくあるストーリーが思い出した。突然異世界に召喚されて、右も左も分からぬまま勇者として魔王退治に向かわされる。平凡な

日常が突如として終わりを告げ、慣れぬ世界に苦しみながらも仲間
に助けられながら目的を果たしてハッピーエンド。だけど現実にそ
んな事があるはずがない。

そんなハッピーエンドなんてものは妄想の産物で、有り得ない。
有り得ないからこそ皆が物語を愛するのだから。

気味の悪さを感じて僕は少し早足に歩き始める。一步を大きく、
回転は速く。ともすれば大きな足音が聞こえそうな程に、内心の心
細さを誤魔化すように歩く。

歩きながら違和感を覚える。何かがおかしい。空気だけでなく、
何か足りない。家を出る時に忘れ物をしたような、そんな些細な
感覚。些細なのに気になって仕方ない。

気持ちの悪い汗が背中を流れている。額に手を当てると、びっし
りとした冷や汗がまとわりついた。

落ち着け。自分に言い聞かす。

一度足を止めて深く息を吸い、空を見上げる。そして気づいた。
どの家にも灯りが点いていない。まだ寝静まるには夜は浅く、辺
りには古い家や対照的な真新しいマンションが建っている。なのに
部屋の窓からは一切光が漏れていなかった。そのくせに通りの街灯
だけは妙に明々と道路を照らしている。

加えて音も無い。大通りから離れているからかとも思ったが、こ
こまで車の音が無いのはおかしい。人の影も無い。眼に入る景色は
まるでハリボテの様で生気を感じさせてなかった。どうなってる
んだ。何か変化が欲しくて、僕はポケットに手を入れる。と、携
帯に触れた。

慌てて取り出し、折りたたみ式のそれを開いた。そして半ば予想
通りの姿を見た。

仄かな光を放つ画面の上にある携帯のアンテナは圏外。それなり
の都会でこれは有り得ない。試しに正祐に電話を掛けてみるけど、
耳にはお決まりの文句しか聞こえてこない。

その時。

突然、落雷に似た音が耳をつんざく。地面を揺らし、ハリボテの窓がガタガタと震える。

それに続いて銃声の様な音。今度は爆発。隣の家の二階が吹っ飛び、破片が空を舞った。

「なっ!？」

ガラスの雨が僕に向かって降り注ぐ。転がるようにして塀の影に隠れ、両手で頭を覆った。屋根の破片だろう。大きな瓦礫が目の前に落ちて弾ける。細かい破片は弾丸の様に手に落ちてくる。

「くうっ……! 何なんだよ、コレッ！」

人工物の雨が終わらない内に再び爆音。今度は向かいの家が一気に半ば程崩れるのが見えた。続いてその隣も。

雨が止んで、ようやく僕は顔を上げた。そして見た。

黒と白の二色しか無かった夜空が赤く染まっていた。崩壊した家から轟々と炎が昇り、僕を見下ろしていた。いや、見下していた。

視界一杯に広がる炎が意思を持ったみたいに動きまわり、ただ呆然として見上げるだけの僕を嘲笑っている。そんな気がした。

首を捻って他の場所に眼を移す。

爆音や崩壊音に混じって飛び交う怒号。痛いほどの静寂に包まれてたはずなのに騒がしいまでの叫びがそこかしこから上がっている。その事に、僕はやっと気づいた。

少し離れた、五階建てくらいのマンションの一角が崩れる。外装のパネルがガラガラと音を立ててアスファルトを傷つけ、だがそこから剣を持った男が飛び出すのを見た。

電柱を蹴り、屋根を蹴って空を舞う人間。いや、人間と言って良いのだろうか。

何者にも、重力にさえ縛られていないかのように自由に空を飛び跳

ねる。そして手には大剣。物語の世界みたいに戦う彼がそこにいた。

「そっちに行つたぞ！！ 援護しろっ！！」

怒鳴り声に等しい命令が辺りに響いて、それに伴い地面から銃弾が吐き出された。

目の前で飛び跳ねていた男性を援護するように放たれ、視線をその行き先に動かせばまた別の男が屋根の上に立っていた。

彼もまたあちこちを飛び跳ね、銃弾をかわしていく。だが、かわしきれていない。

遠目できちんと見えないけど、かろうじて当たっていない、というのが正しいか。避けると言うよりもよるめいているように見える。

「死ねよっ！」

何とか体勢を整えて、男が構えた。その瞬間を見て、僕は驚嘆した。

叫んだと同時に何も持っていなかった掌から火の玉が飛び出す。

頭大の炎が剣を持った男目掛けて飛んでいった。

一発だけでなく、何度も何度も走りながら撃つ。剣を持った方もジャンプして避けて、少しずつ距離を詰めて行っていた。お互いが攻守を繰り返し、一撃一撃が遠目からでも必殺の威力を持っていると分かる。紛れもなく真剣に戦っていた。

それは魔法だった。魔法の世界だった。男なら一度は憧れる世界。現実を知らない幼い頃には自分にだってRPGのキャラクターみたいに魔法が使えるんじゃないか、と空想を膨らませていた。そして現実を知って切り捨てざるを得なかった世界が眼の前にあった。

二人の距離が一足に近づく。至近距離からのファイアーボールを避けると、逆袈裟斬りに手の中の剣を振り上げた。

そこに影が割り込んだ。見るからに頑丈そうな大きな盾を前面に

押し出して、剣を防ぐ。

一度剣を持った男が離れ、その隙を逃さずに炎を放つ。体を捻って避けたが、恐らく髪くらいは焼けただろう。傍目から見てもそれくらいギリギリのタイミングだった。そしてそれは不幸にも僕の方目掛けて飛んできていた。

「うわぁっ!？」

我ながら情けない声を出してその場を飛び退く。転げ回りそうにしながらも、僕は驚きを禁じ得無かった。

体が軽い。

まともなここ数年は体育以外に運動はしてなくて、僕の体はなまりきっているはず。なのに一足で数メートルの距離を助走もなく悠々と跳んでいた。

これならばもしかして

僕の中でむくむくと何かがこみ上げてくる。それは誰もが捨てたはずの幻想。遠い昔の憧れ。

僕にもできるかもしれない

崩れかけた塀に手を掛ける。力はいらない。ただ軽く地面を蹴るだけ。

果たして僕は簡単に塀に乗れた。そして塀を蹴る。体が宙を舞う。いとも簡単に地面は離れていって、二度、三度屋根を蹴って駆け上る。

流石に彼らほど自由には跳べない。けれども今の僕には十全。高く高く昇り、開けた視界からは彼らの戦いの様子が良く見える。

彼らから少し離れた所で光が瞬く。どうやら、他の場所でも戦闘

が起こっているらしい。

グッと拳を握り締める。

間違いない。僕は高揚している。心臓が高鳴る。こんな気持ちは何年ぶりだろうか。

再度足に力を込める。屋根を離れ電柱を蹴る。マンシヨンの壁を駆け、別のアパートへ飛び移り、遙か高みから文字通り見下ろす。地面では、彼らと違って自由に跳べないのか、多くの武装をした人たちが、ある人は空目掛けて銃を放ち、また別の人は地面に力無く転がっていた。その中で一人、あちこちを駆け回っている人がいた。かなり長い黒髪に七分丈のシャツとパンツをはいた女性。申し訳程度に防弾チョッキらしき物を着ているけど、一向に戦闘には参加していなかった。倒れている人の所に駆け寄ってはその人に向かって手を当てていた。

あれか、ゲームで言うところの回復役みたいな人か。現実離れた環境にどうにも思考がおかしい。まるで、僕らが決して入り込めない空想世界のように現実感の無い言葉が出てくる。

しゃがんで手を当て、また別の場所に飛び跳ねるみたいにして忙しそうに働く。髪が踊り、時折光が彼女の横顔を照らし出していた。

(へえ……!)

暗いのと遠いので見えづらいけど、ちょっとだけ見えたその顔は結構可愛かった。横顔だけで判断はできないが、かなり可愛い部類に入ると思う。

あんまり女性の顔を凝視するのも良くない。そう思った途端、まるで僕に気づいたみたいなのタイミンで体を翻して別の場所に行ってしまった。そして入れ替わる様にして別の人が倒れてる人に近寄ってきた。白衣を着た、見るからに医者らしきその人は手際よく道具を取り出して治療を施していった。

あれ、じゃあさっきの人は何をしていたのだろうか……？

もう一度手を当てていた女の人を目で追いかける。別の人に手を当てていたが、それ以上他に何かをしている風では無い。その証拠にまた同じ様に医者らしき人が手当を繰り返していた。

僕は彼女の姿をずっと追いかける。どうしてだろうか、いつしか僕の関心は魔法でも戦闘でも無く、彼女自身に向けられていた。

まさか、彼女に惚れたとか？ それこそ有り得ない。僕が誰かに恋をするなんて。

浮かんだ考えに自分で突っ込みを入れて笑う。ホントに、なんて馬鹿げた考え。

頭を振ってそんな考えを振り払い、顔を上げた。

ドキツとした。

顔を上げて彼女を見た時、彼女もまた僕を見ていたから。

初めて正面から彼女の顔を見る。大きめの目に小ぶりの鼻。絶世の美人、というわけでは無いけど、愛嬌があつて思ったとおり可愛らしい。そんな彼女がこっちに驚きの表情を浮かべて呆然としていたけど、すぐに我に返って何事かを叫んでいた。だけど悲しいかな、周囲の音がうるさすぎて全く声が届かない。

必死で彼女が叫んでる。その表情は慌ててる様でもあり、僕に対して怒っている様でもある。

きつと勝手にこんな所に来てしまった事を責めているんだろう。

少し落ち着きを取り戻した頭でそんな事を考える。どう考えても僕みたいな人間がいる所では無い。

そう、僕はあくまで一般人。物語の主人公になりたくてもなれない、力の無い町人Aに過ぎないのだから。傍観者は遠くで勇者の成功を祈るだけいい。

そう考えると、僕がひどく場違いな場所にいる気がしてきた。いや、気がする、じゃない。実際に僕はここにはいけないのだ。

彼らは異常だ。そしてこの場所も、空間も。

ここは危険。ずいぶんと遅かったが、ようやく僕に対して脳が警

報を発する。瓦礫が舞い、まばゆい火炎が肌に熱を遠くから伝えてくる。よくよく考えれば今、僕がいる場所も三階建てのアパートの上。柵も何も無い、むき出しの空に僕は接している。

早くここを離れよう。離れるべきだ。幸いにして隣の家の屋根までは普段の僕でも降りれる距離。不思議な世界はこれで終り。帰って寝れば何も無かったと信じられる。

本当に、そうなのか？

一度知ってしまった世界。憧れ。知ってしまった僕は戻れるのだろうか。

大丈夫、諦める事には慣れているよ

自分で自分に語りかける。これまでそうやって生きてきたから。だから僕は変わらない。彼女から眼を離して僕は屋上から飛び降りようとした。

その時、突然の横殴りの衝撃。そして灼熱。熱さと痛みが遅れてやって来て、自分を覆っているものが炎だと気づいたのは間抜けにも空を飛んでしまっただけだった。

ここは危険だと分かっていた。なのに、なのに僕は逡巡してしまっただ。

アツイ。クルシイ。

息もできず、火を消すこともできない。どうする事もできずにもがき、僕は地面に近づいていく。その最中に思ったのは

ああ、これでやっと

そこで思考は途切れた。

・第二話 優秀、不断・

・第二話 優秀、不断・

・零・

「夢は夢だから価値がある

・一・

「ん……」

急に感じたまぶしさに目を開けるともつとまぶしくなるのは、朝ご飯を食べないとお昼前に気分が悪くなるくらい至極当たり前の事で、だからと言って再び目を閉じて眠りに就くのは僕にとってはご飯を抜くくらい難しいことだ。頭はグラグラと揺れていて、気持ちはまだ寝ていたいけど一度目が覚めると二度寝が難しい体質らしく、仕方なく目を限界まで閉じてのっそりと体を起こした。

正直言ってひどく眠い。寝不足の時に感じるあの倦怠感が全身をくまなく支配してくれて、まるで泥の中にいるみたいだ。

（あー……そう言えば今日は土曜だっけ……なんで目が覚めたんだろ……あー洗濯しなきゃな……ダルいな……外出たくねえ……なんでカーテン開けっぱで寝たんだろ……）

体を起こしてもまぶしさのせいもあってまぶたは中々開いてくれない。思いつきりでたらめな思考が頭の中を駆け巡って、最後に思ったのは今自分がとてもひどい顔をしてるだろうと言うことだ。

受験勉強で疲れてた時に撮ったせいで学生証の写真はひどく恥ずかしいものだった。髪も服も適当で、街中に貼られている指名手配写真の方がもっとマシだろう。可能ならば学生証を切り刻んでやりたいくらいだ。もちろんそんな事をして後から面倒な事になるだけなので、想像するだけに留めておく。そして今の自分の顔は、それよりももっと悪人面をしてるだろうと本気で思う。

我が家とは言え、いつまでもこんな状態にいるわけにもいかない。眠いということは今の吐きそうなくらいダルい感覚が体にいつまでも残ってしまうということであり、そんな感覚は今現在だけで御免被る。目を覚まそうと頭をボリボリと音が立つくらい全力でかきむしり、思いつきりその場で背伸び。バキバキと、骨が折れてるんじゃないかと思うほどに盛大な音と共にやっと思考が落ち着いてきた。

「えっと、眼鏡は、と……」

ぼやけた視界で、手探りで眼鏡を探す。幸いにしてそれほど時間を掛けずして眼鏡を見つけることができた。ベッドの脇のテーブルの上に置かれていて、それを確認すると手を伸ばす。

「およ？」

ガチャ、という音に反応して振り向いてみると、どういふ訳か女の人が立っていた。手にはこれでもか、と言うくらい的大量の漫画本を抱えていて、びっくりした表情で僕の方を見ていた。仕方ないから僕も見返してみる。同じ様にびっくりした表情を浮かべて。ていつか、どちら様でしょうか？

「あー起きたんだねー、良かったあ。いや、本当に焦ったよ！ 全ツ然目が覚める気配が無いしさあ、正直、やっぱ死んでんのかな、て本気で何度も思ったけどね、心臓の音はきちんとしてるし、ものすつごく浅かったけど呼吸もしてたからさ、あ、やっぱ生きてるわ、て分かったけどね。全く！ 生きてるんならさっさと起きなっ！ って思っちゃうよね！ そう思わない！？」

「え？ ええつと、あの……」

「ん？ ああ、これはね暇つぶしの漫画。だってチョー暇なんだもん。こんな狭く苦しい部屋にいてさ、ずっと見張ってるのって結構拷問に近いところあるよね？ 一秒たりとも目を離すなって言われちゃったらさ、下っ端のこっちは断れないし。大体なんでアタシ一人で延々と眠ってるヤツを見続けなきゃいけないのさ！？」

「いや、そんな事言われても」

「あつ！ そうだ！ 君の目が覚めたんならもうここにいる必要ないよねっ！？ んじゃ早速他の人呼んでくるから大人しくベッドの上でポフポフジャンプでもしててねん！」

そう一方的に告げると彼女は跳ねるようにして部屋を飛び出していった。けど、ドアを開けきれないままに出ていこうとしたもんだから、ゴインツ、と素晴らしい音を立てて頭をぶつけていた。その表紙に持っていた漫画を床にばらまいてしまう。

「よっ！ ほっ！ たあっ！？」

威勢が良いのか悪いのか分からない掛け声を上げながら漫画を飛び越え、一応僕の視界からは消えていった。直後に「ほあああっ！？」なんていう声と一緒に何かにぶつかる音がしたけれど。当然相変わらず一般人でしか無い僕には彼女の様子を見に行く、なんて真似をする気などサラサラ無い。きっと関わらない方が楽しい人種なんだろう、彼女は。

寝起きからいきなり疲れた。どうしてだか深いため息が口から零れる。

それはともかくとして、ここはどこだろうか。僕は部屋を見渡してみたけど、そんな事するまでも無く自分の家ではない事は分かる。四畳半くらいの広さでコンクリート打ちっぱなしの壁。シミ汚れがあっちこちにあって、よくある話だけど人の顔みたくに見える。

どういふ訳だか蛍光灯は微妙に薄暗い。奇妙な気味悪さが漂っている気がする。たぶん僕の思い込みだろうけど。

置いてあるのはベッドとスチール製の無骨なテーブルが一つ。後は折りたたみ式のパイプ椅子が、一つはベッドの横に広げられていて、もう一つは壁に立てかけられているだけ。窓さえ無い。一つ広げられてるのはさっきの話しぶりから、きっと彼女がここに腰掛けていたんだろう。入り口一つに窓は無し。気が詰まる感じがするのは僕の気のせいじゃないだろう。狭くて暗い所は別に嫌いじゃないけど、かと言ってこんな場所に何時までもいたいかと問われれば全力を以て首を横に振らせてもらう。ここで寝てた人間が言うセリフじゃないけど。

装飾品が破滅的に少ないおかげで部屋の観察は一分持たずして終わってしまった。理由は知らないけど、僕の看病？をしていた彼女が床にぶちまけられた漫画を持ってきたのもうなずける。少なくとものんびり時間を潰す場所ではない事は確かだ。

ここまで考えはしたものの、結局ここが何処か、という今の僕の至上命題に対する答えは出てはいない。こんなインパクトの無さ故

に逆にインパクトのある部屋を、一度でも見た事あるなら忘れるはずは無いし、知らないということとは当然部屋の情報からここがどこかを割り出すなんて芸当は、名探偵でも無い僕にできるわけも無くて。誰かに尋ねようにも狭い部屋に一人つきり。マシンガンの如く一方的にしゃべって出て行った女の人は帰ってくる気配は無いし、何より、寝起き直後の胡乱な思考からは脱出したとは言ってもまだ寝起き状態の頭でいろいろと考えるのも億劫だと考えてしまうほどには僕は面倒臭がりだった。眼鏡を外してもう一度目を擦る。少し眼鏡が歪んでいる気がするけど、気づかない内にどこかで落としたりたかぶつけたかしたんだらうか。

「はよ帰ってこーい……」

寝転がって誰もいない天井に向かって呼びかけてみる。当たり前の話ながら、返事が戻ってくるわけも無い。人を呼んでくる、て言っただけだから勝手に部屋から出て行って入れ違いになるのも面倒だし、申し訳ない。

「退屈だ……」

立ち上がってストレッチをして固まった筋肉を解す。で、解すだけで終了。天井を見上げて光量の乏しい電灯にうつすらと眼を焼かせる。そして体を後ろに倒して自由落下。脳内ではマンションの屋上から落ちる映像を再生させる。

実際にそうなら僕はミンチだけど、今は背中にはベッドがある。絶対の安心と無念さを抱えて、安物スプリングの上に倒れこんだ。

「おっ？」

意外とスプリングがしっかりしている。予想に反して僕の体は心

地良く跳ねてベッドに沈み込んだ。この部屋においてこれは破格だ。唯一の入り口を見る。足音は聞こえてこない事は確認。なればやる事はただ一つ。

「ふんっ!!」

意味の分からない声を上げながらベッドにダイブ。ぼいん、とい感じの音をさせながら体が跳ねる跳ねる。子供じゃないんだからと思うがこれがまた意外と楽しい。いや、意外でも無いか。どうしてだかは分かんないけど、妙にハマってしまうこの行動。これは老若男女構わずベッドがあればやるはずだ!

上がって、下がって。上がって、下がって。また上がって下がって。

天井が近づいて遠ざかって、近づいて遠ざかって近づいてまた遠ざかる。

大した高さじゃないけど、僕は落ちてる。少しだけ上へと、手を伸ばせば別の世界に届きそうなのに届かない。触れられそうなのに触れられない。

落ちる瞬間に一瞬だけ感じる浮遊感。息が詰まる様な錯覚。それが病みつきになる。

何度もそれを繰り返す。繰り返し感じるカタルシス。その最中にリアルを伴った光景がまぶたの裏に浮かんできた。

どこか高い所から落ちる風景。それはビルの屋上だったり、階段の上だったり、建物の吹き抜けだったり。子供の頃から幾度となく見てきた夢の世界。だけでも似た風景を僕は見た気がする。気がするだけかもしれないし、そうでないかもしれない。もし落ちたのなら僕はここにはいないはずだけでも。

見たことのある景色に僕は記憶を探った。すぐ近くにそれはある。そんな気がした。出てきそうに出てこないそんなもどかしさ。あるかどうか分からないそれはきつと重要じゃないはずで、なのにと

うも気になる。後、少し。後少しで出てくる。そんな予感がして、僕は体を上手く使って高く跳んだ。

と同時に部屋のドアが開いた。

「……楽しいか？」

「……いえ、そうでもないですよ？」

高く上がった名残でボインボインと跳ねながら、そう女の人に嘯いてみる。あくまで退屈だったからです。決してこっというのが好きなのではないです。

恥ずかしさにつつすらと頬を染めながらも頑なに僕は主張してみました。結果は火を見るまでもなく、というかむしろ火を点けるのを見られたくらいに明らかではあるけど、あくまで否定の主張は止めるわけにはいかない。止めたからっていつてどうにかなるわけでは無いけれど。

僕の頭の中にある乏しい言葉を最大限に無駄に活用させて何とか弁解を試みるも、新たに入ってきた女性は「そうなのか？」と形だけは疑問形で、でもその表情はまるつきり信じていなく、逆に僕の主張など聞くに値しないとばかりにいやらしく口の端を釣り上げていた。ああ、ダメだ、この人は。もう自分の中で自分だけの答えを出してしまっただけやがります。

「いやはや、ああいう行為が好きなのは年齢性別性格問わないだろうな。やはり聞くのと見るのでは大違いだ。百聞は一見に如かず、とはよく言われるが、聞くのと見るのでは情報の質に大きな差異があるのは当然だとは思わないか？」

「何を見聞きしてそう思ったのかは置いときますけど、それに関しては一部分だけ同意しておきたいと思います。そもそもがシチュエーションによって優劣は決まってくるでしょうから」

「なるほどな」

「それに、百聞の方が一見よりもよっぽど有益な時もあるでしょうし。人を見る眼が無い人の一見と観察眼の優れた人からの百聞、どちらが意味があるかは瞭然でしょう？」

「もつともな意見だ。しかし、結局は当人の中でどのように処理されるかが何を差し置いてでも重要になる、という意見はどうだ？」

「得た情報を、ただの情報の羅列と見るか、それとも意味のある情報を抽出して自分の中で処理できるか、という意味では肯定しますね。後者なら百聞も一見も得られる情報が異なるだけで意義という観点では甲乙つけ難い、とも思いますが」

「道理だな」

それで、とここで一度僕の方から話を区切る。こういった問答は好きな部類ではあるけれど、とは言え見知らぬ人と延々と話すのもどこか話しづらい。

「ええっと、失礼ですがお名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「おっと、それは失礼したな」

女の人はもたれかかっていた壁から背中を離し、半開きだったドアを閉めようとす。が、閉じ切る直前ににゆう、と手が伸びてきてそれを遮った。

「ちよ、ちよ、ちよっ！　ちよおっと待ったあ！　アタシも一緒にお話したいんですけど！？」

ついさつき聞いた、かましい声がドア越しに聞こえてくる。だけれども女の人はまるで聞こえなかったかのよう、それこそ綺麗さっぱり脳に信号が伝わる前に接続を切断してしまったかのように極々自然な動作でドアを閉めていった。手ごと。

「痛いっ！ 痛いっす！ かなり痛いっす！ ちょー痛いっすよ！
マジで痛いっす！ 指がちぎれんばかりに痛いっす！」
「当然だ。指をこのまま潰してちぎり取ってやりたいと私は思っ
てるんだからな」

痛い痛いとどれだけ連呼するんだろうか、あの子は。そしてそれ
を聞いても平然としている女の人に恐怖を覚えたとしてもあながち
間違った感情でも無いと僕は思う。

「誰がここに来ていいと言った？ お前にはオフィスで待機してお
けと言ったはずだったんだがあれは私の妄想だったのか？ それと
も私が口に出したと思っただけで実は音になってなかったと
でも言うのか？ ん？」

「言いました言いました仰いました！ 仰いましたから力を緩めて
ー！」

「だったらどうしてここにいるんだ？ 上司の命令は絶対だと十分
に教え込んだと思っただがそれは間違っただけだ。そうそう、
そう言えばついさっきも勝手にこの部屋から出て行ってたな。そ
の時も私は『部屋を離れる時は誰かに連絡しろ』と伝えたはずだっ
たんだがそれに関してはどう私に弁解してくれるつもりかな、悠？」
「だ、だってだって連絡したところで『今、忙しいから』とか言っ
て誰も来てくれないんですもん！ 大体、課長だってカメラで監視
してるんだからいいじゃないですか！」

「当然だ。なにせ常にウチは人手不足だからな。ついでに言えば私
も忙しい。カメラなんぞずっと見てられるか」

口調は淡々としていながらもその課長さんはドアを押し込めてい
く。相変わらず口元を釣り上げて笑いながら。指の方は、心無しか
少し青ざめていつてる気がする。

このままだと寝起きで指がちぎれ飛ぶ、なんてスプラッタな光景

の目撃者になってしまいそうで、僕としてもそんな目撃はしたくないわけ。

「あのー、もう許してあげてもいいのでは……？ 十分反省してると思いますし」

「して、本音は？」

「朝から惨劇は見たくないです」

そう言うと、それもそうだな、とつぶやいてようやくドアノブから手を離れた。

挟まれてた方はというと、「ぬおお……」とうめきながら心底敬服して忠誠を誓った騎士のごとくかきずいていた。両手をプルプルさせながら。

「さて、話が途切れたな」

「そうですね。それで、えっと、何でしたっけ？ ああ、自己紹介でしたね」

「そうなんだが、その前に私は君に確認しなければならない事がある。もちろん真面目な話だ」

「何でしょう？」

真面目な話、なんて言葉が出てくる辺り、やっぱり今までは遊んでたのか。

そんな事を思いながらも「真面目な話」に相応しく姿勢を正して、座り直して女性を再度見つめる。彼女はガシヤンと椅子が上げた悲鳴を無視して座ると脚を組み、尊大な態度で僕を舐めつける様から上へと眼を動かしていく。上まで辿り着くと、細い目が僕を睨みつけた。

染めた様子も無い綺麗な黒髪は短くカットされて、やや紺色がかった黒のタイトスーツの中に全身を置いていて印象としてはやり手のキャリアウーマン、といった感じ。そうだった女性は、僕の中で

は少し怖いイメージがあるけど、その例に漏れずこの女性も似た感じだった。可愛いと言うよりは綺麗と形容すべき容姿は、街中では間違いなく男だけで無く女の人でさえも振り向いてしまうだろう。その程度には美人で、だけど見た瞬間に射殺されんばかりに視線は鋭い。その視線は、不幸な事に今は僕一人に向けられていて、部屋の温度が下がったような錯覚に陥る。さっき話し掛けてきたような気軽さは最早どこにも見当たらない。椅子に座り、テーブルに肘を突いて視線に射抜かれる僕は、さながら死を前にした罪人の様で。

「単刀直入に聞こうか。貴様は何者だ？」

そんな僕がマトモに思考を働かせることができるわけも無く、その質問の意図を理解しきれず、視線を右へ左へとさ迷わせた。視界の先で、彼女の視線もまた僕のそれを追尾し続けているのを感じ、ますます僕は答えに窮する。人間にとって、いや生物にとって極当たり前の、呼吸をするという動作さえ忘れてしまったかの様に僕は空気に溺れた。

「あ、え、つと……名前は雨水鏡と言いました……」

「そんな事は聞いていない」

何とか喉から搾り出したのは僕自身の名前、という何の変哲もない僕自身を表す記号でしか無くて、そしてそれすらもピシヤリと一刀両断された。

「雨水鏡、十八歳。一九八八年十二月四日生まれ、出身は大分県大分市佐ノ崎町二丁目五―三で本籍地は福岡県太宰府市岡出町一丁目四番。家族構成は、現在は母親一人で父親とは二歳の時に死別。その他兄弟はおらず親戚関係もほぼ皆無。この春の健康診断では身長一七二cm体重六一kgとやや痩せ気味だが至って健康。大学合格

を機に四月より福岡県福岡市鳥海の木造二階建てのアパートに転居。性格は真面目で成績・素行共に優秀。友人関係も問題無し。教師からの信頼もそれなりに厚かったが人前を嫌がり、大人しいために特に目立った存在ではなかった。スポーツ歴は小学生時に剣道をやっていたが中学入学と同時に退会し以降の部活動歴はゼロ。趣味は特に無く、ネットや読書をして過ごすことが多いが運動自体は嫌いじゃない、とは本人の弁。まだ続けようか？」

そう尋ねてくるが僕は答ええない。答えられない。

流れるように諳んじられた僕の情報に一切の誤りは無く、中学高校の通知表に書かれていた評価その他に到るまで詳細に調べられていた。全てが気持ち悪いほどの精度であり、恐らく僕に関することは徹底的に知られている事は、硬直した思考の頭でも容易に理解が可能だった。だから「続けようか」と言われても「いえ、結構です……」としか返しようも無い。

なら僕に求められてる答えは何か。それだけ調べても分からない、僕自身の事。たぶん、いや絶対に僕以上に僕をこの人は知っている。そんな人に提供できる情報など僕は持っていない。

「なら、なら何を聞きたいって言うんですか？」

「おいおい、まだとぼける気か？」

その口調には更に険が込められていて、顔には笑みがうつすらと浮かんではいるものの、ひどく苛立っているのが分かった。おもむろに立ち上がって僕のそばに近寄ると吐息が掛かる程に顔を寄せて、僕の胸ぐらを掴み上げた。

「私は忙しいってさっき言ったんだがな。聞いてなかったか？」

「そ、そんな事言われても本当に何の事だか……」

「ならなんで一昨日あんな場所にいたんだ？」

一昨日、というキーワードに必死で僕は記憶を探る。一昨日といえば朝から普通に大学に行つて、正祐といつも通りの掛け合いをして、後は家に帰つて一步も外に出ていない。「あんな場所」と言われても普段と違う場所に足を踏み入れた記憶は、記憶領域の端から端まで徹底的にさらつていっても、どこにも出てこない。だけでも知らない、と言つても目の前の人は決して信じてはくれない。

「課長」

どうすればいい、と頭を働かし始めたその時、落ち着いた声が僕の耳に入ってきた。

「もしかしたら本当に知らないんじゃないんですか？ それか記憶が飛んでるとか？」

割り込んできてくれたのはさっきまで床で悶えてた彼女で、容姿や声はそのままだけどテンションはさっきまでと違って落ち着いていて、場にふさわしい真面目な表情をしていた。

課長さんは考える仕草をして、ようやく僕から手を離し、「面倒だな。悠、パス」と彼女にあっさりとバトンを渡した。

悠、と呼ばれた彼女はため息混じりの吐息を吐き出して課長に変わつて僕の前に座る。

落ち着いた環境で初めて彼女の顔を正面から見た感想としては、課長さんとは逆に可愛い、という印象だ。だけでも、何処かで見ただけの顔、よくある顔、というわけじゃなくて、確かに僕は見ている。じゃあどこで、という話になるけど、それを思い出そうとすると思ふかんできた映像はあっけなく霧散してどうにも明確な像になつてくれない。

「よしつ、じゃあ一昨日の行動を順に思い出してみよっか？ 声に出しながら朝からね」

「あ、はい」

人懐っこい笑顔でそう言われ、僕はそれに素直に従う。そしてさつき思い返した内容を今度は声にして伝える。胸ぐらをつかまれた恐怖が残っているのか、それとも記憶を辿りながらなのか僕には判別がつかなかったけれど、途切れ途切れながらも話し、彼女はそれに口を挟まず黙って聞いていた。

「……以上です。特に変わった場所にも行ってませんし、何かをした記憶もありません。というか、これって何なんですか？ まるで取調べみたい……」

悠さんの態度に僕も落ち着きを取り戻し、頭の回転が元に戻ってくる。そして気づく。僕は明らかに何かへの関与を疑われていて、それを調べられてる。ベッドこそあるものの、圧迫感のある部屋や無機質なテーブルと椅子のみという構成はテレビの刑事モノで見る取調室にそっくりで、更には僕は監視されている、と言っていた。なれば、そういう事なんだろう。

課長さんの顔を見ると、課長さんは面白そうにニヤニヤとした笑いを浮かべていて、僕にはそれがひどく不快だった。

「何だ、今気づいたのか？」

「そりゃそうですよ。全く罪を犯したことが無いとは言いませんけど、少なくともこんな取調べを受ける犯罪を犯すほど落ちぶれてないです。僕は極普通の善良な一般市民のつもりです」

「はっ！ 極普通か」

彼女は笑った。それは明らかに僕を嘲って、侮蔑して、貶めてい

て。そしてその課長さんは普通、という単語にそんな反応を示した。善良でも、一般市民でもなくて。

「極普通の人間が今頃こんなところにいるかよ」

言いながら課長さんは胸元から一枚の写真を取り出して僕の方目掛けて投げつけた。一直線に回転しながら向かってきたそれはむき出しのカッターの様に鋭い切れ味を持っていて、僕は手を切らないように体全体で受け止める。

何とか落とさずに済んだ写真を胸元から剥がし、見てみる。見てみたはいいけど、僕は顔をしかめざるを得なかった。

「うわ……」

そんな声が自然と漏れていた。写真に写っていたのはグロテスクとしか言いようが無い真っ黒な何かで、それが人間物だと気づいたのは、頭や手の様な物が付いていたから。もっとも、手は肘のあたりで不自然な方向に折れ曲がってはいたけれど。

写真の中身はともかくとして、何故僕にこれを見せるのか。こんな写真一枚から何か情報を取り出せるほどにプロファイリング能力に優れているとは、天地がひっくり返ろうとも思えない。

「何ですか、コレ？」

黒焦げの人だと気づくと、余計に気分が悪くなる。こういった写真を見るのは初めてだけど、とても元人間だとは気づけない。何かで打ちつけられて折れた腕は、焼けたせいだろう、許しを乞うかのごとく手を宙に伸ばしていた。眼があつたであろう場所には、空洞がぼっかりと覗いている。

何もかもを失った人物。なのに、その顔はどこか笑っている様に

も見える。

「分からないか？ まあ、分からないだろうな。実際に目撃した私自身でさえも信じられないんだからな」

「何ですか。もったいぶらないでください」

「鏡クン、さつき話してもらった一昨日の事だけど、たぶんそれは三日前の事だよ。今日が何日分かる？」

「五月……十二日じゃないんですか？」

「今日は十三日だよ」

「そんなまさか。じゃあ僕は丸一日寝てたつて言っんですか？」

「寝てたつて言い方が正しいのかは分からないけどね」

そう言つと悠さんは写真を僕の手から抜き取り、ヒラヒラとひらめかせて改めて僕の目の前にかざす。

「この写真はね、鏡クン、君なんだよ」

「……え？」

何を言つてるんだろうか、この人は。こんな黒焦げになって生きているとは思えないし、百歩譲つて生きていたとしても、集中治療室に閉じ込められて治療の真つ最中に違いない。

「すみません、それは『本来なら君がこうなつてたよ』つていう類の話ですか？」

「それで済む話なら楽なだけだね」

悠さんは苦笑いとも疲れたとも言えない微妙な表情を浮かべた。その顔から悠さんが冗談を言っているわけでも無く、ましてや嘘を並べているわけでも無いというのが分かる。

つまり。

僕は本当に死んだという事になる。

「意味が分かんねえ……」
「そりゃコツチのセリフだ」

課長さんが割り込んでくるけど、それに応える余裕は無い。手で抱えられた頭の中ではグルグルといるんな事が渦巻いていた。死んだ人間が生き返って、それは僕で、そして今五体満足でここにいる。何故僕は死んだ？何故僕は生きている？どうして……僕は死ねなかつた？

「というわけでアタシたちも意味が分かんないんだよね。で、鏡クン、改めて聞くよ。何があつたか話してくれるかな？」

本当に、意味が分からない。考えるのも段々と億劫になつていき、僕は言われるがままに昨日の事を話した。

朝起きて大学行って正祐と飯を食つて。午後からも授業に出て時々寝て、どっかのサークルの飲み会に参加して。

参加して、参加して…参加して…それから？

「それから？」

「それから……あれ？　ちょ、ちょっと待ってください。それから……」

今日何度目か分からない記憶を探る作業。だけど、飲み会に参加したところから急激に記憶が飛んでいる。

額に手を当て、僕は正面に座る悠さんの顔を一度だけ見た。

覚えている。彼女の顔を。それはさつき確認した。だが何処で？彼女の怒鳴っている顔が浮かぶ。僕に向かって何かを叫んでいる。だが聞こえない。

そつだ、僕を責めているんだ。そして僕はその場を離れようとし

て、そして

「っ！」

とつさに僕は両手で自分の口を抑える事ができたが、その事を本気で褒めてやりたいと思う。やりたいとは思うが、その時に僕の口から出そうになったのが何だったのか、それはもう分からない。

それは、グロテスクな中身が自分だったと気づいての嘔吐感だったのかもしれない。

それは、自分が燃やされた事に対する恐怖だったのかもしれない。それは、まだ自分が死んでいないことに対する悲鳴だったのかもしれない。

いずれにせよ、人前で錯乱して叫ぶ、という醜態を晒さずには済んだのだけれど。

「どうやら思い出したみたいだな」

「……ええ、おかげさまで」

「大丈夫？」

「なんとか……大丈夫そうです。すみません、ココってタバコは大丈夫ですか？」

悠さんが確認するように課長さんの顔を伺い、そして課長さんはそれに対して自分もタバコをくわえることで応えた。

「本来ならここでもう一度聞くとこなんだが……どうやら本気で何も知らないらしいな」

「はい……たぶんアナタよりも僕の方が知りたいくらいです」

自分が何者か。それは思春期を迎えてから幾度となく繰り返し自問してきた問いではあるけれど、今のその問いかけは全く以て別の

意味を持ってしまった。

自分の存在意義への疑問から、完全に、根本的なまでに根源に近い問い。そもそも自分が人間であるかどうか、極端ではあるけれどそこから疑わなくてはならないのか、僕は。

「言つとくけどな」

と前置きして課長さんは煙を吐き出した。

「写真とお前が別人だ、ていう可能性はゼロだ。この人間かどうかも疑わしい状況から今のお前の姿まで回復していく様をウチの課のヤツが何人も目撃してる。無論アタシもだ。

想像以上にグロイもんだっただぞ、あれは。黒焦げた肌がみるみる内にピンク色の肉になって皮膚が再生していくんだ。折れ曲がった腕は何事も無かったかの様に元に戻り、ツルツルだった頭があつたという間に髪に覆われていく。さすがに服は元に戻らなかつたけどなあ、お前が今着てる服は課の人間のお下がりだからそのまま着て帰れよ」

タバコを吸い、ぼんやりしながら僕は「ありがとうございます」とだけ答えておいた。

半分ほど吸ったところでだいぶ頭も落ち着き、ようやく僕は自分から口を開くだけの余裕を取り戻すことができ、疑問を課長さんにぶつけてみた。

「……アナタたちは、一体何者なんですか？」

「さてね、答えてやってもいいんだが聞いてどうする？」

「どうするって……」

「もう少し分り易く言ってやろうか。仮に教えたとしてだ、それを聞いてお前は何をアタシ達にしてくれるんだ？」

「それは……分かりません。分かりませんが、それを決めるために情報が欲しいんです」

「情報？ おいおい、馬鹿を言ってくれるなよ。聞くけどな、お前は今まであんな何も無いところから火を放ったりするヤツを見たことはあるのか？」

「いえ、無いですけど」

「あんな派手にやらかしてるのにニュースにさえなってる。という事は、だ。全ては秘匿されてることだ。そんな極秘情報をどこの誰かも分からないヤツに教えろってか？」

「……」

「誰かが言ってたがな、人生ってヤツは準備不足の連続なんだよ。その中で選ばなきゃならない。お前に与えられた選択肢は二つ。アタシ達の味方になるか、敵になるか、だ。その二つ以外にありやしない。他の選択肢は許さない。他の誰が許そうともアタシが許さない」

「横暴ですね」

「横暴？ 大いに結構。だがそれがアタシには許されてお前には許されていない。それだけの話さ。しかしお前はラッキーだぞ、みんな？ 巻き込まれても死なずにここにいます。おまけに選択を許されているのだから」

明らかに見下した口調で、まるで出来の悪い生徒をあしらうかのように、あるいは駄々をこねる子供をあやすかのように僕に言い聞かせた。そして悔しいことにそれは事実だ。

どんな事態であつても十全の準備をして挑める機会などそうそうない。あるとすれば予定調和とも言える予め仕組まれた事件か学校のテストくらいだ。もっとも、そうであつても準備不足になることは多々あるのだけれど。

「確認ですけど、僕がアナタ達の組織 恐らくは警察みたいなものだと思うんですけど、入ればいろいろと教えてくれて、断れば何

事も無かったかのよう解放されるんですね？」

「そういうことになるな。当然、解放されても守秘義務は存在するがな」

「なら……」

そこで僕は言葉を区切った。口にしておきながら、その先の言葉にまだ僕は迷っていた。課長という単語や一昨日の僕にとってはまだ昨日だけど夜の様子からしてたぶんここは警察、もしくはそれに準じた組織であることには間違いはないだろう。少なくとも悪いところではないと思う。いささか乱暴な感じは否めないけど、それは仕方ないところだろう。向こうから見れば僕は得体のしれない存在なのだから。

魔法使い。超能力者。

そんな単語が頭に浮かぶ。一昨日の夜の景色。最後はアレな結末だったけど、幻想的な光景は未だ僕の中にこびりついていた。その中に僕も加わりたい。加われなくても、ただ眺めているだけでもいい。

触れていたい。あの世界に触れていたい。間違いなく僕はそれを望んでいるのだろう。

「お断りします」

なのに僕の口から出てきたのは真逆だった。

「そうか」

短く課長さんはそれだけ答えるとそれきり何も言わず部屋のドアを開けた。悠さんも何も言わない。少しだけ残念そうな顔をして、口元は何か言いたげだったが、僕も口を開かずその横を通り過ぎた。

「せつかくだから最初の質問だけ答えてやる」

「……」

「魔法使い、超能力者、異能者……呼び方は人それぞれだが、アレはああいうもんだ。一般的な人としての括りから外れた稀有な存在。目に見える武器を持たない、故に強大な暴力を奮うだけの力を手に入れた人間。そして故に暴力的な衝動によって厄介事を進んで引き起こす、世間から見れば八丈迷惑な奴らだ。そんな奴らがこの街には相当な数がある」

「いいんですか？ 部外者に教えて」

「この程度の情報なぞ構わんよ。だが覚えておいた方がいいぞ。お前が何を思って断ったかは詮索せんが、お前はもうコツチ側の人間なんだ」

背中では僕は聞いている。

「何しろの人間はあの場にいることすら不可能だからな。月並みだが、どうせ周りには自然と似た人間が集まってくる。類は友を呼ぶとも言つな。もっとも、友かどうかは知らんが。せいぜい気をつけるんだな。どうせ巻き込まれるだろうがね」

「ご忠告、ありがとうございます」

「感謝の言葉、ありがたく頂戴しておこう」

それを最後に扉がボタン、と音を立てて閉まった。まるで決別を表しているみたいに。ふう、と僕は声に出しながらため息をついた。だけど叩かれた肩に、また体を強ばらせる。

「本当に、いいの？」

「はい。大学もありますし、こういうのは片手間でできるものでもないでしょう？」

「そっか。そうだね」

本当に納得したのかは分からないけれど、悠さんは言葉の上では同意してくれた。そしてポケットに手を突っ込むと何かを僕の手握らせてきた。

「これは……？」

「うーん、備えあればうれしなっ！ てところかな？」

わざと言ってるのかは僕には判断しかねるけど、そんな軽い空気とは裏腹に渡されたのは拳銃だった。

デリンジャー。そういう方面に明るくない僕にも分かるほど有名な単発式の小型拳銃。手のひらサイズの見た目よりずっと重いそれを僕は握りしめた。

「いいんですか？」

「いいのいいの！ 君は悪用しそうにないしね」

「課長さんにバレたら大変なんじゃないですか？」

「モーマントイっ！ 書類なんていくらでもごまかせるから」

「じゃあ早速課長さんに告げ口してきますね」

「ちよっちよっちよっ！！ ちよっとタンマ、タンマで！」

「冗談ですよ」

言うやいなや悠さんは心底ホツとした表情を浮かべた。きっといつも課長さんにいじめられてるんだらう。いや、当人に取ってはイジラれてるの方が正しいのか。暴力的ではあつたけど。

「それじゃちよっとの間だけ眼をつむっててちようだいな」

僕がポケットにデリンジャーを仕舞うのを確認すると、唐突に悠

さんがそんな事を言い出した。言われるままに僕は眼を閉じる。視界が暗く閉ざされて、聴覚が研ぎ澄まされる気がする。そんなワケはないけど。

不意に吐息が耳にかかる。生暖かい、生気を感じさせるそれが悠さんのものであることは明白で、つい緊張してしまふ。それが向こうにも伝わったんだらう、小さく笑い声が聞こえた。

「んじゃね、バイバイ。また会うかもしれないけど」
「えっ？」

僕が言葉を続けようとしたけど、それは叶わなかった。

眼を開けるとそこには青空が広がっていて、辺りには息が詰まるほどの多くの人が歩いていて。何が起こったのか分からなかった。分からなかったけど、ここが大学の前だということ、そばに悠さんがいないこと、そして悠さんにあの夜注意してくれた事のお礼を言うのを忘れていたことを、振り返って校舎を見て理解した。

車がひっきりなしに行き交い、人もまた同じ。信号が変わるたびにたくさんの人が横断歩道を渡って、また車が道路を埋め始める。休日でも大学は変わらない。講義は無いけれど、部活生かサークル生だかが元気よく走り、活気だけ見れば普段とそう変わりは無かった。もうだいたい暑い季節が近づいているみたいで、僕とすれ違う人はみんな薄着になっていて、中には早くもキャミソールで歩いている女の子もいる。

ジリジリと陽が照って汗がにじむ。どうやら五月だというのに、今日は記録的な暑さみだった。ジリジリと僕の肌を太陽が焼く汗がじわりとにじむ。僕はその場を離れて家へと向かった。どこにも寄らず、誰とも話さず、真っ直ぐに。

スーパ一の脇を抜け、橋を渡り、エレベーターに乗り込んで部屋の鍵を開ける。機械的な動きだ。ポケットの中のデリンジャーを少しだけ強く握り締めていた事以外は。

家に帰りつくと僕は真つ先に風呂場へと向かった。そして汗ばんだシャツを脱ぎ、自分の体を鏡に映す。それなりの筋肉とそれなりの脂肪がついた、それなりの体。そこには一切の傷もその他の異変も無くて、見慣れた僕の体があった。

ジーンズのポケットからデリンジャーを取り出す。小さくて無骨という、どこか矛盾じみたそれを僕はゆっくりと自分の首に押し当てる。

安全装置替わりの重い引き金に指を掛けた。心臓の高鳴りが痛いほどに響く。

頭に過るものは何も無い。

そして僕は引き金を引いた。

目が覚めるともう日が暮れ始めていた。重い体を起こして身の周りを確認する。

自分が倒れていたのは記憶通りの風呂場であって、意識を失う前と何ら変わってなかった。一切の汚れも、一切の飛沫も無くて、拳銃の弾だけが壁にめり込んでいた。それを僕は眺めるしかできなかった。

僕の手から拳銃が滑り落ちて音を立てる。体から力が抜けて壁に背をつけながらずり落ちていく。それをどこか客観的に見ている僕がいて、現実感に乏しくて、だけでもここは悲しいくらいに現実で。

僕は声を上げて泣いた。

・第三話 以上、異常・

・第三話 以上、異常・

・零・

世界は優しいだなんて、何を間違ったらそう思えるんだい？

・一・

夢を見ていた。

夢らしくどこかぼんやりとした景色で、そこに何か有るのにそれが何かを認識できない。認識できないけど、それが何なのか、そこがどこなのかを何となく理解できている都合の良い世界。現実もそれくらい都合よくできていたら、と夢の中でさえも思ってしまう。夢にまで嫉妬するなよ、とも思わないでもないが。

それはともかくとして、その曖昧な景色から僕は教室にいることを理解した。それは大学や高校ではなくて小学校の教室。正面の黒板らしきものの上には、当時よく見かけていた、小学校の先生らしい綺麗な字で書かれた学級目標が掲げられている。何年生の夢なのだろうか。

それは分からないけど、教室の中には懐かしい顔ぶれが笑っていた。小学校の時、放課後よく一緒に遊んだヤツ、昼休みに一緒にバスケをやっていたヤツ、バカをやつてよく怒られていたヤツ。そいつらが一人も欠けることなくそこに立っていた。

僕はそいつらを少し離れた場所から眺めていた。その立ち位置がどこかは知らない。ベランダかもしれないし校庭かもしれない。もしかしたら宙に浮いてみているのかもしれない。それが一番しつくり来る。おかしいと思うけど夢なんだし、と深く考えずに僕は観察に専念した。眺めていると一段と懐かしさが込み上げてくる。あいつら今も元気にやっつてんのかな、なんて中学以来会うことさえしていない彼らにノスタルジックな感傷がじわりと胸の中に溢れてきた。今度、連絡でも取ってみようか。

彼らが今、どんな生活を送っているのか知らない。僕みたいに県外に出ているのかもしれない。けれどお盆くらいに連絡を取ればきっと繋がるだろう。

当時の連絡網ってまだ取ってあったかな。ずいぶんと薄れてしまった記憶を辿り、実家においてある机の引き出しの中にしまっていることを思い出す。今度実家に帰ったら確かめてみよう。と、突然僕の手の中に電話とその連絡網が現れた。

ああ、どうせだし今から電話かけてみるか。

夢だし、とやっぱり深く考えず、相手に連絡を取れるかどうかも分からないのに電話のボタンを押そうとする僕。

ええっと、あいつの番号は、と……

連絡網の先頭から順に辿っていく。それは極々普通の行為で何の変哲もないはずで、そうやって辿っていけばいつかは目的に辿りつけるはずだ。

なのに気づけば僕の指は連絡網の最後に到達してた。

あれ、と首をかしげる。右に四十五度ほど。そしてまた最初から辿り始める。そしてまた最後に到着。右に四十五度傾く。また最初から辿る。最後に着く。右に傾く。始まる。終わる。傾く。最初。最後。右傾。開始。終了。

何度やっても目的に着かない。見つからない。誰一人として見つからない。ますます僕は首を捻る。

なんでだろ？見つからない理由を探しに思考を巡らせる。視線を周囲に巡らせる。相変わらず楽しそうに談笑してる彼ら。そこに僕の姿は無い。いいなー、と僕も相変わらず傍観者に徹していて、ただ見つめているだけで、そして僕は気づいた。

名前、何だっけ……？

途端、ストンと自分の中で腑に落ちる。連絡網に見つからない。そんなの当たり前だ。

だって僕は彼らの名前を忘れていたのだから。それと同時に思い出す。当時の僕を。

僕は、彼らが嫌いだった。もっと正確に言うならば、僕は彼らが嫌いではない。彼らの在り方が嫌いだった。

もっとも、それは今になって言うことで、当時の僕がその違いを認識できていたかと問われれば迷わずに首を横に振れる。

彼らと一緒にいるのは楽しい。話をするのは楽しいし、一緒に遊ぶのも楽しかった。そしてそれと同時に彼らといると、時折ひどくイラついている自分があることにある日、気づいた。それは感性の違いに起因していると言えるかもしれない。

幼さ故のわがままで、周りを気にせず自分のわがままを押し通そ

うとする態度。言われた事さえ守れず、周囲に迷惑を掛ける同級生。何が面白いのか分からない冗談を口にしては笑い転げるクラスメイト。

それは僕には相入れず、そうした中に自分はいなければならなくて、そういつた周囲と同じ評価をされていくのがとても嫌だった。

彼らはあまりにも奔放で、あまりにも自由で、あまりにも年相応で。それがうらやましかった。何者にも縛られず、何にも気を遣うことはなく、ただ自分があるがままに存在していられる。

そんな、誰もが浸れるはずの微温くて居心地の良い時間。その中に彼らはあることを許されていて僕は許されていない。それは特権だけでも、特権と言うにはあまりに多くの人が持っていて、なのに僕には無い。それが僕は悔しくて妬んだ。

もちろんそれは僕の大きな勘違いで、僕にも享受する資格はあったはず。望めばきつと手に入っただろうと思う。だけでもその事に気づくはずもなく、それを僕は捨ててしまっていた。

夢の中の僕はそれらを思い出す。思い出した途端、目の前の彼らが消えていった。段々と姿が薄れ、空気に溶け込み、霧散していく。本当に、何とも都合の良い世界だ。

僕の視界も徐々に薄暗くなっていった。

夢が覚める。知覚とも予感ともとれる曖昧な感覚でそれを感じる。そしてまた不都合な現実が始まる。

夢が覚めていく。世界が壊れていく。それでも僕は隅っこに身を寄せて最後までそれに無駄なあがきと分かりつつも抗った。だけでも、だけでも弱くて無力な僕は猫に食い殺されるネズミに等しいままであっさり現実へと放り出される。

その直前。

何かが僕を撫でてくれた。

「……っあぁ」

自分の奇妙なうめき声に起こされて僕は眼を開いた。仰向けに寝ていたので最初に眼に入ってくるのは当然ながら天井で、だけでも見知らぬ天井だ、なんて事も無くて、一ヶ月間毎日寝起きに眺め続けてすっかり見慣れた極々普通の（ボロいので今にも板が落ちてきそうではあるけれど）天井だった。

起き抜けに枕元の目覚まし時計を手を取って時間を確認してみると、デジタルの表示は四時前を示してた。大学から帰り着いたのが一時過ぎだったから三時間弱寝たことになる。

「もちつと寝かせてくれればいいのに……」

とは言うものの、一度の睡眠が三時間というのはこの一週間だとかなり長い部類になる。まだ体にダルさは残るけど、それでも寝る前よりかはかなりマシだ。

ここ一週間、正確にはあの日取り調べから解放されてから毎晩僕は眠れていなかった。それは人生初の警察による取り調べに精神的ショックを受けたことが原因、とかではなくて、毎晩何かを起こされてしまうのだ。

一週間前のあの日。食堂で正祐と別れた後に感じた違和感、それを感じるのだ。あの時は気味の悪さだけが際立っていたけど、今となっては明確に感じ取れるまでに成長してしまっていた。「何か」が何なのかは分からない。分からないけど、そこに何かがあるとはつきり分かる。あの日の出来事がきっかけなんだと思われるそれは具体性が一切無く、ただ何かが起きている方向だけが分かった。しかも違和感は強烈。全く以て無駄としか言い様がない力だ。これが最近僕を心底悩ませてくれているのだからたまらない。

僕がもうのだと分かった日から四六時中いつだってお構いなしにその感覚は襲ってきていた。ご飯を食べてる時でも、授業を受けてる時でも、トイレに入ってる時でもそして寝ている時でも。どれだけ熟睡していてもその感覚が来れば眼が覚めてしまう。そしてその

時に僕は実感してしまうのだ。もう、自分が普通では無い事を。

人と違った力を持ちたい。そう思った事は一度や二度じゃない。だから、他の人と違うのだと感じれるのは喜ぶべき事なのかもしれない。けれど僕はこんなモノは欲しくなかった。僕が欲しかったのはあくまで普通の範疇を出ない、常識的な能力だった。

例えば天才的な頭脳であったり。

例えばプロのスポーツマンだったり。

例えば芸術的な感性だったり。

僕には才能が無い。だから別に特別な天才じゃなくても構わない。ただ、才能と呼べるものが欲しかった。

自分はこれを頑張っていける。努力していける。他人に誇れる。大多数の人間の中でも埋没しないアイデンティティが欲しかった。

だからこれは違う。努力もできず、人に見せることも誇ることもできない。死なない事が何の役に立つというのだろうか。誰かを喜ばせることができるのか。誰かを笑顔にできるのか。誰かを救うことができるのか。

のっぺらぼうの群衆の中で自分もまた顔を失っていく。失わざるを得ない。他人に見られ、視線を気にし、マジョリティに望まれる自分の仮面を被って生きていかなければならないのに、自分で終止符さえも打てない。誰しもに平等に与えられるはずの死でさえも僕からは取り上げられてしまった。

毎晩目が覚めて、グルグル回る終わりのない思考を繰り返して寝不足の朝を迎える。不死のくせして痛みも苦しみも飢えも乾きも疲労も感じる中途半端な体。まるで僕自身みたい。

深々とため息を吐き出し、メガネを掛けて部屋を見る。そして固まった。

「何でココにいるんですか……」

「んー？ 暇だったからだよ？」

何当たり前の事を聞いてんの？と言わんばかりの顔をして、そしてまた悠さんは手に持ったマンガへと視線を落とした。ちなみにそのマンガが僕のマンガであることは、本棚からそれが抜けている事から確認済みだ。ついでに言えば九〇cm四方のテーブルの上には一・五リットルのペットボトルとコップが置かれて、その周りには水溜りができている。記憶が正しければ僕は朝家を出る前にきちんと冷蔵庫にしまったはずなんだけど、

「あ、喉乾いたっしょ？ ジュース飲む？ それとも水の方が良いのかな？」

なんてノタマツテくれる。ココって僕の家だよな？と現状への疑いを脳内で連呼しながらも、差し出されたコップを受け取って注がれた炭酸飲料をチビチビと飲んでいく。

「それで、ホントは何の用なんですか？ ええっと……スイマセン、名前何でしたっけ？」

「ふえ？ まだ自己紹介してなかったっけ？」

名前は知ってるけども もっとも、悠っていうのが名前かどうかは分からないけど いきなり女性を馴れ馴れしくファーストネームで呼ぶ程僕は女性慣れはしていないし、自己紹介されてないのも事実なので僕は黙って頷いた。

「そっか、それは失礼しましたねっ！ 水城悠だよ。歳は二十歳！ 花も恥じらううら若き乙女！ 鏡クンよりも年上だけど悠って呼んでくれると嬉しいなっ！」

「なるほど、分かりました。とりあえずよろしくお願いします、水城さん」

「……鏡クンっていい根性してるよね？」

「お褒めの言葉ありがとうございます。ですけど、まだよく知らない女性を下の名前で呼ぶ勇氣はありませんので」

「本人が良いって言ってるのに？」

「そのうち慣れてくればご希望に添いますよ」

そう言うつと水城さんはブーツと、子供みたいに唇を尖らせて不服そうにする。けどすぐに「ま、いいや」と寝転がってまたマンガを再開した。

なんとも凶々しいお方だ。そう思ったが、これくらい凶々しい方がコツチとしても気を遣う必要がないので（もうすでにあまり気を遣ってないけど）僕としては好ましい。何より、この人も正祐と似た二オイがするので、多分近々「僕が失礼な態度を取っても大丈夫」な称号を授けられる第二号さんになるだろう。なんか響きがやらしいけど気にしない。

水城さんは寝そべったままテーブルの上のコップを取ると、そのままストローでズズーと音を立てて飲んでいく。別にどんな飲み方をしても構わないのだけれど、マンガは汚さないでくださいよ。

「それで水城さん。改めて聞きますけど、僕に何か用ですか？」

「んー……だから暇だったからだよ」

「暇だからって……そんな理由でほぼ初対面の男の家に来るんですか？　しかも家主が寝てる間に勝手に上がり込んで」

「鏡クンはメンドクサイね。そんなんじや女の子にモテないよ？」

「めんどくさい人間なのは知ってます。ですけど、それとこれとは別でしょう？　ていうか、他に部屋の物触ってないですよね？」

「あ、そうそう。ジューズごちそうさまです」

「水城さん」

ちっとも進まない会話にいい加減僕としてもイライラしてきたので、ちよっと強めの口調で名前を呼んだ。すると水城さんはふう、

と息を吐き出すと体を起こして、僕の方へと向き直ると少し真面目な表情を浮かべた。

「ホントに暇だったからここに来たんだけど、まあ確かに暇って理由じゃ納得できないよね。うーん、そうだなあ……強いてあげれば鏡クンに興味があつたからかな？」

「僕に、ですか？」

「うん。というか、鏡クンに興味わかない方が難しいと思うよ。なんてつたつてこれまで未確認の力だからね」

未確認。その言葉に僕の心が少しだけ躍った。特別だという言葉は僕に限らず誰にだって少なからず自尊心を煽ってくれる言葉だろう。人と違つていうのはそれだけで一種のステータスだし、特に「初めて」だと言われれば戸惑いを感じつつも何となくすぐつたい感触を覚えるはずだ、きつと。

ただし、それは本人にとって少なからず価値がある場合に限る。例えば「アナタの爪の生え方はこれまで確認されてないパターンだ！」なんて言われても何の価値があるのか一切分からない。だから何だ、という話だ。今回の話だって僕自身自分の能力に何の魅力も感じて無くて、むしろ邪魔だとすら思ってる。言葉に踊らされたのだから一瞬で、すぐにまた冷めてしまった。

「まだ鏡クンの能力が正確に何なのかはアタシにも分かんないけどね。もしかしたら発動条件があるのかもしれないし、制御できるかもしれない。もしくは死んでるけどすぐ生き返るのかもしれないけど。少なくとも死なないってだけでもレアスキルはレアスキルだよ」

「僕としては呪いみたいなモンですけどね。死ぬタイミングくらいは自分で選びたかったです」

「それに関してはアタシも賛成だよ。あんまり大きな声では言えな

いけどさっ」

こんな仕事してるしねー、と水城さんは明るく笑う。

たぶんこの人には僕みたいな人種の気持ちなんて分かんないんだろくな、と心の中だけでため息をつく。そう思うとスツと寂しさにも似た感情がわき上がってきて、僕は慌てて考えを振り払った。

「とまあ、これが一つ目の理由だよ」

「まだ他にあるんですか？」

「今のが一番大きな理由だけどね。後は鏡クンが心配だったっていうのもあるよっ」

「僕が何かやらかさないかの監視ですか？」

僕の頭に、この前水城さんからもらった小さな拳銃が浮かんだ。

あれは毎日カバンの中に入れてあるけど、もらった日に使って以来一度も触ってない。けど他の人から見ればそんなの分かんないし、あげた水城さんからすれば気になるんだろう。

その時に課長さんから頂いたアリガタイ忠告もあって、僕は皮肉を込めてそう言った。

「だけど水城さんはあっさりと「まあそうだねー」なんて同意してくれた。」

「能力者って能力が目覚めた後が一番情緒不安定になっちゃうんだよ。ウチの分析屋さんが言うにはね、他の人にはない『力』を使えるっていう優越感と『力』の暴力性の魅力、人としての枠組みから外れたっていう疎外感が精神の不安定性を誘発しちゃうんだとかナントカ言ってた。だから他の人が支えてあげないとすぐ暴力性に飲み込まれちゃうんだって」

「はあ、そうなんですか。まあ、僕の能力だとあまり関係なさそうですね」

「うーん、そうなのかなあ……でも確かに鏡クンのは暴力性とはあ

んま関係なさそうだねっ！ うん、良かった良かった！ 疲れてはいるみたいだねっ！」

「死ななくても疲れはするみたいですよ。寝なくても大丈夫だったらもつとこの体を楽しめるんでしょうけど、最近夜中に起こされる事が多くて寝不足なんですよ」

「あー、確かにこの部屋防音性悪そうだもんねー。ていうかよくこんなボロアパートに鏡クン住めるね」

「ハツハツハ、余計なお世話です。一応僕はこの城の主なんで、あんまり粗相をすると叩き出しますよ？」

貧乏学生なめんな社会人。

それはともかくとして、僕は最近感じる違和感の正体を尋ねてみるべきか迷った。水城さん本人は別として、この手の話題に触れるのは正直嫌だけど、このままずっと睡眠不足に悩まされ続けるというのはキツ過ぎる。そのうち慣れるのかもしれないし、たぶん死ねばまた健康な状態に戻るのだろうけど、それまで僕の問題がもつかどうか。きつともたない。僕は自分のメンタルの頑強さがオブラート並みにペラペラであることを知っている。

違和感が呪いだか魔法だけに関係してるのは、何の証拠も無いことだけれどほぼ間違いない。なれば尋ねる相手は必然的に限られてきて、僕にはドS課長に尋ねる度胸はアリの足先ほども持つてないので水城さん一択となる。

尋ねるべきか、それとも自分で抱え続けるか。散々迷ってようやく僕的大決心をして顔を上げると、いつの間にか彼女は柵からポテチを持ってきて勝手にパリパリと食ってやがった。決めた。後で絶対金請求してやる。

あっさりきっぱりと二つめの決心を下すと水城さんと呼ぶ。あ、床にこぼしやがった。

「ん？ どつたの、鏡クン？」

「人ん家でのアナタのフリーダムっぷりを後で小一時間ほど問い詰めたい気もしますがそれは置いときまして、ちよつと相談したいことがありまして」

「およつ？ なにかななにな？ 恋の相談かなー？ そうだよねっ、鏡クンも年頃だもんねっ。いーよー、お姉さんが聞いたげるよー。」

「いえ、物理の話です。特殊相対性理論で運動量を特殊相対性理論的に表現するのにローレンツ変換をしなければなりません、速度 V で移動する慣性系を考えた時に $x'' = x' + Vt'$ と $x' = x'' - Vt'$ という式を考えまして次に光速不変の原理から……」

「ええ？ えつと、えつと……」

「冗談です。本気にしないでください」

「むう、イジワルだね、鏡クンは」

「なら少しは色々と自重してください、二十歳」

そう言うつと水城さんはいじけた様に頬を膨らませて、あさつての方を向いてしまった。僕はというと別段悪いとも思わないので、むしろそんな反応が面白かったりする。あんまり意識したことが無かったけど、どうやら僕も目の前の女性に関しては課長さんと趣味が合いそうだ。あくまでこの人に関する一点に限る、というのは強く主張したいところではあるけれど。

「でも、水城さんに相談したいことがあるのは本当なので、良かったらコツチを向いてくれませんか、悠さん？」

わざと名前で呼んであげる。すると頬を膨らませたながらも、どこか嬉しそうにコツチを振り向いてくれた。

単純な人だ、と思いつつも何となく水城さんはこういうキャラが似合ってる気がする。内心で浮かぶニヤリ笑いを堪えつつも、僕はこの一週間の悩みをこの自称二十歳のお姉さんにぶつけてみた。で

きるだけ詳細に、いつ感じたか、どこで感じたか、何が分かるのか、覚えてる限りを話시켰た。どうしても僕だけが感じられる感覚的な話になってしまうので、どこまで伝えられたかは自信はないけど、何一つ客観的な情報が無いこの場で伝えられる精一杯だとは思う。最初は嬉しそうにこっちに向き直っていた水城さんだったけど、話がどうやら異能に関する事だと分かると黙って真面目に聞いてくれた。普段の態度はちょっとどころかだいぶ問題があると思うけど、先日の銃の事といいこういう所は素直に尊敬できる。

さつきからずっと難しい顔をして何らかの答えを導こうとしてくれている。適当な答えを返すでもなく、簡単な慰めをかけてくれるでも無く、本気で考えてくれている。きっと根っからの善人なんだろう。

しかし僕はこの相談に答えは期待していなかった。というより、水城さんでは、言葉は悪いけど不適當だろうと思う。僕が思うに、彼女は能力のユーザーに過ぎなくて、もっと根本的な原理や原因を考える人間は他にいる。車に例えるなら水城さんはドライバーで、もし僕の相談の答えを知っている人がいるとすればそれはメーカーの、研究や設計に携わる人間だろう。

でもそれでも構わない。たとえ答えが出なくても。言うなればこれは僕のエゴであって、もっと言えばストレス発散であり八つ当たりだ。突然僕を巻き込んだ彼女たちに無理難題を与えて、悩む姿を肴に酒を呑みたいなものだ。

彼女は結構長い時間悩んでた気がする。そう感じるのは僕がただ待っているだけだったからか、それとも悩ませていたことに居心地の悪さを感じていたからか。

自分の部屋なのに何となく落ち着かなくて、タバコを吸おうかどうか迷い始めた時、水城さんはようやくやく口を開いた。

「いくつか確認したいんだけどいいかな、鏡クン？」

「ええ、いいですけど。何か分かったんですか？」

「うーん、分かったとは言えないんだけどね」

そう前置きして、人差し指をピン、と立てた。

「まず、毎晩一回はその感覚があるんだよね？」

「ええつと、そうですね、毎晩では無いですけどほぼ毎晩ありますね。正確な時間は覚えてないですけど、時間はだいたい日付が変わったくらいが多い気がします」

「昼間も同じ感じで、時間はバラけてるのかな？」

「はい。ですけど昼間よりも夜の方が多いですね」

「んじゃ最後の質問。発信源の方向が分かって言ってたけど、一番感じる方向はどっちか覚えてる？」

「……難しいですね。何となくでもいいですか？」

「もちろん。具体的な数字とかは気にしなくていいよ。あくまで感覚で」

「そうですね……」

水城さんの言葉に従って、何となく、ホントに何となく思った方向を指差す。

それを見て水城さんは「やっぱりそうなのかなあ……」なんて漏らした。

「んーとね、たぶん鏡くんはアタシ達の場所を感じちゃってるのかな、て思ってる」

「……？ どういう事です？」

僕が尋ねると水城さんは「あんまり本気にしないでよ」と言ってく続ける。

「どういう原理だとかは分かんないけどね、鏡くんが感じた方向ってウチの部署がある場所っぽいんだ。ウチらは他の部署と違って基

本的に夜動くからね。訓練なんかをする時間も大体深夜だし」

「それで夜に感じる事が多いんですね」

「一度ウチに鏡クンは来たことがあるしね。元々レアスキル持ちの鏡クンだし、ウチに来た後から敏感になったことも考えると、ウチの部署にある何かに反応してるのかもね」

「だったら他の方向から感じるのはどうしてですか？ 全部が全部水城さんたちの方から感じてるわけじゃないみたいですし」

「うーん、そうなんだよね……そうになると、物じゃなくてアタシ達の存在に感じているのかも」

「水城さんたちがいる場所が分かるっていうことですか？」

「そ。モチロンアタシとか他のウチの課員だけじゃなくってね、街にたむろってる人とかにも反応してるんだと思うけど」

「でもそれじゃあ僕はそれこそ二十四時間ずっと違和感を感じないといけなくなりますよ？」

「ええっと、そうじゃなくってね、アタシたちが能力を使う瞬間を感じてるんじゃないかな？ ウチらはさ、みんな力を使う時に特殊な場ができるのさ。アタシたちはみんなそれを結界って呼んでるけどね、そいつを感じることができるとするとじつまは合うよ」

結界、か。またなんともファンタジーな言葉が出てきたな。

「結界があることはみんな知ってたけど、自分以外のそれが展開されてるのを外から分かる人なんて今まで聞いたこと無いから推測の域を出ないんだけどね。でも鏡クンならそれもありがちかね。何せレアスキル持ちだし。いいなあ、ぜひウチに欲しい人材だよっ！」

「僕としては平々凡々の人生の方がいいんでお断りします」

「だろうねっ。ま、確かにオススメはしないよ。平凡な人生生きられるならそれが一番さっ！」

「でも……たぶん無理なんでしょうね、そっいうの」

課長さんが言ったとおり、僕はもう一般人ではない。どれだけ言葉飾って、どれだけ自分だけが普通を主張したところでどれだけ意味を持つだろうか。紛れもなく僕は彼女たちの側に立っている。

「うん……アタシもそう思う。気の毒だけど、もうコツチ側に来ちゃったからね。戻ることはできるかもしれないけど、諦めた方がいいよ、きつと」

慰めをたっぷりと含んで水城さんが語りかけてくる。

「それに一度割り切っちゃえばさ、コツチもそんなに悪くないよ。仕事は大変だし、危険ばっかでいつ死ぬか分からないけど、鏡クンはさ、もう死なないんだし……」

「そうですね。確かに危険な職場だからこそ、僕みたいな死ねない人間が役に立つのかもしれないですしね」

なんとという皮肉なんだろう。死にたがりが死ねないが故に死に一番近い場所に立つ。本来なら願いが最も叶いやすい場所なのに、どこまで行っても願いは永久に届かないで見ているだけなんて。

また、諦めないといけないのか。思わずため息が出る。そう、諦めないといけない。受け入れないと僕はダメになる。僕は立てなくなる。絶望だけしか見えなくて、他の何もできなくなってしまう。だって他の願いを持たない僕の唯一の願いが絶対に叶わないのだから。

でも、僕は思う。もしかしたら、本当にもしかしたら、それこそ万に一つもなく億に一つもない可能性でも、この呪いを解く方法があるとするば。広大なサハラ砂漠から砂金一粒を見つける可能性に等しいとしてもあるとするば。そしてそれを手に入れる事ができる場所はどこかと問われれば。

「水城さん」

僕が知る限りそんな場所は一つしかない。そして幸いにも僕はそこに
入る資格を持っている。ならば

「僕を……」

アナタたちの組織に入れてください。

そう続けようとしたのに、タイミングを測ったかのように水城さ
んの携帯が音楽を奏でる。重厚な音を。……なんでよりによってベ
ートーヴェンの第五番なんだよ。

「ゴメンよ、鏡クン。急用ができちゃった」

「呼出ですか？」

水城さんはうなずいて「ひどいよねー、非番なのに」とブツブツ
文句を言い出した。

どうやら彼女は僕の呼び掛けに気づいてなかったらしくて、そし
て僕はそれに安心した。

（何を考えてたんだろうな、僕は……）

どうして彼女の側に立とうだなんて考えてしまったのか。たとえ
一般人ではなかったとしても一般人のフリはできる。そもそも彼女
たちのそばに寄らなければ巻き込まれる事も無くて、その意味なら
彼女たちを感知できる能力も悪くはない。感じればそこから離れれ
ばいいのだから。

彼女たちは向こう側。僕はこっち側。まだその二つの境は越えて
なくて、境そのものも明確。わざわざ自分から越えて境界線を潰し
てしまう必要なんてどこにもない。

それじゃお疲れ様でした、頑張ってくださいと水城さんを見送ろう。そう思つて彼女の方を見ると、何故か向こうも僕の方を見てた。やな予感がした。

唐突に彼女が手を伸ばす。ガツチリと僕の手をつかんで、この上なく朗らかな笑顔を浮かべて彼女は言った。

「んじゃ一緒に行くかうかつ」

・
・

半ば引きずられる様にして僕は水城さんと外に出た。その瞬間に僕は眼をしかめる。時刻はさつき時計を見たところ四時を回ったくらいで、アパートの二階から見た景色の中だと少しだけ陽が傾いた。まだ十分に陽は高いといえば高いけれど、ほんのりと夕焼け色に染まった空を眺めていると何だか物悲しい、しみじみとした感傷を覚えるのはなんでだろうか。

アパートの階段を駆け下りて、危うく転がり落ちてしまいそうになりながらも（水城さんは事も無げに降りていた）、かろうじてバランスを取ることができたのは、運動不足な僕としては僥倖だところそり自画自賛する。ボロアパートを背にすればすぐに小学校。そして右手には、なんて名前かは忘れたけど、あまり大きくはない川があつて、見る角度によつては僕の眼を反射した光が焼いてくれる。

「まさか歩いて行くんですか？」

「そーだよつ。結構近いみたいだからね。たぶん歩いて二十分くらいかなつ？」

二十分か。まだ水城さんたちがどんな組織なのかは正確には把握してないけど、ずいぶんとのんびりしてるな、と思うのは間違った感想じゃないと思う。呼び出されたくらいだから何らかの事件が起こったのは確かで、しかも結構緊急性が高いんじゃないかと思うんだけど、どうなんだろう？

「所詮アタシは後方の人間だからね。たぶんアタシに連絡が来た時点で班長とかはもう現場に出張ってると思うから、あんまり急がなくてもだいじょーぶだよつ。元々非番だったし」

隣をのんびり歩きながら水城さんが僕の疑問に伝えてくれた。しかし、それなら何故にあんなに慌ててアパートを出て行ったのか。鼻歌を歌いながら川沿いの道を歩くのを見ながら思う。おおかた、単なるノリで飛び出したんだろう。その理由とは言えない理由があまりにもハマリ過ぎてて、眠ったおかげで取れた疲労がまたズツと出てきた気がしないでもない。

しかし、しかしだ。僕はどうするべきだろうか。横目で僕の左手の先を眺める。

男としては細い方だと自覚している僕の指よりも更に一回り細くて白い指が、僕の指と絡んでいる。太陽とは違う温かさが皮膚ごしに伝わってきて、女の人に慣れていないから少しドキドキするのは隠せない。

今はまだ人は少ないけど、もうすぐ大通りが近づいてきて歩く人の数も増えてくる。そんな中にこのまま突入するのも気恥ずかしい。例えば知り合いが誰もいないとしても、だ。

気づいてるのか気づいてないのか、隣の水城さんは特に気にした風もない。そうなるとコツチで一人だけドキドキしてるのも何だか間抜けな気がしてきて、今度は彼女に教えて離してもらうか、それともそつと手を外すかという選択に頭を悩ませる。女の人と手をつ

ないだままというのも悪くは無いのだけど、どうにも居心地が悪い。

(だけど……)

だけど、まあ、なんだ。こんな経験も僕という人間を冷静に考えてみればそうそうあるワケでも無いだろうし、彼女が気づくまでずっとこのままでも良いかもしれない。彼女が自発的に気づいた時の反応によっては、からかってみるのも一興か。

風になびいている黒髪が僕の目元をくすぐるのを感じつつ、僕はそんな事を思った。

そうして夕方の涼しい風を浴びながら、アパートを出て僕の腕時計できつかり二十分経ったところで僕らは足を止めた。

着いた場所は、有名な大きな公園の近くにある細い路地が入り組んでる所で、近くにはこれまた有名な私立学校が建っている。甲子園にも結構出場してる強豪校で、夕方のグラウンドでは僕には無い若さをこれでもか、と蓄えた高校生が一所懸命に練習に勤しんでいた。一方で正門からは授業を終えたばかりの帰宅部生が次から次へと吐き出されてて、気怠そうにカバンを肩に担いで帰路についている。彼らは一緒に帰る友達としゃべりながら横目でチラチラと、手を繋いでる僕らを羨ましそうに見ている。

「はろーっ、ヤマさん！ おつかれさまー」

わけでは無くて、僕らを挟んで向こう側にある、車一台がなんとか通れる程度の路地を見ていたらしい。それもそのはずで、その路地にはパトカーが停まってて、路地自体はテレビとかでよく見る黄色いテープで封鎖されてる。何か事件が起こったのだと一目で分かるし、そりゃ誰だって気になるだろう。

で、水城さんかというと、そのテープの前に仁王立ちしているガタイのいいお巡りさんに馴れ馴れしく声を掛けていた。呼び方から

して知り合いらしく、向こうもすぐに水城さんに気づいて白い歯をのぞかせた。

「ああ、水城ちゃん。お疲れ。今日は非番じゃ無かったっけ？」

「非番だったんだけどねー、課長に呼び出されちゃったんだよ。せつかくのお休みなのにさっ！」

「仕方ないよ。ウチはそんなに人数に余裕があるわけじゃないから」「そういえば条二さんは？」

「高村さんならまだ入院中だよ。この前のは大変だったみたいだしなあ」

「あー、この前のはね。まさか相手もあんなにいたとはアタシも思わなかったよ」

身の内話が繰り広げられる中、僕は黙って隣に立っていた。とうかそれしかやりようがない。話の内容からたぶんこの前の、僕が一度死んだ時の事だろうと当りをつけてその時の事を思い返す。確かにあれはかなり派手にドンパチャってた気がする。そういえば、バンバン拳銃とかマシンガンとかぶっ放してた気がするけど、問題にならないんだろうか。

とそんな事をツラツラと考えていると、水城さんと話してたヤマさんなるお巡りさんがこっちを見てた。そしてニヤツと笑った。

「コッチは水城ちゃんの彼氏さんかい？」

「あつははー、それならいいんだけどさ、残念ながらアタシじゃなくて課長の想い人なのさっ！」

いや、ちょっとマテ。いくらなんでもそれはキツイですよ、水城さん。年齢差にはあまりこだわりが無い僕とは言え、課長職に就けるほどの年齢の人とは難しいですよ。

ああ、ヤマさん。お願いですからそんな同情イッパイの目で僕を

見ないでください。

「まあ、その、なんだ……頑張れよ、少年」

「いや、何を頑張れと?」

ヤマさんは僕の素朴すぎるはずの疑問を華麗にスルーしてくれて、水城さんは水城さんで「もうみんな来てる?」なんて違う話を始めていた。誰か僕の質問に答えてください。

「今はもう犯人の包囲が完了してるはずだ。テープのすぐ後ろからもう結界範囲だからな」

「おっけー、ありがと、ヤマさん」

「ああ、どうでもいいけどさ、水城ちゃん。いくら課長が来てないからって手はそろそろ離しといた方がいいと思うぜ、俺は」

「ふえ?」

間の抜けた声を上げながら水城さんはゆっくりとコツチを見る。

そして視線が少しずつ下に降りていく。

僕は意地の悪い笑みを浮かべながらその様子を眺めてた。さて、どんな反応を見せてくれるだろうか。何事も無かったかのように手を離すか、それとも逆に面白がって握り続けてくるか。意外と顔を真っ赤にして手を振りほどくかもしれない。それはそれでからかい甲斐があって面白そうだ。

「……!」

だけどそのどれでも無かった。彼女にしては相当に乱暴に僕の手を思いっきり振り払う。そのまま僕から一步、というには大き過ぎるほどに下がって僕の顔を見た。

「あ…えつと……」

表情は真っ赤とは正反対で、血色の良かった肌は今ではもう青白くなってしまうてた。あまりの行動に僕もヤマさんも呆気に取られ、だけでも僕の見限りだと彼女自身が一番ショックを受けているみたいだ。

「水城ちゃん、そりゃちょっと無いんじゃないかな……」

「そうですよ。いくら僕でも傷つきますよ……」

冗談めかしてそう言ってみるけど、彼女からはあまりちゃんとした反応は返ってこない。あ、とか、う、とか意味の無い声だけが零れるだけで話が続く気配は無かった。

顔面蒼白で、心なし震えてるようにも見える。何が水城さんをそうさせたのかは分からないけれど、された僕自身もショックだった。たった今まで、例え向こうが意識して無かったとは言っても手を繋いでいたワケで、それが急に、それこそ汚物を振り払うかのように途切れてしまった。かろうじてヤマさんの言葉に続けることはできたけれど、僕の気持ちは嫌われてしまったかの様に冷え切ってしまった。

「とりあえず早く中に行ってきなよ。唯ちゃんもきつと待ってるよ」
「あつ、うん。そだねー！」

んじゃヤマさんも頑張つて、と殊更に明るい声で水城さんは誤魔化した。その誤魔化しさえも更に誤魔化すかのように急々とポケットから何かを取り出して、黄色と黒の縞模様に見えるテープをくぐって行く。僕も後に続く。

その一瞬、彼女は笑顔を浮かべて再度僕の手を握ろうとしてきた。けれどその手は明らかに恐々としていて、笑顔の奥には何らかの怯

えがあつたのを僕は見逃せなかった。

「少しだけ手を後ろに引き、彼女の手が空を切る。そして「どうぞ」と彼女に先を促した。彼女には似合わなさそうな悲しそうな表情を少しだけ浮かべて、でも僕を責めるでも、冗談を言うでもなく「ついてきてね」とだけ言った。僕はその言葉に従うだけ。今の僕にはそうすることしかできなかった。彼女の後ろに続いて数メートルも進んだらどうか。僕は辺りの空気が変わったことに気づく。」

音の乏しい世界。風の無い世界。変化の無い世界。すなわち、死んだ世界。

どう形容すればこの場を表現できるのかは僕の乏しいにもほどがある語彙では一向に分からず、かと言って他の人に聞いてもうまい言葉はきつと見つからないだろうとさえ思える。気味の悪さはどうにも僕の背を、服の中に入り込んで這いずり回っているみたいで、その全身にまわりつく違和感に僕は覚えがあつた。

そしてそのカケラを僕は知っている。

「これは……」

「うん。たぶん鏡くんが感じてるっていう違和感ってコレだよな？ アタシとかはもう特になんとも無いけど、まだ日が浅い鏡くんなら結構気持ち悪いと思うんだけど」

「これが境界ってヤツですか？ 確かにそうですね、これが感覚としては一番近いと思います」

目に見える表面的な景色は変わらないけど、境界なんて大層な名前の通りここは外とは違った。なるほど、あの時僕は「世界が隔離された」と表現したけど、それは正しかったということになる。実際に僕らが生きてるのは異なる世界。それは確かにここにあつた。

「ココって誰でも入れるんですか？」

「いんや。展開した本人が意図しない限り外からは誰も入れないよ」
「え、でもそれじゃ変ですよ。それなら僕はあの日この中に入れなかったはずですよ」

全ての元凶のあの日、僕はこの結界の中に入った。それは確かにはず。じゃないとあの戦闘を見る事は無く、僕が死ぬことも、死ねないとも無かった。

「うーん、それもそうだよね……また一つ謎が増えちゃったねっ」

「ねっ、じゃないですよ。いいんですか、そんな適当で」

「いいんじゃない？ だって鏡クンって変な人だし」

「特殊だっけって言ってください。僕は至って普通の人間です。まあ、能力については変なのは認めますけど」

「ならいいよね？ 問題オールナッシングっ！」

何か英語の使い方がおかしい気もするけど、いいや。能力についても、こんな能力を持つてるのは僕一人だということだし、別にどんな能力を持っていようがこの人の中だと全て「変」の一文字で片付くのだろう。あんまり考えるのは得意じゃ無さそうだし。

「じゃとりあえずアタシはこれからお仕事だから、鏡クンはアッチの車の中で待ってて。連絡はしといたから」

そう言って指さした先には一台の、少し大きめのワゴン車があった。ココにいても何もできる事は無いし、おおかたまた銃弾飛び交うドンパチが始まるだろうからどっかに退避するのに異論は無いけれど、そもそもの根本的な疑問がある。

なんでこの人は僕を連れてきたのだろうか。僕がココにいたって何もできないというのに。その疑問を口にしようとした瞬間、小さな影が僕の視界の下の端を横切って水城さんへと飛び込んできた。

ドフツ、といういささか鈍い音を立てて水城さんの腹にぶち当たったけど、当の本人はなんとも無いらしくにこやかな笑顔を浮かべていた。

「おー唯ちゃんじゃないかー。唯ちゃんはいっつも可愛いねー。元気だった？　と言つても昨日会ったばかりかだけどねー」

飛び込んできた女の子は彼女に抱きついた状態で頭だけをコクコクと上下に振った。水城さんよりも頭一つ弱小さく、ゴシック系の黒いフリフリした服を着て髪はツインテールにまとめている。パツと見は小学生かとも思つたけど、顔立ちは幼いながらも何処か成長しきつた感じも否めない。

「おーい、唯。勝手に持ち場離れんなんて……おっ、悠じゃん。おっす」

「クン、おっ疲れー」
「来て早々ワリイけど、もうすぐ始まつからお前も早く持ち場につけよ」

建物の影から現れた佳人、と呼ばれた男性に僕は覚えがあった。やっぱり同じあの日、剣を持って一番激しく戦っていた人だ。羽がついてるみたいに跳び回って戦っていたあの光景は、今でもきちんと僕の中に残っている。

佳人さんは水城さんに向かってインカムを投げると、捕まっている唯ちゃん的首元をむんず、とつかむ。そしてデレデレした顔で頭を撫でて水城さんから取り上げると、そのまま引きずるようにして出てきた場所に戻っていった。唯ちゃんは唯ちゃんですら抵抗することも無く、引きずられながら手を小さく水城さんに向かって振って去っていった。

「うーん、残念。もうちょっと唯ちゃん撫でてたかったなあ……」

「小さい子でしたけど、何歳なんですか？」

「鏡クン、女の子に歳を聞くのはマナー違反だよ？」

「アンタは自己紹介で思いつきし言ってたじゃないですか……」

「自分で言うのはモーマンタイなのさっ！」

「さいですか……」

メンドクサイなあ、とは思うがまあ、女の人っていうのはこんなものなのかもしれない。水城さんだけがこんな人なのかもしれないが、そこは置いて。

佳人さんはもうすぐ始まる、と言った。その割には横にいる人はずいぶんとのんびりしてるし、なんというか、会う人会う人みんな緊張感が感じられないのはなんでだろう？もしかして今日の仕事はそんなに危なくないのだろうか。

と、そんな事を思ってたら。

数十メートル先でビルの壁が爆ぜた。

五階建てマンションの一角にポツカリと穴が空き、円形に欠けたそこからは奥のビルが見えてる。それを僕は呆気に取られて眺めていた。

「鏡クンは車に走って」

「え？」

「早く！」

水城さんの鋭い叱責に僕は身を縮こませられる。何かスイッチが入ったみたいに彼女の声は厳しい。年中幸せそうな笑顔はすっかり消え去って今は視線をただビルだけに向けている。

弛緩した風を感じていた場の空気は、今ははち切れそうなくらいに張り詰めてる。一步踏み出すだけで、一度呼吸を吐き出しただけで全てが台無しになりそうな緊張感がそこにある。

また一つ、隣のビルが欠片をばら撒く。小さな破片が足元まで転がってくる。それをきっかけに僕は走りだした。

いつもより軽くなった体。それが車まで十メートル近くあった距離を一瞬でゼロにする。黒をベースにしたやや天井の高いワゴン。ルーフの上には何やらアンテナのような機械が載せられていた。

鋭い風が吹いたような気がして、僕はドアに手を掛けたところで後ろを振り向く。そこに水城さんの姿はもう無かった。緊張に体が強張る。正直、この場から逃げ出したい。逃げ出したいけど残念ながらそういう訳にもいかない。

車の窓には黒いフィルムが貼られ、更にカーテンが閉められて中の様子をうかがい知ることは不可能。一度大きく深呼吸して瞑目。そして意を決してドアを横にスライドさせた。

ドアを開けると暗い車内に外からの光が差し込んで、中が見える程度に明るく照らす。それでもだいたい暗い車内に人影が一つ、二つ、三つ。開けたのとはぼ間を置かずして計六個の、猫の様な瞳が僕を捉えたのが分かった。

首を絞められたみたいなのな圧迫感が僕を襲う。生き苦しい。いや、息苦しい。

「あ、あの、水城さんにココに来るように言われたんですけど……」

無言の圧力に耐えかねて言葉を発した僕だったけど、その声は喉がカラツカラに乾いた時みたいにひどく聞き取りづらいもので、口の中もネバネバする。

上手く相手に伝わったのかは分からないけど、三つの人影の内二つは視線を元のモニターに戻し、一つは僕とワゴンの奥の方を行ったり来たりしていた。だけど何も言っではくれないし、モニターを見ている二人もチラチラとまだ僕の方を見ていた。暗がりで見えにくいけど右手はコンソールを、左手はベルトに取り付けられたホルスターに、いつでも届くようスタンバイされているのが分かる。

「鏡くん、かしら？」

どうすればいいのか、分からずに立ち尽くしていると奥から声が掛けられた。まだ人がいたのか、と車内に首を突っ込んで声の方を見るとモニターを眺めている女性がいた。

「何してるの？ 早くコッチに来なさい。ああ、ドアはちゃんと閉めてね」

促されてワゴンに乗り込むと言われた通りに女の人の方向に向かう。僕に向けられていた視線はもう消えて、みんな何事も無かったみたいに仕事に戻っていた。

車内に作られた仕切りをまたいで女の人の隣に来ると「座つていいわよ」と言われ、またそれに従う。

隣に座るとモニターの明かりで彼女の容姿が分かる。髪の色は分かんないけど結構な長さがあつて、目元には縁の太い眼鏡がある。機器の排熱のせいなのか、車内は少しムワツとしてるけどその中で平然とスーツの上に白衣を着て、腕と足を組んでモニターを見ていた。

「初めまして、鏡くん。ようこそS・T・E・A・Rへ。私は三班分析チーム主任の七海です」

「あ、はい、雨水です。宜しくお願いします」

「雨水君ね。フルネームは雨水・鏡でいいのかしら？」

「はい」

「なら雨水君って呼ばせてもらおうわ。下の名前で呼ばれるのあまり好きじゃないんでしょう？」

「え？ そうですね、よく分かりましたね」

「分かるわよ。『鏡くん』って呼んだ時に少し顔がひくついてたも

の

そんな自覚は無かったのだけだな。さすがは分析屋さん、か。水城さんが言ってた分析屋さんってきつとこの人のことだろう。

しかし、それならこつちも注意しないとイケない。人となりが分からない内に油断すると弱みを握られかねないし、何より勝手に僕の事を理解されていくのは気持ちイイもんじゃない。ましてや、僕自身も知らない何かを暴かれるのはゴメンだ。

「あら、あんまり緊張しなくていいわよ。別に悪いようにはしないから」

「……」

「ふふ、ごめんなさいね。人を分析するのが仕事だから、誰でも無意識のうちに観察しちゃうのよ」

何と言うか、やりにくい。余裕を持った大人の女性といった感じで、何を僕がしようとも読まれているようで、まだ出会って数分と経ってないけどすでに掌の上で遊ばれているみたいだ。気をつけないと一方的に遊ばれて終わってしまうし、この手の人は悪意なしで人を弄んでくるから質が悪い。はあ、と息を一度ついて自分を落ち着かせる。そして顔にキュツと力を込める。

「あら、表情を誤魔化すのは得意みたいね」

「数少ない得意技ですから。さすがに腹芸はできませんけど」

「その歳でできてたら将来が楽しみね。それにこの状況でそれだけ落ち着けるなら大したものよ」

「緊張してるだけですから。それにこんな戦闘に巻き込まれるのは二度目ですかし」

「そうなのかしらね。ナオの言ったとおり面白そうな子。あ、ナオっていうのはウチの課長の事。会ったことあるでしょう？」

「ええ、ありますよ。寝起きからいきなり取り調べっていう結構ハードな状況でしたけど。ちなみに僕の事を何て言っていました？」
「『いじめ甲斐がありそうだ。悠と違った意味でな』だそうよ？
良かったわね、気に入られてるみたいで」

全力で勘弁して欲しい。あの人はどんだけ人を弄るのが好きなんだ。その役目は水城さん一人で十分だろうに。

「それより、お仕事の方は宜しいんですか？ 僕と話してばかりいますけど」

「ああ、いいのよ、別に。アナタとお話するのが今日のお仕事だから」

「どういう事ですか？」

「雨水君に私たちのお仕事を知ってもらうのが今日アナタをココに呼んだ理由。だから何でも聞いてちょうだい。大体の事は教えてもいいって許可は出てるから」

「……僕は入りませんよ。今日も強引に連れてこられたみたいなんですし、興味が無いとは言いませんけど、教えるから入れというのならお断りします」

「あらあら残念、つれないわね。でも勘違いしてるみたい。いえ、わざと気づいてないふりしてるのかしら？」

「何が言いたいんですか？」

「そうねえ、この際だし、はっきりさせちゃおうかしら。雨水君に選ぶ権利は無いのよ」

言いながら七海さんは楽しそうに口端を吊り上げる。

「もうアナタがウチに入るのは決定事項なのよ。力に目覚めながらも理性を失わなかった時点で」

「決定事項って……強引過ぎじゃないですか？」

「ま、普通の感覚で考えれば強引も強引よね。でもそれがまかり通るのがウチの凄いとこなのよ」

「……出るここに出てもいいんですが？」

「結構よ。でも、何処に出るのかしら？」

「そんなの決まってるよ。弁護士にでも話して……」

「それで法廷に訴えるって？ 被告もいないのに？」

「被告がいなくてどうい……」

「単純な話よ。私たちは存在していないのだから」

「何を言ってる……」

「言葉通りよ。私たちは組織として存在が認められてないの。そもそも、アナタは今まであんな手から火を出したり剣を作り出したりできる人間を見たことがあつて？ 無いでしょう？ つまり秘匿されてる。彼らはこの社会で存在が認められてないのよ。」

でも彼らは確実に存在してるし、事件は起こる。となると事件そのものを無かった事にするの。で、『何も無かった』という処理をするにも普通の人間がやれば跡が残ってしまう。ならどうすればいいか。答えは簡単。存在しない人間が処理をすればいいのよ」

それはつまり。

能力者がとも、そういう存在である以上生きてると認められなわけ。生きながら死んで死にながら生きる。一生陽の目を見ない、暗い穴ぐらの中で過ごすのと同義。なんだ、と冷たくなっていく自分の内を感じた。

なら僕はあの日……ホントに死んでたんじゃないか。

「結局、僕程度じゃどうしようもならないって事ですか……」

「一応選択肢も無くは無いわよ。教えてあげましょうか？」

「お願いします」

「ナオの下でいびられながらこき使われるか、それとも一生鎖に繋がれて幽閉されるか」

「どっちも死ぬより辛そうですけど前者でお願いします」

分かつてはいたけど、最低な二択だ。どっちに転んでもいいことなんてありやしない。肉体的に死ねないなら、後者だとたぶん本気で糞尿垂れ流しながら餓死のち蘇生を繰り返してしまえそうだ。それなら少しでも前向きな選択肢を選ぶ方が賢明なんだろう。

あんまりにもあんまりな選択肢。素晴らしすぎてため息が出る。

「スイマセン、ココって禁煙ですか？」

「そうねえ…… ちょっと休憩しようかしら」

そう言っただけ七海さんもポケットからシガーケースを取り出した。僕もズボンからくしゃくしゃになったタバコを取り出して火を点け、目を閉じる。

馬鹿みたいだと本気で思う。あんなに意固地になって「入るものか！」とか思ってたのに、結局僕の力じゃ抗うことなんてミジンコほどもできなかった。ああ、馬鹿らしい。

でも少し気持ちが楽になった気がする。いや、少しじゃないな。だいぶスッキリした。少なくとももうこの事で悩むことは無いし、何より「僕に選択権は無かった」という免罪符を手に入れたからだろう。誰に対する免罪符かは知らない。僕自身に対するかもしれないし、誰よりも僕に普通の道を歩んでほしいと願っているだろう母さんに対してかもしれない。

「あら、そろそろ終わりそうね」

七海さんの声に視線をモニターに移すと、どうやら戦闘は佳境を迎えてるらしかった。

映像の端に映るマンションらしき建物はあちこちが崩れ落ちて、あたかも本当の戦場にいるかのような廃墟と周囲は化していた。元

はアスファルトで綺麗に舗装されていたはずの道路も見るも無残なまでに破壊されてる。「能力というのはね」

モニターの中心には男が一人、頭から血を流しながら立っていた。体全体の線が細くてヒョロい、と表現できるほどに見た目は弱々しい。顔色が悪いのは怪我をしているせいではないはず。視線が不規則にあちこちに飛んで何処を捉えているのかも映像からだとは判断できなくて、でも正気ではないという判断は誰が見てもできるはずなまでに彼は異常だ。

病弱な感じさえする彼の姿が突然かき消える。モニターの映像が一拍遅れて彼の姿を捉えると彼の細腕が容易く建物の壁を砕いていた。粉碎、という言葉が似合うほどにコンクリートの壁が細かく砕かれ、地面に即席の砂場を創り上げる。

「その人自身の経験や願望に強く影響されるの。人格形成に大きな影響を及ぼす程の体験だったり、または心の奥底に深く根付いている妄執ともいうべき願い。この彼の場合は、たぶん自身の線の細さや体力の無さがコンプレックスだったんでしょうね」

「分かるんですか？」

「能力が発動したからと言って見た目の体つきが極端に変わることには無いわ。彼の力はたぶん身体強化。手足の細さから言ってそれ以外にこのパワーは出せないもの」

「僕だけかもしれませんが、前に結界の中に入った時に体が軽くなつた気がしたんですけど、それとは違うんですか？」

砕いた瓦礫に体勢を取られた隙に、誰かが飛び掛かった。おそらくは蹴りだろう攻撃を受けて家々の塀を盛大にぶち壊しながら吹き飛んでいく。

「通常、能力者が結界内に入ったおかげで得られるのは、せいぜい世界的なアスリートの身体能力を超えた程度でしか無いわ。ジャン

「ブルで言えば……たかだか垂直跳びで二メートルに届くかどうか、
つてところかしらね」

「それでも十分スゴイですけどね」

「ま、元々の身体能力によってバラツキはあるわ。でも身体強化能力だとスピードを多少失う代わりに常識外れのパワーを手に入れるわ。それと物理的な防御力を」

ぶち壊された瓦礫の下敷きになりながらも、男の人はむっくりと起き上がる。血こそ流しているものの骨とかには影響は無いらしく、荒い息を吐きながら体勢を低く取る。

「攻撃力と防御力に特化したタイプですか。ゲームで言えば戦士みたいなモンですね」

「だけどこの能力はひどく大きな欠点があるの。何か分かるかしら」
「欠点ですか？」

「だけどその荒い息は、それまでの獣めいたものではなくて、どちらかと言えば苦しさ故のものに見える。酸素が足りないのに、それでも無理やり走らされているハムスターのように。」

「燃費が悪いのよ」

剣を携えた佳人さんらしき人が男に向かって飛び掛かる。抜刀術みたいな動作で斬りかかり、男の反応が一瞬遅れる。

閃光の様に鋭い一撃。かろうじてかわしたけど、かわし切れなかった剣先から真っ赤な血が噴き出した。

「他の能力と違って常時発動してるから、疲労の蓄積が早い。能力を使う精神力が切れれば後はもう普通の人間と変わらないわ。もうこの彼は時間切れね」

切りつけられてたたらを踏む男に向かって佳人さんが更に一步踏み込む。意識もすでにまばらなのに本能なのか、とっさに左手を突き出して避けようと試みた。

「ただどそれは無駄なあがきだった。」

剣にあっさりと腕は切り落とされ、その刃は奥にあった体さえも容易く切り裂いた。

男が膝を突く。担い手を失ったのように力無く崩れ落ちて、自分がばらまいた血の中に沈み込んだ。

「……………死んでるんですか？」

「まだ息はあるみたいだけど、まあ時間の問題でしょうね。このまま治療しなければ、だけど」

「救急車を呼んだり……………」

「無いわね。事件を起こした能力者を生かしておく理由も無いわ」

「それもココだと許されるんですね……………」

「生かしておく方が面倒なのよ」

モニターの端に水城さんの姿が映った。倒れている、胸元に「S・T・E・A・R」と刺繍されたベストを着た男の人に向かっていっぞやみたいに手を当てていて、だけど視線は頻繁に殺された男に注がれていた。

「さすがにまだ事件を起こしてない能力者を殺したりはしないけど、犯罪者になった能力者を収容できる場所も無ければ監視する人員も足りない。仮に場所と人員の問題が解決できたとしても一度墮ちた能力者はまたすぐに力に飲まれて事件を起こすわ。今回みたいに傷害事件で留まればいいけど、それは相当運がいいとしか言えないくらいに殺人率は高いの。ならもうここで処理するしかないじゃない？」

処理、と言い切った七海さんの言葉が殊更に冷たく感じる。現実を考えれば七海さんの言葉はもつともで、将来的に無抵抗の一般人が無意味に無慈悲に一方的に蹂躪されて殺される事を考慮すれば更にもつともな話だ。

だけど現実問題はそれとして、僕には無理そうな話だ。そこまで割り切れない。死にたがりは異質であって、自身が異質であることを自覚して、だからこそ周囲にそれを強要しない。本当の死にたがりはまず第一に自分にそれを強要してしまうのだから。

もしかしたらあつさりと僕は、今、僕と七海さんの間に感じる壁を突き破ってしまうのかもしれない。だけれども自分から生と死の境を壊してしまうつもりは無い。だから七海さんの言葉を理解はできても納得はできない、しない。もちろんここでそんな話を持ち出しても答えなんて出るわけもなく、一瞬で七海さんに論破されてしまう自信が情けなくも僕にはあつて、だから僕は話題を変えることにした。

「そう言えば水城さんはどんな力なんですか？ 他の人の能力は見た感じですぐ分かるんですけど、水城さんのだけはいまいち分からなくて」

「あら、聞いてないの？」

「ええ、どうもタイムミングを逃しちゃいました」

七海さんは口を開きかけたけど、そのまま答えを発せずにもモニターの映像を切り替え始めた。いくつか画面が切り替わり、その中の一つに先ほどと同じ様に治療に似た何かをしている水城さんの姿が映る。

「彼女の力も珍しいわよ。君と同じくらいに」

「僕と、ですか？ まだよく分かんないんですが、僕のもだいぶ珍しいって聞いたんですけど」

「そうよ。なにせ雨水君も悠ちゃんも世界で一人だけだもの。私も最大級に幸運よね、こんな珍しいケースに九州の一地方都市で出会えるなんて。思い切って大学辞めたのにこんな田舎に飛ばされた時はどうしてやるうかと思っただけど、やっぱり人生って何とかなるものね」

「はあ、世界で一人だけですか。それでどうなのなんですか？電気を自由に操れるとか？」

「そんなちやちなものじゃないわ。彼女はね、死を消せるの？」

「そう。ま、アナタと一緒に半端な能力と言えば半端だけど」

「それってどういう……」

僕が詳細について尋ねようとしたその瞬間、車の窓ガラスが突然砕け散った。

車内に悲鳴が響く。何かが座っていたシートにぶつかって揺らし、そして壊れる音がする。

目の前のモニターも粉々にヒビが入り、僕も七海さんも突然のことに身を竦めた。

「どうしたの!？」

七海さんがいち早く立ち直り、運転席側に向かって叫ぶ。僕も慌てて後ろを振り返って、それと同時に清潔だった車内に相応しくない匂いが立ち込めているのに気づく。

運転席の男の人の首がだらしなく座席の横から飛び出していて、今にも倒れそうなまでに体が傾いていた。他の二人も生きてはいるものの、小さくうめく声が聞こえるだけだった。フロントガラスにはポツカリと穴が空き、その向こうからは夕暮れの光が差し込んでいる。

その向こうに。

僕はこちらに向かつて手を伸ばす男の姿を認めた。

・三・

どれだけの時間が経ったんだろうか。五分か、十分か、はたまたホンの数秒程度の刹那の時間だったんだろうか。おびただしままで弾丸が降り注ぐ時間が終わり、穴だらけになったシート越しにそおっと頭を出す。車内にはぎっしりと氷の粒が敷き詰められていて、なのに少しもひんやりした様子がない。鉄の臭いと喉が焼けつくような熱さが狭い空間を支配してる。外では氷が吐き出される音はまだ聞こえてくる。けど、その音はこっちでは無く別の場所に向けられていた。

「大丈夫っ!？」

時を同じくして水城さんが車内に飛び込んできた。息を切らし、少し上気した頬に長い黒髪が張り付いている。

「僕と七海さんはなんとか! でも他の人が……!」
「っ!」

車内はひどい有様になっていた。夏も近いというのに氷の弾丸は溶けずに車の床を埋め尽くしていて、奇襲を食らった他の三人はその中に埋まっていた。

機材は無残なまでに破壊されて、だけどそのおかげか機材を操作していた二人はまだかろうじて息がある。運転席にいた人は、もう、

ダメだろう。顔の右半分がえぐり取られて、彼の肉片が飛び散っている。

「鏡クン！ 二人を車外に出すの手伝って！」

「はっ、ハイ！」

狭い車内から二人がかりで、引きずるようにして外に出すと楽な体勢で寝かせる。手にはヌルツとした感覚。見ると真っ赤な血が掌いっぱいについている。そうして思う。こういう場所に来ちゃったんだなあ、と。慌てることもなく、恐怖を感じることも無く僕は静かに淡々とそう思った。

寝かせ終わると水城さんが二人の傷口に手を当て始める。幾度となく見た気がする光景。だけどこの至近距離で彼女の魔法を使う様子を観るのは初めてだ。七海さんはさっき「死を消す」と言った。言葉通りなら死を無かった事にしたりとか、もしくは死者を蘇生させたりとか、そういった事が想像できる。だけど同時に彼女は言った。「半端な能力だ」と。

果たして、水城さんは体中にできた銃創に手を当て続けた。額には珠の様な汗が光ってる。ゲームで見る光るエフェクトや、傷口が塞がっていく様子は無くて、パツと見た目で分かるような変化は無い。なのに彼女が傷口周りの血を手で乱暴にぬぐい去ると血はすでに止まっていた。

「止血したんですか？」

「まあ、結果を見ればそうなるかな？」

手の甲で額の汗を拭いながら小さく苦笑いを浮かべた。

「これがアタシの能力なんだ。『死を消す』っていうと大層な感じがするけどね、実際は大した事はできないの。今やったのは、うー

ん、そうだなあ……『死に繋がる場所を消した』って感じかな？」
「ああ、放置しておくで死んでしまいそうな傷を治したんですね？」
「治せたらいいんだけどね、これがまたメツチャ不便でさ、『原因は消せない』んだ。だから傷はそのままだし、放置しておくでまた血が流れ始めるから応急処置にしか使えないのさっ」

なるほど、それは使い勝手が悪い。

すぐに病院とかに搬送できる状況なら問題ないだろうけど、もし状況が状況なら何の役にも立たない。このぶんどと、死者蘇生なんて絶対不可能だな。

でも、だ。僕の頭に不意にある考えが過ぎった。

死を消せるんなら、死を作ることでもできるんじゃないか？

突拍子もない考えだけど、ついさっきした七海さんとの会話を思い出す。能力はその人の経験や願望に強く影響される、と彼女は言った。ならば水城さんは、こんなちゃらんぼらん性格をしてるけど、その奥底には「死」に関する経験もしくは願望があることになる。

急激に水城さんに対する興味が湧いてくるのを僕は禁じ得無い。

死ねない僕と殺さない彼女。その関係式を「死ねない僕と殺せる彼女」に変換できる可能性はないのだろうか？ 都合の良い考えだっというのは分かってる。彼女にそんな能力は無いだろうし、仮に億が一にもその力を持っていたとしても、彼女は絶対にそれを周りに奮うことは無いだろう。けれど、僕が僕の願いを果たすためにはその可能性にすぎるしか今は思いつかない。なら、ココにいるのもありだろう。

「……もう外に出て大丈夫かしら？」

車の中からそんな声が聞こえてきて、僕はそれに肯定で返事をした。

「ふう……久しぶりに生きた心地がしなかったわ。スリルがある事はいいけど寿命が縮むのはあんまり喜べないわね」

「刺激があつて良い人生を送れると思いますよ？」

「冗談！ アナタたちみたいなのがビックリ人間シヨ！は安全な所から眺めてるから面白いのよ」

「僕もどちらかと言えばソッチが好みなんですけどね」

注意深く顔を出した七海さんは、よつと声を上げて段差を飛び降りる。どうやらケガはしてないらしくて、パン、と一度白衣の裾を払うと水城さんに向き直った。

「で、どうしてこうなったのかしら？ 私の記憶が確かなら結界の中には外から侵入はできないはずなんだけど？」

七海さんも背は結構高いんだけどそれより少し水城さんの方が高い。だから七海さんが水城さんを見ると見上げる形になるはずなんだけど、見る仕草のせいなのか七海さんが見下ろしてるように僕には見えた。

それにたじろいだのか、水城さんは一瞬言葉に詰まって明後日の方に視線をずらした。それを見て七海さんは不快気に眉を歪ませた。そして問い詰めるためか、一歩水城さんへと踏み出した。

「みんな大丈夫かっ！」

二人の間に剣を片手に携えた佳人さんが割って入る。体のあちこちに鋭い切り傷があつて、だけど致命傷は負ってないらしかった。

剣呑な視線を佳人さんに向けると七海さんは親指で車内を指差す。佳人さんの眼はその奥にある物を捉えて、眼を閉じて空を仰いだ。眉間にシワを寄せ、何かを堪えるかのように真一文字に口を閉ざし

た。

「……スイマセン、俺のせいです。俺が油断して結界を解除させたから……」

何のことは無い、単純な話だ。元々のターゲットは殺された彼一人で、戦闘が終わったと判断した佳人さんが結界屋さんに解除を指示したら、その瞬間を狙っていた別の誰かが襲撃してきた、ただそれだけの話。

想像でしか無いけど、この手の組織は能力者の間だと有名だろう。事件を一度引き起こしてそれが発覚すれば文字通り刈り取られる。生存という選択肢は用意されてなくて、同じ能力者が群れをなして襲いかかってくる。ターゲットにされた側はそこに恨みを抱かないはずがない。

佳人さんの心中はいかほどだろうか。自分のミスで人ひとり殺されてしまった。死んでしまった人間は水城さんでも生き返らせることは不可能で、取り返しなどどうあがいてもつかない。

僕だったら、と簡単に想像してみる。きっと耐えられない。罪悪感で押し潰されてしまうのにそれ程の時間は必要とせず、逃げ癖の染み付いたこの精神は、もし死ねる体であつたらさぞ簡単に命を投げ出しているに違いない。背負える命は僕一人の分ですでに零れ落ちてしまいうさなのだ。

「現状はどうなっているの？」

だけどそんな佳人さんの心中などどうでもいい、と言わんばかりに七海さんは報告を求めた。その顔はひどく詰まらなさそうで、彼女はたぶんこういった罪悪感に苛まれている相手が嫌いなんだと思う。

「……今班長が一人で相手してます。自分もまたすぐに戻ります」

「そんなナマクラ刀を持っていつてどうしようとかしら？」

口ぶりは明らかに佳人さんを馬鹿にしてて、そしてそれを聞いた佳人さんの眼にも剣呑な光が灯ったのが僕にも分かった。佳人さん自身の力で創り出したんだろう剣に誇りを持っている事は簡単に想像できる。だけでもそれと同時に七海さんの言葉にも納得がいった佳人さんの手から生えた剣は見た目には頑丈そうで、 だけど少しずつ刃が崩れていっていた。

「今のアナタが行っても邪魔になるだけよ」

「だからって班長一人に任せるわけにはいきませんよ！ 班長だつてずっと戦ってるのに……！」

「勘違いしないで。宮原君が戦えないなら別の人間を送ればいい事じゃない？」

そう言うや否や僕の方を振り向いてニコツと笑う。はっ？とその意図を掴みかねている僕に向かって手を伸ばすと肩に手を置いた。

「という訳で、行ってきてくれるかしら？」

- 四 -

無茶だ、と喚いても言いだしつぺの本人以外は文句を言わないだろう。本気でそう思う。どこの世界に入ったばかりの新人に（そもそもまだ所属はしてないはず）いきなり第一線で働かせる組織があるというのか、と口にしてみても「ココにあるじゃない」と七海さんに素で言われるのが何となく読めてしまったので口にはしない。

流石に水城さんや佳人さんも呆気に取られて、そして我に返ると声を大にして反論してくれた。が、そこはやはり人の上に立つ人間というべきか、それとも頭が切れる人間は違うと侮蔑混じりに褒めたたえるべきか迷うけど、議論の時間は無いだの代案を示せだので結局は押し切られた。佳人さんはもうすでに精神力をかなり消耗してたらしく、僕が行くと決定された途端に剣は完全に消滅した。水城さんは元々戦闘要員じゃ無いし、それなら戦闘経験など無くても死にはしない僕の方がいいだろうという流れだ。ちなみにその議論とも言えない議論の中に僕が口を挟む余地は、それこそ植物の根毛レベルでさえも残されてなかったとだけ言っておく。

じわりじわりと戦闘の音が近づいてくる。当然音が近づいてくるのではなく僕が近寄っている。手に汗がにじんできて、手の中にある物を脇に挟むとズボンに手を擦りつけた。

手に持っているのは銃。ただし、この前に水城さんからもらったデリンジャーとは違って、それなりに大ぶりの物だ。僕は銃になんて詳しくは無いから名前は知らない。素人からしてみれば、デリンジャーみたいに見た目に明らかな特徴が無い限りどの銃も同じような物でしかなくて、そして名前が分かったところで特徴を知らなければ屁の足しにもならない。大方ベレッタとかいう、結構有名なものだろう、と決めつけてそれきり銃の種類の話は頭から外した。

議論に口は挟めなかったけど、当然僕だって危険な場所に行きたくなくてなかった。戦闘に関しては素人もいいところで、銃なんて一度自分に向けた以外に撃つたことも無い。ましてや子供時代から喧嘩でさえ殆ど無いに等しい。人と合わせる事は苦痛であっても苦手じゃない。常に他人との距離を上手く取りながら生きていたつもりだ。そんな僕が、例え能力者だから身体能力が一般人より遙かに上回ってると言っても本職の人たちの間に割って入るなんて無理で、下手したら班長さんの邪魔をしてしまうかもしれない。

と、自分に向かってどれだけ言い訳をしたところで、絶対行きたくないかと問われれば答えに窮するのもまた事実で、少なからずワ

クワクしているのは真実だ。

こんな僕が人の役に立てるかもしれない。そんなものは建前。

こんな僕が誰かを助けることができるかもしれない。そんなものは幻想。

こんな僕にも生きる意味を見出せるかもしれない。そんなものは妄想。

僕の中には今、二つの期待が渦巻いてる。

一つは手にした銃を撃つてみたいという願望。誰かに向かって。

誰に咎められる事も無く、憧れる映画の主人公みたいに颯爽と現れて一撃の名の下に敵を無力化する。相手が死のうと構わない。どうせ僕がやらなくても誰かが殺すのだから。英雄じみた惨めで自分勝手に一方的な空想を心の中に描く。

そしてもう一つは言うまでもない。僕が死ぬ事。

僕は死ねないと散々分かってはいるはずだけど、期待は捨てることはできない。もしかしたら、という淡い願いは肅々と、でも決然として僕に根を張る。

地面が揺れる。ホコリの様な細かい砂粒が横のビルから降ってくる。すでにそのビルは半壊していて、コンクリートの断面が夜も近い空に向けられていた。

そつと壁から顔を出して様子を伺う。夜は、特にこんな夜とも夕方とも言いがたい時間帯はひどく見づらいはずで、だけどこんな力を手に入れて以来、夜でも比較的はつきりと見ることが出来る。視力自体が回復したわけじゃないからメガネなしだとぼやけるけど、夜目が効くようになった、というべきか。ともかく、夜でも視界が利く今の僕の眼が建物を破壊する二人の姿を捉えた。

一人は素手で薄い茶色に染めた、少し長めの髪の毛の男性。たぶん、あの人がさつき佳人さんが言っていた「班長」なんだろう。なぜにアロハシャツなのかは気になるけど。そしてすでに全壊といって差し支え無いだろ。う瓦礫の家を挟んで対峙してるのが、僕らを襲ってきた男。黒いジーンズに紺色のワイシャツ。白っぽい短髪をこちら

に向けて、班長の動きを観察していた。

そう。僕は今、白髪男の後ろに陣取っている事になる。班長さんはすでに瓦礫の向こう側に移動して僕からは見えない。そして二人共僕には気がついていない。

一度、深呼吸。逸る気持ちを抑え、そこで僕は自分の手を見た。手の震えは、無い。

片手で構えるべきか、それとも両手で構えて撃つべきか迷ったけど結局は片手で半身だけを出して撃つ事を選択する。所詮素人に過ぎない僕なら両手でしっかり狙って撃つべきなんだろうけど、全身を晒すことは、例え気づかれてないにしてもためらう。

呼吸に応じて銃身が上下に振動する。狙撃なんてやったことも無くて、狙った場所に当たる保証なんて無い。だけど当てなければならぬ。チャンスは一度。二度目以降も無いことも無いだろうけど、考えるべきじゃない。

上下に揺れる振動に、左右の揺れが加わる。小刻みなそのせいで照準は定まらない。苛立つ。手をもう一度見ると、明らかに僕は震えていた。

撃てるのか？

撃てる

殺すのか？

殺せるさ

自分は殺せないのに？

……

そんな事は関係が無い。それこそ、一切合切無駄な思考。できるとかできないとか、そんなレベルの話じゃなくて、今、自分に求められている仕事を遂行するか否か、ただそれだけの話。

狙いをつける。引き金を引く。

たった二つだけの動作。それさえすれば僕の感情も葛藤も悩みも

偽善も偽悪も苦しみも安らかさも安心も絶望も希望も恐怖も全てが吹き飛んで塵芥と等しくなる。

果たして、僕は一切の感情と共に引き金を引き絞った。

「……っう！」

引き金を引いた途端、反動が指先から腕を伝い、肩へと抜けた。脱臼したかと思うくらいの衝撃が脆弱な関節に加わって僕の右腕が悲鳴を上げる。どこか逝ってしまったか、とも思っただけどそんなものを確認している暇はない。痛みを堪えて弾丸の行く先を探し、そしてすぐに見つけることができた。

穴が空いていた。ちょうど弾と同じ大きさの穴が驚きに口を開けた男の額のすぐ横に。頬には一筋の赤いラインが引かれていて、そこから少しだけ血がつつ、と流れ落ち始めていた。

つまりは、だ。

「外し…た？」

口に出すまでもなく、それはもうあっさり。惜しいとか、初めてなのにはぼ狙い通りの所に飛んだ、とかそんなのは意味なくて。（ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！）ぼーっとしてる場合じゃない。外した以上次のターゲットは僕に向かってくるのは相手にとって「りんごが下に落ちる」と同じくらい明確な事で、班長さんがそれを止めてくれればありがたいけど、敵はそれより先に僕に向かって氷の散弾を発射できるのは自明の理であって。慌てて回れ右をして走りだそうとするけど、焦る僕の内心とは裏腹に体は上手く動いてくれなくて、足をもつれさせてしまっただけに転げた先は壁とか遮蔽物は全く無くて。

何て無様。

顔を上げた時にはもう時すでに遅くて、無駄に発達した動体視力

が氷の弾丸を捉えてしまった。衝撃。暗転。

真っ暗な、それこそ光が全く無い世界はこういうものか、と思うくらいに世界が黒く染まって、その後我真っ白な光が戻ってきて、それが僕が一度死んだ事によるものだと気づいたのは声なき悲鳴を僕が上げていた時だった。

「……………あああつっ!!」

耳をつんざく不快な声。誰が出しているのかを理解できず、どうしてそんな声を出しているのかも理解できない。感じるのは焼ける、なんていう表現も生温いと思える、吐き気を覚える激痛。そして又メツとした僕の、目元に当てた手の指の隙間からこぼれ落ちる液体の感触。それが叫び声が治まるのに従って落ち着いてくると自覚する新たな腕の痛み。

仰向けに寝転がっている体勢から上半身を起こして、相も変わらぬ激痛を堪えながら片目で腕を見ると穴だらけの右腕があった。

「うわぁ……………」

間の抜けた声が漏れた。パツと見だけでも四ヶ所くらい穴が空いて血がだくだくと流れ出しているのに、それが見ている端から塞がっていくのだから、そんな声が出るのも仕方が無いというものだと思う。

「……………生きてるか？」

「何とか……………」

班長さんの声に、ナケナシの気合いを振り絞ってそれだけ応えようと、立ち上がって敵の姿を探す。が、どこにも見当たらない。

「敵は……?」

「見失つちまつた。テメエのせいだな」

「文句は七海さんに行ってください。僕は素人なんですから」

「……ああ、お前か。課長が言つてた不死身ヤローっていうのは。佳人の奴はどうしたんだ?」

「精神的に限界らしくつて七海さんに止められてました。代わりに僕が銃一つで放り出されたわけです」

「死なねーからか。悪女だな」

「悪女です……ねっ!」

空から降ってくる氷を横つ飛びで避ける。まだ右眼は見えないし、腕も痛くて痛くてたまらない。それでも動きを大幅に阻害されるほどの痛みはないのが幸いだ。回復力だけは変わらず気持ち悪いほどで、足に一発だけかすつたけど問題は無い。どうせすぐ治るから。

「どうするんですかっ!?!」

「とりあえず避けまくれ! あとは奴を足止めしろ! 結界屋を狙われたらオシマイだからな!」

「足止めって、どうやればいいんですかっ!?!」

「知るかっ! 自分で考えろやっ!」

素人に無茶を言ってくれる。

とりあえず弾が飛んできた方向に向かって適当に発砲。本当にデタラメに撃つて、しかも少しだけ見当違いの方に銃を向けた。これだけ痛めつけられたというのに、僕はまだ非情になりきれない。

流石に痛みに苛まれてた間はそんな事は関係なくて、絶対に殺してしまいたかった。誰が邪魔をしようとも誰が遮ろうとも誰が割つて入ろうとも誰がなだめようとも。だけど、それも痛みが治まっていくなつてしぼんでいった。

まだ、正直怖い。僕が傷つくのも、それ以上に僕が傷つけてしまうのが。七海さんの話を聞いて相手に同情してしまっているのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。彼らに残されているのは死でしかなくて、最後の引導を僕が渡してしまおう、それが嫌だという自分勝手に利己的な醜さが僕をためらわせるのだろうか。

班長さんが跳ぶ。崩れたビルに手を掛け、一足で四階の屋上部まで到達し、だけど相手の氷弾に迎撃された。それを何も持たない素手で弾き返し、だけでも弾いた部分からは出血している。そのまま突っ込むこともできずに班長さんは後退。そしてその際に相手はビルの壁を巧みに使って下へと降りていった。

「大丈夫ですか？」

「カスリ傷だよ、ンなもん」

そういう割りには結構出血してる。けども別に強がりという風でも無さそうで、たぶんこれくらいは茶飯事なのだと思う。

「……やっぱり手強いですか？」

「チンピラ上がりにはしてはな。それに、俺みたいなのと遠距離型は相性が悪い」

腕にめり込んだ氷の塊を取り出しながら話す。

そして男が走っていった方向を二人で追いかける。

「ま、言っても所詮チンピラだけだな。自分の限界つつーモンを把握できてねえ。力に酔って、力で解決できない問題にぶち当たってこなかった連中ばっかだかな」

「そうなんですか」

「そーよ。そんなモン。」

だからもうすぐチエックメイトって事に気づいてねえのさ」

瓦礫の山だらけと化した住宅街。住人とか死んでるんじゃないの、とかそもそも住んでる人を一人も見えないとかいろいろ思うところがあつたけど、どうやら結界内の建物とかはいくら壊しても大丈夫らしい。結界内に取り込む人間とかは結界屋さんが自由に選べるみたいで、家屋はいくら破壊されても外の世界には何の影響も無いんだとか。結界屋さんが殺されたら完全に反映されてしまうらしいけど。

そして僕は今、そんなボロボロに破壊された家の影に隠れてる。直接的な攻撃能力の無い僕を慮ってくれたのか、それともただ単に邪魔だったのかは知らないけど、班長である八雲さんの指示でこうして待機する事となった。八雲さんは今は一人で交戦中で、時折破壊音が聞こえてくる。別れ際に「静かに待ってりゃ出番をやるよ」と言つてたけど、たぶん……そういう事なんだろうな。

ガシャ、と音を立ててマガジンを取り出し、残弾数を確認する。残りは後、五発。

痛みの引いた右目に手を当てて一つため息。痛みはもう忘れ去られた。「痛かった」記憶だけはまだ覚えている。

こうして一人で銃を持っていると、どうしても変な方向に考えが行ってしまう。

こめかみに銃口を当て、静かに引き金を引く。破裂音と、それに続く薬莢の落下音。その後には何かが倒れる音が……しない。

意識を現実に戻してまたため息。もうすでにイメージの中でさえも僕は死ぬ事はできない。流石に痛みだけは鮮烈なまでにフラッシ

ユバツクしてくるけど、それもどうせマヤカシ。治癒速度も、最初に二日近くかかったことを考えれば、今は異常を通り越してしまった。もう完全に、生と死の境は潰されてしまった。認めざるを得ない。

どこまで行っても生で、どこまで行っても死で。その間に曖昧さはゼロ。代わりに全体が曖昧になった。閑静を通り越した静寂さを破る音が頭上で聞こえた。

今度は銃を両手でしっかりと握り、イメージを思い描く。より明確に、より鮮明に。

相手が降りてきたところを壁から飛び出した僕が銃を撃つ。狙いは頭。いや、命中率を考えるなら的の大きい体を狙うべきか。

視界の中にスコープ越しの世界を描く。中心は相手の土手っ腹。着地で屈むだろっから、少し下に合わせる。そこを目掛けて指に力を込める。一発二発三発四発五発。ありったけの弾をぶち込んでやる。しつこいくらいに細かく、丁寧に頭の中で想像する。何度も何度も。頭上を見上げる。逢魔が時。結界の中だからか、明るさはあまり変わってない気がする。それとも単純に思ったほど時間が経ってないのかもしれない。

「おおっうらよっ！！」

これまでに無いくらい大きな声が聞こえてきて、少しわざとらしい。でもきつとこれが合図。

壁が砕ける音と同時に僕は飛び出した。細かい瓦礫が降ってきて、だけでもそれを意識から外して、男が落ちてくるだろう場所へ照準十字線をセット。

そして敵は降りてきた。十字線の真ん中に。

驚く敵の顔。慌てて僕に向けて手を伸ばす。氷の弾が掌の上に創り出される。時の流れはスローモーション。いくつかが光って、だけでも残ったのはたった一つ。敵の顔が滑稽なほどに歪む。タイム・

オーバー。残念、時間切れです。後は引き金を引くだけでオーケー。ここまでイメージ通り、いや、イメージ以上。

なのに、金属でできた引き金が、重い。重い、重い。たかがこれだけの動作に全力を尽くさなければならぬなんて、なんてイメージ異常。

残ったたった一つの氷弾が飛ばされて僕に迫る。そして、当る。

僕の頭蓋を貫いていく感覚が鮮明。ぐいん、と裏返ったのは意識なのか、それとも僕の頭なのか。

またしても一瞬、何も見えなくなる。感覚が薄れて、僕の体が制御を離れた。

その前に一つだけ、僕ができたことが、ある。

一度だけ、引き金を引いた。

「あー、二度目で何のひねりも無くてワリィけどよ……生きてるか？」

「何とか」

八雲さんの声に、ゆっくりと眼を開けると、大して気力を振り絞る必要もなく上半身だけ起こす。ケガは治っても疲労は取れないので体は怠いけど、たぶん僕が一番元気な部類だろう。

「鏡クン」

呼ばれた方を振り返ると水城さんが立っていた。疲れてはいないみたいだけど、どこにもケガは無いらしくて、つまりは他に敵はいなかったと言う事か。まあ、そんなにワラワラと敵に湧いてこられるも困るけど。

代わりに何処から湧いてきたのか、背中に「S・T・E・A・R」と書かれたジャケットを来た人がたくさんいた。どうも事件の後処理らしき事をしてるみたいで、ケガをした戦闘員の治療をしてたり、

事故車よろしくボロボロになったワゴン車がレッカーされているのが見えた。

「鏡クンはケガは……無いみたいだねっ」

「本来ならどれだけ治療しても追いつかないくらいなんでしょうけどね。まあ、水城さんも無事で何よりです」

「うん、ありがと。そして鏡クンも……お疲れ様」

言葉は僕を労ってくれて、なのにその表情はあまり冴えない。

無理も無いか。隊員の人々が死んじゃったんだもんね。

ワゴンの中で頭を吹き飛ばされた運転手さんの姿が思い出される。一度暗がりで見ただけだから顔さえも憶えてないけど、他の人はそれなりに付き合いがあったに違いない。水城さんは死に対する忌避感が強いだろうから、少なからずショックを受けていると思う。だからと言って僕が何かできるわけじゃないし、気の利いた慰めも出てこない。むしろこんな世界に連れ込まれた僕を慰めて欲しい、と思ってる自分がいて、それが少し嫌だ。

「ホント鏡クンも災難だったねっ。いきなりこんな事件に出くわすなんて。普段はもうちょっとスマートなんだよ？ ケガ人が出てても死人が出ることなんてあんま無いし」

相手以外はね、という反論は口にしない。しても栓のない事だし、話だけを聞けば七海さんの話ももっともだと思っし。

「ともかくさっ、鏡クンはまだ正式にウチに入ったわけじゃないし、後始末はアタシたちがやっつくからさっ、もう帰っちゃって大丈夫だよ」

「タクシー代とか出ますかね？」

「たぶんムリッ！」

はあ……しょうがない、歩いて帰るか。そんなに遠くないし。どっこらしよ、とおっさん臭い掛け声を上げながら立ち上がった、二人に軽く頭を下げ、背中を向けた。結界はまだ解かれては無いのか、空は夕焼けのままだった。

「ああ、そうだ」

八雲さんが呼び止めてきて、僕は首だけを回して振り返る。アロハシャツのおっちゃんがポケットに手をつ込んだまま、離れた分だけ歩いて距離を詰めた。

「礼は言つとかないとな。素人のくせによく頑張った。助かったぜ」
「……大したことしてませんよ。素人が現場を引っかき回しただけですし」

「いやいや、ホントだって。お前が相手の脚を撃ち抜いてくれたおかげで一発で仕留められたからな」

「……お役に立てたのなら幸いですよ」

失礼します、ともう一度頭を下げてから八雲さんから離れる。

いろんな人が後処理をしている中を抜け、喧騒の中心から遠ざかった。途中で七海さんの姿が見えて、向こうもコッチに気づいたみたいだけど、会釈だけして特に会話はしなかった。向こうも忙しいらしいし、僕もあの人と会話できるほど楽しい気分じゃない。

一分くらい歩いただろうか。いつの間に来たのか、それとも僕が知らなかっただけで最初から結界の中にあっただのか、廃車ワゴンとは別のワゴンがあった。後ろのドアが開けられていて、そこに向かって真っ白の担架が運ばれて来ていた。

僕はそれをなんとはなしに足を止めて見ていた。あのワゴンに乗っていた人かもしれない、他にもケガ人はいてもおかしくは無い。ただ何となく見ていた。興味も無く、ただ何となく眺めてた。

制服のお兄さんたちによって運ばれる誰か。端からダラリと垂れ下がった腕には生きている感じは無く、そして袖の色は紺色。続いて見える足は黒のジーンズ。少しだけ体をずらして担架の上の人物を僕は見た。

その遺体には頭が無かった。もっと正確に言うなら頭らしき何かがあつて、だけどそれを頭と言うにはあまりに小さくて、あまりに形がなさ過ぎる。『お前が相手の脚を撃ち抜いてくれたおかげで一発で仕留められたからな』

ギリ、と奥歯が鳴る。何歩か足を進め、止まって眼をつむつてうつむき、眼を閉じたまま空を見上げた。

結界が解ける。まぶたを開く。それと同時に時間が回り始めて、暗めの茜色の空が濃紺へと変わっていった。

風が流れ、それまでとは違った騒音が戻ってくる。立ち止まったままの僕の隣をさっきのワゴンが走り去っていった。

砂ぼこりを巻き上げ、生暖かい排気ガスが僕を馬鹿にするみたいにまとわりついた。

瞬きをして、それでも空の色は変わらなくて、どこまで眺めても星は見当たらなかった。

「最低な、世界だ」

- 第四話 狂理、来裏（クルリ、クルリ） -

- 第四話 狂理、来裏（クルリ、クルリ） -

- 零 -

僕を愛してくれませんか？ なら僕も愛してあげられるかもしれない
せん

- 一 -

人は慣れる生き物だと、どっかで聞いた気がする。
どんなに大変な仕事だってそれが当たり前になれば、よほど度を越してない限り日常の「コマ」に変わっていくし、どんなに幸せな生活を送っていたってずっとそれが続けば腐敗と怠惰に取って代わりし、やがて不幸だと感じるようになるかもしれない。そしてまた逆も然り、だ。不幸だとか思い込んでいても次第に不幸さを感じなく

なるかもしれないし、まあ、幸福だと感じるかどうかは人それぞれだろうけど、気持ちの持ちようによっては、生きていけるのであれば悪くない程度には思えるようになるだろう。

「えー、なので先程も言ったように、等温変化の場合は内部エネルギーの変化が0なので $dQ = -dW$ となり、外から受け取った熱量は全て外部への仕事となります」

かと言って僕が現状を幸せだと思っているかと問われれば、しつこいくらいに僕は首を横に振るだろうし、さつき述べたみたいに考えることができても幸せだと思えないのなら、僕には幸せになるうだなんて気持ちが乏しいのかもしれない。幸せなんてなるうと思ってなれるもんじゃなくて、でもなるうという意志がなければ幸せなんてなれない。そういった意味じゃ幸せ = 成功という図式も当たらずとも遠からずと言えるか。成功するには努力がやっぱり必要条件だし。

「そして最後に同じように熱力学第一法則から $dU = dQ + dW$ の式において、断熱変化の場合には外部との熱の授受がないので $dQ = 0$ と考えることができるので $dU = dW$ となり、内部エネルギーの変化分が全て外部への仕事に変換されることになり、グラフにしますと、このように一つの閉じたサイクルができあがります」

でもまあ僕自身も段々現状を悪くないんじゃないか、という程度には思えてきているのも事実で。

あの狂った世界にどっぷり浸かり放しだとしても、繰り返しになるけど、やっぱりそれもまた日常になれば慣れてしまうだろうし、まして僕は死ねないのだから肉体的には死ななくても時間が僕を殺してしまうかもしれない。それを回避できるという意味では、こうしてココで退屈な教授の妙に甲高い声を聞きながらノートを黒く染

めていくのも悪くはないだろう。

「結局は元の状態に戻ってくるようになりますので、サイクル全体でdU=0となり、受け取った熱と放出した熱の差が外部への仕事量と言える事になりますね」

人がごった返す大きな講義室の一角で、他の人と同じようにふあ、とあくびを漏らした。決して寝不足なんかじゃなくて、かけがえが無いと言えればそう言えるのかもしれない退屈で平和な日常の「コマ」として。

まあ、なんだ、つまるところは。

僕は日常に戻ってきた。

教授が黒板に描くサイクルの図の様に、今、僕が立っているのは今までと同じ場所。だけど、場所は同じでもこの世界に起こる出来事はおしなべて不可逆な変化であって、実際僕の生活は百八十度、とはいかなくても多少の変化を受けた。

すでに正式に僕がS・T・E・A・Rに所属するようになって二週間が経つ。とは言っても大したことは無い。形だけの面接を受けて書類の上に僕の名前が加わっただけだ。

最初は正直言つと大学も辞めないといけないのだろうか、と不安だったけど、こちらから尋ねる前に榊課長の方からOKが出た。

「学生を無理やり社会人にするつもりは無い」とはその榊課長の弁で、聞いたその時はあまりの意外さに驚いて、寛大さに感謝の言葉を述べたりもしたけれど、後々になって考えてみればいくつか理由は思いつく。

他の人はどうだか知らないけど、当たり前ながら僕にも親がいて、授業料を払ってる。S・T・E・A・Rが「秘密組織」の形を取っている以上、学校を辞めさせると親に連絡が入るだろうし、そこからトラブルに繋がり兼ねない。無論トラブルの火種が上がればコッ

カケンリヨクの名の下に潰してしまうのは眼に見える未来ではある。まあ、どちらかと言えば、「組織に属して管理できている」という事実の方が大事なんだろうけど。

そんなわけで僕はまだもう少しはモラトリアムの時間を享受できそうだ。実際、S・T・E・A・Rの仕事はバイトみたいな感覚で、基本土日と、人手不足此処に極まれり！みたいな時しか呼び出されてない。昼夜は問われないだけどさ。

仕事も実際大したことはしてない。最初みたいに戦闘に参加するわけでもなく、七海さんの隣で分析の仕事を手伝ったり、後処理を手伝ったりと至って平和な仕事ばかりだ。後は書類作成くらい。もちろん分析班の車外では戦闘は起こってて、確実に人ひとりが死んではいるわけで。そういったことを考えれば完全に安全というわけじゃないだろうし、戦闘員不足の非常時には真っ先に駆り出される筆頭格だろう、僕は。

それでも心のどこかでその非日常を楽しんでる僕がいるのも事実。不謹慎ながらちょっとしたスリルを糧に日常を生きていると言ってもいい。変化自体はどうやっても抗い様がなくて、ならそれを受け入れてしまえばいい。変化そのものは怖くとも、一度流されてしまえば後は楽だ。ともかく、あれだけ忌避して、最低な世界呼ばわりしたくせに僕はこの現実をそれなりに楽しめる様になんてなっちゃった。僕が目の前で死んだりしたら天に唾吐きかけて世界を呪うんだろう。我ながら現金なものだ。もっとも、人生なんてそんな事の繰り返しなのかもしれないけど。

慣れた、と言えば大学生活もそうでS・T・E・A・Rもそう。そして、あの忌々しかった結界に対する違和感にも慣れてしまった。今でも夜中に眼を覚ますことはたまにあるけど、気持ちの悪さは特に感じない。繊細だと思っていた僕の神経が案外太かったのか、それとも感覚が麻痺していつてるのか。いや、感覚が改変されていつてるのかもしれない。なにせ、あの二回死んだ日から急速に鈍感

になつていつてるのだから。もつとも、寝不足が解消されたのだから理由なんてどうでもいいんだけど。どうせ元々狂った感性の持ち主なんだ。今更おかしなところが一つ二つ増えたところで、周囲に知られないのなら別に構わないさ、と心の中だけで誰にも悟られずうそづく。

忘れてしまつたらう退屈の大切さを大きなアクビと一緒に噛み締める。午後ももうすぐ三時を迎えるところだ。何人かは早く終わらないか、とばかりに腕時計をチラチラと見始め、あるグループはノートの端を使つて隣と会話してる。きつとこの後の相談でもしてるのだらう。やりたい事があるのはいい事だ。

で、僕のノートはといえば、たまにミミスガのたくった様な文字が見える。寝不足は治つても退屈な授業は眠いものだ。

いい加減僕のまぶたも重くなつてきて、視界がだんだんと狭くなつてきていたその時、おそらくは大部分の学生が待ち望んでいたであろう音が鳴り響いた。

「はい、それじゃあ今日はここまでで。ちょっとキリが悪いので、今回はレポートは無しです」

途端に騒がしくなる教室。あちこちでざわめきが広がり始め、それまで眠っていた連中もキョロキョロと辺りを見回して現実を確認すると、急々と帰り支度を始める。教授も義務を果たした、と言わんばかりにそそくさと部屋を出ていった。

僕もノートを閉じて分厚いハードカバーの教科書をカバンにしまふ。そしてカバンから眼を離さないままに隣の人物に話しかけた。

「んで、です。なんでいるんですか、ここに？」

「そんなの決まつてるじゃないっ」

「あー、ハイハイ。要するに暇だったんですね」

大学なんてところは講義を受けるだけなら誰だってできる。それこそ爺さんだろうが会社員だろうが、極端に言えば赤ちゃんだってできる。泣かなければ、だけど。

言い過ぎを覚悟で言えば、大学生は、国立なら三百万近く払って大卒資格を買ってるみたいなものだ。全部の授業を一切眠らず受講して、四年間家でも真面目に勉強する人間は少ない。もちろん本気で勉強したい人間もそれなりにいるだろうけど、それは少数派だろうと思うのは僕の偏見だろうか。

だからそんな単位も貰えない講義を、真面目に自分の休みを潰してまで来る人間は宝くじの高額当選者なみにレアキャラであって、件の隣の人がそうかというところ。

「たまたま街を歩いてたら鏡クンの大学があつてさ、大学の授業ってどんなのがちよつと気になったから来てみたのさ。でも結構つまらないもんだね。外に人もあんまないし。建物もボロつちいし。テレビで見るような、もつとキャツキャウフフなキャンパスライフ光景を期待してたのに」「工学部のキャンパスに何を期待してるんだ、アンタは」

男ばかりの世界をなめんな。暇に飽かして女の子とイチャイチャするのなんて幻想なんだよ、と心の中でだけ吠えてみる。口にするとなントカの遠吠えになってしまっそうだから。

「でも鏡クンって結構頭いいんだね。アタシヤ全然理解できなかったよ。ちよつと見直したかも」

「今日のところは高校時代の内容と被ってるんですけどね……」

それはそうとして。

見慣れない水城さんに気づいたのか、他の人たちがチラチラとコツチを伺いながら通り過ぎていく。少し耳をすませば「あの娘、誰

？」なんて会話が聞こえてきそう。まあ、気持ちは分かる。水城さんが可愛いのは確かだからね。遠くから愛でる分には文句は出ないだろうし。鼻からため息を混じりの空気を吐き出し、講義室の出口に体を向ける。変に注目を浴びるのは好ましくない、と感じるのはいつものコト。とりあえず知り合いが少ない場所にも移動しよう。

「ういーっす、鏡ちーん！」

と思つたところでコイツ。

大学に入学して二ヶ月も経てば、ほとんど関わりが無い学生でもクラスメートがどんな人間かはおおよそ分かつてくる。この正祐にしても授業によく遅刻する人物としてすでに有名であつて、加えて社交的な性格だから男女問わず知り合いは多い。しかも完全に髪を金色に染めてるから容姿的にも目立つことこの上ない。そんな人物が声を上げれば自然と周囲の注意を集めてしまうわけで。

ビシビシと注目の視線が肌に伝わる。何をしたわけでもないのに、意味もなく心臓が小さく跳ねる。

相変わらず慣れないな。小さく自分のアガリ症というか、心の準備ができてない時の小心さのため息をついて、それをごまかす為に更に大げさにため息を吐いてみせる。

「それじゃ行きましようか、水城さん」

「それはいいけどさ……いいの？」

「ああ、アイツはいいんです。放置プレイマニアなんで、無視されると喜ぶんです」

「ふーん、課長と真逆のDMなんだねっ」

「誰がだよっ！」

「違つのか？」

「違つのか？」

最初は冗談だったんだけど、どうも最近ホントにそうなんじゃないか、と思ってた。そうか、違うのか。

なんか妙に残念な気持ちになりつつもそれに蓋をして、盛大にうなだれてる正祐に目配せして外に出る。

外は相変わらずの陽気で、日差しは本格的に夏が近づいてきていると感じさせる。だけど日光があまり得意じゃない僕にとっては好ましくない。

この後に訪れる真夏を思って陰鬱になる。まあ、正祐あたりは本気で楽しみにしてそうだけど。夏だ、海だ、水着だ！みたいなノリで。

「どったの、鏡ちゃん。あんまりため息ばかりついてると幸せが逃げちゃうよ?」

「ため息が多いのは仕様なんで気にしないでください。あとアンタもその呼び方をすんな」

「えー? 別にいいじゃない。可愛いと思うよ?」

「嫌なものは嫌なんです。人が嫌がる事をしちゃいけませんって教わりませんでした?」

「それを鏡ちゃんが言うかなあ……」

「分かりました。なら課長に水城さんがそう言ってた、と伝えておきますね」

「ゴメンなさい」

頭が膝につかんばかりに水城さんの腰が折れた。むしろ心が折れたというべきか? まあ、気持ちは分かるけど。課長なら逆に喜んで水城さんをイジメに走りそうだ。天邪鬼っぽいし、あの人。

「楽しそうな会話をしているとこ悪いんだけどよ、鏡ちゃん」

「なんだ? あとお前もその呼び方を止めるって」

「お？ おお、分かった。それでよ、鏡ちん。一つ質問があるんだが」
「分かってねえよ」

こいつは…… とは言え、ここで意地を張っても話が進まない
のでこの場は諦める。この点で言えば、僕の方が心が折れそうなのは僕だけの秘密。

「この可愛いお嬢様はどちら様でございましょうか？」

「なんで急に敬語なんだよ」

「お嬢さん、お名前を拝聴させていただいてもよろしいでしょうか？」

「人の話を聞けよ。てか、質問振るだけ振って自分で聞くのかよ」
「水城悠だよ。チヨウチヨも逃げ出す、うら若き乙女なのさっ！
よっろしくう！！」

また自分で言ってやがる。しかも僕にした時と微妙に変えてるし。
ぶい、と自分でのたまりながらピースサインを高々と掲げた。二十歳、そろそろ自重しろ。

「悠ちゃんか。いい名前だね。俺は君原正祐。そろそろ油の乗り始める、将来性豊かな色男さっ！ ヨロシクう！！」

なんだこの似た者同志は。「イエーイ！」とか言いながら拳でハイタッチ。あれか、これがいわゆる類友ってやつか。二人揃って自重しやがれ。

「なんだか鏡クンの友達って面白い人がおおそうだねっ」

「まだ一人しか出会ってませんけど」

「コイツ人見知りだからさ、友達少ねえの。だから心が琵琶湖なみ

に広い俺がこの性根ネクラ野郎と友達をしてあげてんのよ」

「そっか、微妙に狭い心の持ち主なんだねっ」

「お前に貸したノート、没収な」

「言葉の選択肢を間違えた!？」

「お前の常識が非常識だったただけだ」

ああもう、メンドクせえ。このままカオスな空間に居続けるのも、それはそれで別に悪くもないのかもしれないけど、いい加減疲れてきた。外に出てすぐ話してたから、すでに周りに誰もいないし。

「それで、お前はお前で今度はどんな用だ？ ああ、ノートなら気にしないでいいよ。コピー代+アルファさえくれるならコピーして持って行ってやるけど」

「うっし、買った」

「即答かよ」

まあ別に良いけど。お値段は良心的で留めといてあげるか。

「で、話はそれだけ？」

「それだけっちゃそれだけだよ。その反応はちっと寂しくねえか？」

「いつものコトだと思うけど？」

「ま、確かにな。でもよ、別に用らしい用は無くても話しても良いと思わねえか？ 鏡ちゃんがいたから話した。ただそれだけじゃねえか。お前は友達と話すのにも理由が必要か？」

まったく、この男は……不意打ちで良い事を言ってくる。今、僕の周りの世界にどれだけ打算に満ちた考えが溢れているのかは分からなくて、どこまで言葉を言葉通りに信じていいか分からない。街頭で演説する政治家、テレビの向こうでキャラ作りに必死のお笑

い芸人やアイドル、常に距離感を探り合うクラスメート。そして僕。だけでも、こうしてストリートに言葉を与えてくれる存在は貴重で、逆にそれゆえ申し訳なく、そしてありがたい。コイツはいい意味でバカだから、今の言葉だって恐らく正祐に取っては何の考えも無しに出たんだろう。それがどれだけ僕を助けてくれているのかわからずに。

笑顔をバレないように咬み殺す。本当に感謝し切れない。恥ずかしいから口にはしないけど。

「しっかしまあ、なんだ。俺も安心したぜ」

「？ 何にだよ？」

「今だからか言うけどよ、お前の事を本気で心配してたんだぜ。いつまで経っても女っ気が全くないしよ、そもそも女の子に興味があるのかも怪しかったしな」

「鏡クンっていつでもどこか素っ気無いよね、確かに」

「いつまでも何も、まだお前と出会って二ヶ月しか経ってないんだけどな」

「だーから、そんなレベルの話をしてんじゃねえよ。だいたい、毎日を下半身だけで生きてるような俺らの年齢からすりゃ、街中を歩いてるだけでも無意識に女の子チェックしたりとか、『お、あの娘可愛いな』とか『ああ、あんなオネーサマに踏まれたい』とか『ちっちゃい子にお兄ちゃんって呼ばれたい』とか色々あるだろうがっ！』」

「うん、分かった。とりあえず警察に自首しようか」

「正祐クンは変態さんなんだねっ」

「ほっとけっ！ とにかくも、だ。自称とは言え、お前の友人と自負してる俺としてはそんなお前が心配だったって訳だよ」

「あー、中身はともかくとして心配かけたのは申し訳ないと思うけどさ、それがどう安心に繋がるんだよ？」

「いや、だって彼女ができたんだろ？」

何を言ってるんだろっか、この男は。

流れるに僕にできた、という事なんだろうけど、話が見えない。つい首を傾げ、隣の水城さんを見ると興味津々な様子だ。へえー、と言わんばかりに僕を見上げていた。

「誰が？」

「鏡ちゃんが」

「誰と？」

「おいおい、とぼけんなよ。悠ちゃんと決まってるんだろ？」

瞬間、顔を見合わせる僕と水城さん。きょとん、とした表情を浮かべていたけど、時間と共に意味が水城さんの頭に浸透していったのか、徐々に顔が赤く、それこそリングゴのようになって使い古された表現がぴつたりはまるくらい変化していくのが分かった。

「あ、あはあははははははははははははははっ！ やだなあ、もう、

正祐くんは！」

「えっと、とりあえず訂正させてもらっけど、僕と水城さんはそういう関係じゃないから。バイト先でお世話にはなってるだけだし、将来的にはそういう関係になれば嬉しくないわけじゃないけど、今現在は全くそんな事実はないから」

そう告げてやると正祐の奴はこれ見よがしに深々とため息をついた。そして僕の首根っこを捕まえると水城さんから離れていく。

「お前なあ……察してやれよ」

「何をだよ？」

「興味のネエお前にとっちゃその程度なのかもしれねえけどな、悠ちゃんは本気だぜ？」

「そっか？」

「ああ。悠ちゃんはウチの学生じゃねえんだろ？」

「そうだけど、よく分かったな」

「当たり前だ。俺を誰だと思ってるんだ？　ウチの女の子は大体チエック済みに決まってるんだろ？　んで、だ。どこの生徒だかは知らねえけどな、わざわざウチの大学にまでお前に会いに来てるんだ。好きじゃなきゃ誰がそんな、もの好きな事するかよ」

水城さんならホントに暇だったから来たんじゃないか、と思わないでもないけど。

もしホントに水城さんが僕なんかの事を好きになってくれてるなら、それは嬉しいけど、その可能性は低いだろうと思う。

この前の事件の日、僕の手を振り払った水城さんの表情が頭に浮かぶ。あの行動自体はもう別に何とも思っていないし、水城さんの人となりを考えれば何か理由があっただろう。

例えば、対人恐怖症とか。

普段のキャラを考えれば何を、と思うかもしれないけど、人なんて誰でも一つくらいは予想外のバックグラウンドを抱えてるもの。表面的な情報では理解しえない何かを。ましてやあんなマトモじゃない組織に所属してるんだし、彼女も何か事情を抱えてるのは確かだ。まあ、嫌われてるとは思わないけど、僕に触られるのをアレだけ嫌がってた人が僕に対して恋愛感情を抱けるとは思えない。

「というわけで、だ」

パツと僕の首から手を離して、正祐は水城さんの方へ戻っていく。結構強い力で締められてた首の骨を鳴らしながら、僕も元の場所に戻る。

「んじゃ、悠ちゃん。俺はちーつと用事があるんで失礼するよ」

「え？　ああ、うん。そっか、もう少しお話したかったけどしょうがないよねっ」

「大丈夫だって。悠ちゃんがまた鏡ちゃんに会いに来れば、どうせ俺

ももれなく付いてくるから」

「なんだ、また女の子とデートか？」

「おうよっ！ 年上のオネエさんなんだけどな、見た目小学生並みに背がちっさくて可愛いのよ、これが。そのくせ気が強くてな！」

「……まあ、頑張れよ」

「お前の方こそな。ちゃんと悠ちゃんをエスコートしろよ」

「と言われてもなあ……」

経験が無いから、例えエスコートするにしてもどんなトコに行けばいいのか分からんし。

「フーことで、そろそろ退散するわ。人の恋路を邪魔しちゃあいけねえもんな」

そんな事を言いつつH A H A H A、なんてエセアメリカンな笑い声を残して正祐はどっかへ行ってしまった。そして取り残される僕と水城さん。閑散とした昼下がりのキャンパスにポツンと男女二人きり。次の授業の始まりを教えてくれるチャイムが鳴り響く。はてさて、どうしたものか。

隣を見れば水城さんはまた顔を赤く染めてるし。てか、水城さんって結構ウブだったのな。

僕の視線に気づいてコツチを見上げる。

「えつと……」

なんて言いながら恥ずかしそうに視線を逸らす水城さん。

確認だけど、水城さんは可愛い。僕なんかにはもつたないくらいに。キャラとしてはそれこそ数えきれなくらいにクセはあるけど、まあ許容範囲内。お世話になってるし、僕自身としても悪い感情はほとんど持ってない。

そんな彼女が恥ずかしそうにしてるのはどこか新鮮で、なんだか僕も調子が狂う。

(誰かを好きになったことがないから分からないけどさ……)

完全に狂ってしまったんだろう、今の僕は。でもきつとそれは今までの僕とは違って、肯定的に捉える事ができて。

まあ、なんだろう

僕も一度水城さんから視線を外して、何となく明後日の方を見る。ポリポリ、と指先で頬を搔いてみる。

「とりあえず、何処か行きますか」

「うういうのも、悪くない

・
・

「すみません、こんな所で」

言いながら僕はハンバーガーとポテト、そしてジュースの乗ったトレイをテーブルに置いて椅子に座る。大学生にもなっておやつ時間も無いけど、学校近くのマックにはそれなりに人が入っていて、みんな楽しそうにおしゃべりに興じてる。

「別にいいよー。アタシもジャンクなフード好きだし」

「もしかもしゃ、とポテトを頬張って頬をリスミたく膨らませて返事をする水城さん。そしてズズーっと音を立ててジュースを飲み干す。

「行儀悪いですよ」

「いいんだよつ。こういうのは本人が一番美味しいと思える食べ方をするのがベストなのさっ」

「まあ、それもそうか。」

「包み紙を外して僕もハンバーガーにかぶりつく。テーブル越しに彼女は指についた塩をチュパチュパと舐めてた。」

「それで、どうしましょうか、この後？」

「そうだねえ……鏡クンはどこか行きたいところある？」

「僕は別に欲しいものは無いですし、水城さんに付き合いますよ」

「うーん、どうしようか……アタシも特に無いしなあ。趣味も無いし。ま、別に無理にどっか行かなくても良いと思うよつ。ここでダベるのもアタシ的には有りだし」

「水城さんがそれで良いなら構いませんけど……」

「これが僕じゃなかったらどこか遊びに行ける所の一つでも提案するんだろつけど、残念ながら僕は僕でしか無く僕に僕ができる以上の事はできないわけで、ココはありがたく安いマックで時間を潰させてもらおう。」

「とは言うものの、僕はあまり会話のネタというものを持っていない。基本話しかけられなければ一日中口を開かずにごっこしてしまうような人間で、ファッションにも興味は無いし、僕が抱えてるネタといえば政治ネタか経済ネタ、それかスポーツネタという、女の子

と話をするには至って不向きなネタしか無い。というか、自分で考えて少し悲しくなってきた。今更自分を「普通」だと形容する気は海に浮かぶプランクトン並みに無いけれど、もう少しマシだと思っただけなのに。

「鏡くん、あのさ……」

無い頭で話題を必死で探していると、ありがたい事に水城さんの方から話を振ってきてくれた。が、不幸にも僕の携帯が同時に鳴ってくれやがりました。

開くとディスプレイには見慣れた番号。一瞬迷ったけど、後からかけ直すのも面倒なので水城さんに謝って通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「あ、鏡？ 今、大丈夫？」

「大丈夫だけど、友達と一緒にいるから手短にお願いね 母さん」

話しかけながら、思う。母さんに対して、死んでくれなだろうか、と。

僕にとってその考えは珍しいことじゃなくて、ふと母さんの事を思い出せばそう考えてしまう。それはとても罪深い事で、許されない事で、非人間的で、異常な事だと分かってはいるけど、そんな考えが頭から離れない。

決して嫌いじゃない。むしろ大好きだ。マザコンだと言われてもおかしくないくらいに。

「あ、そう？ 分かったわ。いや、今から荷物送ろうと思ってるんだけど、明日届くから大丈夫かなーって思って電話した次第です、ハイ。午前中部屋にいるの？」

「あー、まあ今のところ特に用事は無いけど確約はできないよ。多

分大丈夫だと思っけど」

「オツケー。なら明日の朝九時着で送ります。えーっと、米とインスタントの味噌汁と、お茶と、あ、あと缶詰が入ってるからね」

「うん、分かった。ありがと」

僕がそこに優秀な学生でやってこれたのは確実に母さんのおかげで、それと同時に今の僕という人間を創り上げてしまった。

無邪気さを捨てた幼少時代。苦勞してる母さんの後ろ姿を見て育ち、母さんを喜ばせるためにいい子でやってきた。けどそうやって生きるのに限界を感じ始めて、そして生きる目標を失ってしまった。他人の視線に怯えるだけの死にたがりになってしまった。

死にたい。けども母さんを悲しませたくは無い。自殺なんてしたら、母さんはきつと悔やむだろう。自分を責めるだろう。もしかしたらあとを追って自分も自殺なんて事をしかねない。それくらいに僕が愛されてる自覚はある。だから僕は緩慢で急速な死を願った。母さんを悲しませるのは変わらないけど、自殺することに比べれば、自己を責めるといふ点で遥かにマシであって、そして僕のエゴのギリギリの妥協点。

「どーいたしました。一人暮らしはどう？ もう慣れた？」

そんな僕の内心を知らずに母さんは楽しそうに話しかけてくる。僕は申し訳なさを押し隠し、ひたすらバレないように平静を装う。

「さすがにね。二ヶ月も過ぎせばボロ屋も都だよ」

「うん。だけど気をつけなさいよ。特に火の元周りは。それにそっちは大分より都会だから、犯罪も多いんだからね。常に警戒しておく事。いい？」

「ああ、うん。大丈夫。大丈夫だよ、母さん。それじゃ、友達待たせてるからさ」

電源ボタンを押して通話を終了。背もたれに体を預けたら、深いため息がこみ上げてきた。

「お母さん？」

「え？ ええ、そうです。すみません、お待たせしちゃって」

「どんな話だったか、聞かせてもらってもいいかな？ 鏡クンが嫌じゃなければ、だけどさ」

「大した話じゃないですよ。明日荷物を送るから受け取れるか、ていうのと、まあ、物騒だから気をつけなさいよ、ていう話だけです」

話しながら思わず苦笑いが出てしまう。何せ、犯罪最先端なところでバイトしてるのだから。

「鏡クンは兄弟とかはいるの？」

「いえ、僕と母親だけです。幼い頃に離婚してるので……」

父親の所在も知りませんが、まあどこかで幸せに暮らしてるのかもしれないし、どこかで野垂れ死んでるのかもしれない。僕としては後者の方である事を命を賭けてもいいくらいに切に願ってますけど」

「黒っ！！ 鏡クンが黒過ぎてダークサイドにつ！！」

「フォースを使えれば良かったんですけどね」

僕は善良でも純心でも無いですが。

「水城さんのところはどんなんです、ご家族は？」

「あー、うん、アタシのところは家族いないから」

「いない？」

「うん、昔いろいろあってね、お父さんもお母さんも死んじゃったのね」

その言葉を聞いた瞬感、ほとんど条件反射で申し訳そうな表情を浮かべたのが自分でも分かった。感情に動かされてるのではなく、状況に動かされているという事実。そっちの方に自分で申し訳なさを感じてしまう。

「それでね、鏡クンに謝らないといけない事と話しておかないといけない事があるんだ」

「謝る事と、話したい事、ですか？　じゃあ元々そのつもりで今日ココに？」

「あはは、ココに来たのはホントに暇だったからだよ。でも、いつかは話さないと、て思ってたから、ちょうどいい機会かなって」

「それは……ご家族の話ですか？」

「うん……。あ、でも別に話しづらいつて訳じゃないんだよ？　そういう訳じゃないんだけど、あんまり人に向かって話すことでもないから。ただ、鏡クンに勘違いされるのもなんかイヤだったから、話しておこうと思ってさっ」

勘違い、か。特に勘違いを招きそうな、水城さんに関する出来事は僕の頭の中には存在しなくて、強いてあげるならさっきの赤面とかだろうか。

「べべべ、別にアンタの事なんて好きでも何でも無いんだからねっ！　」と顔を真っ赤にして叫ぶ水城さんの姿を想像してみる。どこのツンデレ少女だ。

どこか顔に出ていたのだろうか、「何を考えてるのかな、鏡クン？」と聞かれたので「別に何も？」と素っ気無く返しながら聞く態勢を整えた。

「えっとさ、この前はゴメンなさい」

「と言われても、コッチとしては謝られる理由が思い当たらないん

ですけど……」

「この前の事件のとき、手を振り払っちゃったよね？ ずいぶんと遅くなっちゃったけど、それを謝ろうと思って」

やっぱりか、と思った。というか、それくらいしか理由は思い当たらなかったけど。繰り返しただけど、別にもう何も思うところは無いし、それを引きずるほど子供でもない。第一、あんな青ざめた表情をされて誰が責められるだろうか。

「あれはさ、鏡クンの事が嫌いだとかそういう訳じゃなくてさ、その、ね、実は他の人に触るのってダメな人でさ」
「潔癖症とか、そういうった類ですか？」

わざと間違っているであろう答えを口にする。本人の口から語られる理由を、推測とはいえ結構正解に近いだろうと確信に近いものを抱いていて、それを僕が話していいとは思わなかった。予想した通り水城さんは首を横に振る。

「別にそういうのじゃないよ。むしろ床に落としても三秒ルール適用するし」

「でしようね。僕もそう思っていました」

「……なんか引つかかるなあ。鏡クンってアタシのことどういう風に見てるのかな？」

「」想像にお任せします。僕の口からは何とも」

むむむ、と唸りながら少し睨む感じの視線を適当に受け流しつつ、続きを促す。

「むう……なんかもったいぶったのが馬鹿みたいになってきたなあ。とにかく、昔ある事件に巻き込まれました。その時家族はみんな死んでアタシも死にかけました。その時の事がトラウマで人に触れ

ません。オシマイ」

「サラッと凄い重たい話をしましたよね、今？」

「鏡クンのせいだからね。ホントはもつと重々しく話したかったのにさっ！」

「ゴメンナサイ」

プク、と頬を膨らませてふて腐れてしまった。けど、どうもこの人がやると怒っている様に見えない不思議。まあ、おかげで僕も責められてる気がしないから気が楽だけど。茶化した反省は心の中でコソツとしておく。

「鏡クンとはさ、仕事でも同じ班だし、もしかしたら無意識でまた同じような事しちゃうかもしれないから話したんだ。だから、あんまり気にしないでね？」

「大丈夫ですよ。確証はありませんでしたけど、何か理由があるだろうとは思ってましたし、ああいう職場です。たぶん、ほとんどの人が何かしらそういうトラウマ的なものを抱えてるんじゃないですか？」

「それでも、だよ。知ってるのと知らないのとじゃずいぶん違ってくると思っから」

「分かりました。覚えておきますよ」

「うん、メンドクサイだろうけど、これからも嫌がらず付き合ってくれると嬉しいなっ」

「大丈夫ですよ。僕は一度好きになったら嫌いになれない性質ですから」

空になったカップから突き出たストローをもてあそびながら、僕はそう口にした。

中々他人を、男女問わず好きになれない僕だけど、一度気に入ってしまったらもう僕はそいつを嫌いになれない。どれだけひどい事をされようと、どれだけ僕を怒らせようとも、結局は同じような付

き合いを続ける事ができる。それが良い事なのかは判断がつかないけど、それが僕なら僕はそれを受け入れる。

「ふふ、ありがと、鏡くん」

お礼なんてとんでもない。むしろ僕の方こそこんな僕に付き合ってくれてありがとう。

そう言いたくて、でも真面目な気持ちでありがとうと言うのが気恥ずかしくて、何故だか苦笑いが浮かんでくる。代わりにどういたしまして、と言おうとして僕は視線を水城さんへと戻す。そこに、水城さんの笑った顔があった。

普段の、年中笑ってそんな幼い笑顔じゃなくて、年相応、もしくはずっと大人びた、心底嬉しそうな顔。

それを僕は不覚にも「可愛い」と思ってしまった。

・第五話 狂鬼、覽負（キヨウキ、ランブ）・

・第五話 狂鬼、覽負（キヨウキ、ランブ）・

・零・

何が悪かったのか分からないの

単純な話さ。全部だよ

・一・

五月も終わり六月が来て、ついでに長い梅雨の季節がやってきた。雨も嫌いじゃないけど薄暗い毎日が続くというのも鬱陶しいもので、梅雨というのは夏の走りの暑さに加えて本格的に日本の夏らしくジメジメとしてくるから余計に鬱陶しい。更に日によっては南国九州といえども妙に肌寒かったりするから性質が悪い。おまけに傘を持って移動というのが面倒。かと言って傘を持ってなかつたりすると大自然のアリガタイ恵みを一身に受けて風邪を引くという、何とも素晴らしい結末を与えてくれるのだから神様というのはとんでもないお方だ。

モチロン僕も好き好んでそんな恵みを受ける趣味は無いので毎日傘を持って移動していて、今日はその恩恵を最大限に享受しながら薄暗い建物の中へと体を滑り込ませた。ずいぶんと年季の入った、コンクリート打ちっぱなしの警察署は夜になると経費削減の為か灯りも最小限しか点いてなくて、汚れた壁の雰囲気も手伝って変な気味悪さを感じさせてくれる。誰かとすれ違う時も相手の顔が良く見えなくて、すれ違う間際になってようやく確認できる暗さ。隣にできた、真新しい本館にて仕事をしている正規のお巡りさんたちが羨ましいと思う今日この頃です。

なぜ夜にそんな場所に僕がいるかと言えば、それは僕がこれからバイトだからに他ならず、暗さにあてられて少々陰鬱な気持ちに思わずため息をつきながらも一番奥のエレベーターの方へと向かった。ボタンを押せばチン、という軽い音が響いてグワ、とばかりに口を開ける。その口に自分から飲み込まれに行つて一人寂しい時を過ぎさなければならぬ。エレベーターに乗って、孤独に耐えながらも階数ボタンの下にあるスリットに与えられた特殊なカードを通す。すると、その下に新たにボタンが現れて、それを押すと建物の遙か地下にある我らが秘密組織へと辿りつくのだ！……なんて事は起こらない。そもそもエレベーターの手前にある地下階段がS・T・E・A・Rに行くルートなのだから。

ただ特殊なカードが必要だというのは本当で、踊り場までが微妙に長い階段をいくつか降りるとカードリーダーが有つて、そこにカードを通さないとフロアの入り口は開いてくれない。秘密組織と言う割には甘いセキュリティな気もしないではない。けど、どういう原理だかは知らないが偽造は無理らしく、ついでに不許可者が入ったら「とんでもないことが起きる」とは七海さんの談。「まあ、雨水君なら大丈夫でしょうけど、やってみる？」と言っていたから、きつと人権無視の本当にとんでもない事が起きるんだと思う。て言うか、僕でも大丈夫じゃねえよ。

そんなセキュリティを越えようとすぐ正面に部屋があつて、僕は

そのドアを開けて入った。ちなみにドアの上には「第三倉庫」と書かれたプレートが付けられていて、その文字に大きくバツが書かれている。そしてその横にはコピー紙に手書きで「S・T・E・A・R」と書かれていた。

非公開な組織なのは分かるけどあんまりじゃないだろうか。でも紛れも無くそこは僕のバイト先であり、ただのバイト君なのに僕専用の机が課長の目の前に設置されているところにそこはかたない悪意を感じるのは僕だけか。

「ん？ 鏡ちゃんじゃないか。こんにちは。いや、こんばんは、か？
仕事とは言え夜中にご苦労さん」

「うーっす、鏡ちゃん。お疲れさーん」

基本的には閑古鳥が鳴きっぱなしのここはいつも数えるくらいの人しかいなくて、今日は事務仕事が残っているのか、佳人さんと八雲さんが口々に挨拶をしてくる。誰かさんのせいですっかり僕の呼び名が「鏡ちゃん」に定着してしまったけど、それについてはとがめたり文句を言ったりはしない。彼らは新参者が馴染みやすいよう親愛の意味を込めてそう呼んでくれるので、距離感をまだ微妙に感じる僕にやめて下さいとは言う勇氣は無い。

すこぶる笑顔で彼らに挨拶を返すとカバンを机に置いてパソコンを立ち上げる。

「なんだ、鏡じゃないか。どうして来た？ 今日はお前の出勤予定はないぞ？」

「課長が今日までに書類を作り上げろって言ったと思うんですが…」

最近はどうにも事件がらみよりも、こっちでの事務仕事がメインになってきている。ちょっと前までは週に一回、多くて二回程度の出

勤で良かったのが、今じゃ週の半分以上の夜をここで過ごしてた。

「どうやら今まで事務仕事を専門にする人がいなかったらしい。恐らくは一般的な職場よりも少ないだろう書類でもそれなりに数はあって、かと言って報告書とかのフォーマットも全然定まってなくて、みんな書類作成のスピードがかなり遅かった。」

で、そこに僕が来てしまった、と。

「あー………そういうえばそんな事も言ったな」

最前線で戦うにはあんまり役に立たず、かと言って後方支援するにも人数は足りなくは無。まあ、端的に言えば平時は要らない、と。分かってたことだけども。

ならば、と言う事で課長から事務仕事が回されてた訳だけでも、どういう訳だか僕にはソツチ系の才能が多少はあったみたいで、他の人よりも書類仕事の仕上がりが断然早かった。おまけに無駄に凝り性な性格のせいで、誰でも使いやすいようにと思って改良に改良を重ねた、我ながら惚れ惚れするようなウツクシイ体裁にして提出してしまった。

「幸か不幸か、それに味を占めた課長が僕に書類を回し、みんなが回し、となっていて、気づけばコッチが本職になってしまってる。おかげでこうしてバイトの日数を増やさないと行けなくなっただけで。」

「なんか、疲れてますね。大丈夫ですか？」

「最近忙しくてな。特に偉方からのくだらんたわ言が煩すぎる」

「そう言って課長は目元をつまんで筋肉を解す。忙しい忙しいとはこの人の口癖だけど、こうして見ると本当に大変そうで同情してしま。」

「大体、私は管理仕事が嫌いなんだよ」

「課長として問題発言じゃないですか、それ？」

「そつだ、鏡。今日からお前が課長な」

「謹んでお断りします」

さも名案みたいな顔して言わないでください。そして残念そうな顔をするな。

同情はしても立場を取って変わるのには心底ゴメンだ。責任は好きじゃない。僕は僕の責任を取るだけで両手はいっぱいだ。

「とりあえずもうすぐ大体のフォーマット作成も終わりますし、これからはたぶん報告が読み易くなると思いますよ。皆さんが活用してくれるかは別ですが」

「ありがとう。頼りにしてるぞ」

仕事だからお礼を言われるほどでも無いとは思っけど、やっぱり言われると嬉しくなるのは僕が慣れてないからか。昔は結構頻繁に言われてた気がするけど、成長してからは無くなった。課長は普段あまりそつという事は言わないから余計に嬉しくて、何処かむずがゆい。きつと、幼い僕はこの感情が好きで堪らなかつたんだろつ、と過ぎ去つた過去に思いを馳せた。

「なんだ？ ニヤニヤして」

「何でも無いですよ」

ホント、我ながら単純だ。けど悪くない気持ちだ。梅雨の悪天候と夜中であることで低かつた僕のテンションがこつそりと急上昇する。立ち上げたパソコンに向かい、さあやるか、と作りかけのドキュメントを開く。指をポキポキと鳴らしてキーボードに手を置いたところで「ああ、そつだつた」と課長がつぶやいた。

「鏡、ちよつとコツチに來い」

僕に声を掛けると、ヒールでカーペットも何も敷かれていない寒々しい床をコツコツ鳴らしながら部屋を出て右に折れる。ソツチの方には仮眠室しか無い。そして夜が活動時間になるウチには、当然ながらそこを使う人間は殆どいない。なんでしょうか、と佳人さんと八雲さんに視線を送るけど、返ってきたのは斜めに傾いた頭とすくめられた肩。二人には心当たりが無いらしい。

怪訝に思いながらも課長の後を追って部屋へと入る。

本音を言えばこの部屋は好きじゃない。初めてS・T・E・A・Rに來た時もこの部屋で、自分の異常性を自覚させられ、選択を迫られ、拒否した。なのに結局はここに所属することになってしまった。あれだけ嫌がっていたくせに、今じゃこうしてすっかり慣れてしまっている自分がいて、無意識のうちに今の生活に従属してしまおうとしている。流されるのが体の隅々まで染み付いてしまっていて、その主体性の無さが腹立たしく、それをまた仕方ないと考えてしまう自分がいる事を考えてしまつてやるせない気持ちになる。

ため息一つ。栓のない考えを振り払つてドアを開けた。

「遅いな。時間は私だけじゃなくて世界全国あまねく有限だと思つていたのは勘違いだったか？」

「スイマセン、何か粗相をやらかしてしまつたかとドキドキしてました」

「言うなれば私を待たせたことが一番の粗相だが」

まあそれはいい、と話題を捨ておいて課長はドアの外に誰もいない事を確認すると後ろ手で鍵を掛けた。それを見て僕は不安になる。何かとんでもない事が、それこそ僕の両手どころか両脚その他全てを最大限に最高効率で使用しようともまかない切れない事が始まる様な、でもそれが何なのか全体像を把握できず、そもそも何をすれ

ばいいのかも五里霧中でさっぱり分からない、そんな漠然とした不安。

一度課長は僕の方を見て、だけど何も言わずに椅子を軋ませた。

「単刀直入に言うぞ。悠からしばらく眼を離すな」

突然そんな事を口にした。あまりに唐突で意味が分からない。あれか、水城さんがあまりにもフラフラと子供みたいにどっかに行ってしまうからちゃんと見張ってる、という意味か。非番の時はいつも街を歩き回ってるらしいけど、実は非番じゃなくて単なるサボリとか。

そんな軽口を口にしようと思ったけど、ギシ、と鳴らされた音が、自分でも信じていないそんな思考を、何だか咎めているみたいだ。そもそもそんな話なら僕だけ呼び出して、オマケに鍵まで掛ける理由は無い。正直、真意を測りかねる。だから代わりに素直な感想で応えた。

「唐突ですね。僕の代わりに水城さんが何かやらかしましたか？」

「すでに何かやらかしたのなら話は簡単なんだが……最近どうも悠の様子がおかしい」

「おかしいって……昨日も会いましたけど、何も変なところは無かったですよ？ まあ、あの人が変わった人なのは今に始まったことじゃないですけど」

「アイツが変人なのはみんな知っている。だが、何と言ったらいいかな……」

ズバズバと、それこそ人のコンプレックスだろうが泣き所だろうが遠慮無く切り刻んで喜ぶ課長にしては歯切れが悪い。そして、そこに妙な気持ち悪さを感じてしまう。

「具体的には何か無いんですか？ もしあればそこに注意して観察しますけど……」

「アイツのキャラクター以外に具体的に何か際立って変だ、という所は無い。無いんだが、どうにもな……嫌な予感がする」

この人が言うのと、ただの勘であつてもそれが正しいような、そんな説得感がある。

課長の雰囲気当てられたか、僕にも胸騒ぎにも近いモヤモヤした落ち着かないものがどこからかこみ上げてくる。嫌な感じ。絶対であり得ないのに、あり得ないのに起こると確信を持ててしまう。うつむいて、そして顔を上げる。静かな部屋で、地下なので物音ひとつしない。それが不安を倍化させる。

くだらない、と一笑に付したくて、でも課長相手にそんなことできるほどに豪胆な性格でもない僕はわざとらしくため息をついて「分かりました」と返事をした。

「悠がココにいる間は気にしないでいいぞ。私が見ておくからな。お前には現場に行った時や私がない時に頼みたい。できるならプライベートでもお願いしたいところだが、さすがにそこまでは強制できん」

「……意外ですね。課長なら四六時中、それこそ起きてる間ずっと一緒にいろつて言うかと思いましたが」

「なんだ、お前らそういう関係だったのか？ なら……」

「いえ、結構です。僕と水城さんはそういう関係でも無いですし、仮にそういう関係であつたとしても僕は自分でも他人でもプライベートは大切にしますから」

水城さんと、いわゆる「恋人」な関係になることを想像しないと、は言わない。かなり変な人だけど魅力的だとは思ふし、お世話になつてるし、感謝もしている。でも恋愛感情を持つているとは思わな

い、思えない。僕が抱く感情は、正祐に対するものと大して変わらない。そう、変わらないはずだ。

「とにかく、話はそれだけだ。時間を取らせたな」

「いえ、水城さんには良くしてもらってますし、役立てるのなら役に立ちたいと思いますから。一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「この話は他の人には？」

「いや、していない。これは根拠も何も無い私のただの勘だ。そんな事で連中に気を回されて、仕事でトラブルを起こされても困るからな」

「なら僕も話さない方がいいですね」

「そうだな。悠の耳に入るといろいろいると面倒だ。アイツはアイツで繊細なところがあるからお前も悟られないように気をつけるんだな」

「繊細って思ってる割には相当イジってますよね？」

「バカ、ああいうのはコツがあるんだよ」

そう言って課長はニヤ、と笑って自分の頭を人差し指でつついた。

「そんなモンですか？」

「そんなモンさ。下手なヤツがやれば恨まれるかストレスで爆発するかのどっちかになるのがオチだ。お前も気をつけるんだな」

「確かに課長ほど上手くできる自信はないですね。突然後ろから刺されないように注意しておきますよ」

真面目な話からあつという間にバカ話に切り替わって、部屋の空気が急激に弛緩した。

もうこれで話は終わりだろう。あまり人を監視するのは好きじゃないけど、まだ相手が水城さんで良かったのかもしれない。これでオッサンでも監視しろとか言われたら、何が楽しいんだか分かった

もんじやない。

「話は以上だ。仕事に戻っていいぞ」

「了解しました」

冗談交じりに下手くそな敬礼をして課長の脇を通りぬけて、鍵を開ける。課長はパイプ椅子を広げるとそこに座ってタバコを吸い始めた。

その表情は一見いつもと変わらないしかめ面で、でもどこか違うようにも見える。何も無い部屋の何も無い場所をじっと見つめ、深い思案を巡らせている様で、その答えが見つからずにいらついでいる風にも見える。

僕も序にタバコを吸って行こうか、とも思ったけど、ポケットの中で握りしめたそれをそのまま離れた。何となく邪魔をしてはいけないような気がして、そして僕は僕で考えなければならぬ事があることを思い出したから。

(水城さんの監視、か……)

何が違うというのだろう。いつもの彼女と最近の彼女。僕には分からない。毎日のように顔を突き合わせているけれど、課長の言う「予感」に関わるような仕草は、残念ながら僕には見つけられない。無論、課長の思い違いや考え過ぎ、という線も無くは無いのだろうけれど。

今日はまだ彼女は来ていない。けど、もうすぐ来るだろう。そしていつもと同じ様に「おいっすっ！」なんて言いながら声を掛けてくるんだろう。

「とにかく、注意だけはしておくか……」

部屋を出ながら小さくつぶやく。気は進まないけど、やらなければならぬ。それが仕事というものなんだろう。ただ願うのは、課長の予感が予感で終わることだけだ。

「おいっすっ！」

離れた所から元気な声が聞こえた。やれやれ、だ。どうにも気苦労が絶えないのは僕の巡りの悪さのせいか、それとも世の中みんなこついつた苦労を背負いながら生きてるのだろうか。

そんな益体も無いことを考えながら、予想通りの彼女の声を僕は聞いていた。

と、ドアが開きっぱなしになっていた部屋の中で携帯がなった。ピリリ、と遊び心の欠片も無いシンプルな着信音。課長はポケットから携帯を取り出すと、折りたたみ式のそれを開いて耳に押し当てて立ち上がる。

「はい、榊です」

何となく電話の内容が気になって、僕はもう一度部屋の中に足を踏み入れる。もし聞かれてマズイ内容なら課長の方から何らかしらのアクションがあるはずだ。まあ、聞かせた後に「空気を読むところじゃないか？」とか言っつてヒールで踏みつけてきそうだけだ。ああ、正祐あたりが喜びそうだな。

「……もう一度話せ、山江班長。どうやら私の耳はきちんと機能を果たしていないらしい」

背後からゾツとする声が聞こえた。

課長らしい、人を小馬鹿にした口調で、決して激昂してるわけでも、相手を大声で怒鳴りつけるでもない。だけでも突き刺さる様な

怒りのこもった冷たさが、直接言われているわけでもない僕を貫く。間違いはない。あれはかなりイラついている。電話で話しながらつま先で乱暴に床を叩く。

振り向きたいけど、振り向きたくない。恐らくは第一班の班長である山江さんが相手らしいけど、課長をここまで激怒させているのは何か。会話の内容が気になるけど、聞けばひどく面倒な事に巻き込まれるのは明白。いや、第一班は今も出勤中で、その責任者たる班長から連絡が来ているということは仕事からみである事は確かであればこの場で聞いても聞かなくても、結局は巻き込まれるか。要は聞かされるのが早いか遅いかの違い程度の、些細で取るに足りない差でしかない。

「謝罪も言い訳も要らん。時間の無駄だ。事実だけを正確に話せ。それで……ああ……ほお、なるほどな……貴様の言う通り大失態だな、山江。処分はまた後で伝える。とにかく貴様は隊をまとめて一旦帰還しろ。こちらはこちらで準備を進めておく」

パチン、と小気味いい音をさせて携帯が半分に折りたたまれ、少しだけ乱暴な仕草でスーツのポケットへと吸い込まれる。そして僕に背を向けたまま、

「鏡」

僕の名前を呼んだ。

「何ですか？」

「今から非番の人間に片っ端から電話を掛けて叩き起せ。寝てようが飯食つていようがセックスしていようが構わん。大至急全員をここに集める。三十分以内にだ」

そう言つて口元を歪ませる課長の笑い方に形容詞をつけるならば、形の上だとニヤリ、というのが適切かもしれない。でも僕には課長の口の中に鋭く尖つた、あらゆるものを貫いて一度食らいついたら絶対に話さない牙が見えた。そんな気がした。

「……何をするんですか？」

「何をする？ 決まっている」

言うや否や、課長は身を翻して僕の方に迫り、僕を押し退けてドアを開く。短めの黒髪が暴れて僕の顔を軽く叩いた。

「狩りだ」

・
・

全員が集められたところで課長から聞かされた話によると、あれだけ課長を激怒させた出来事は、端的に言えば犯人捕獲・殺害の失敗。能力者強盗犯たちの捕獲に山江班長率いる第一班が参加したわけだけでも、逆に多大な被害をこちら側が受けて、しかも逃げられてしまったらしい。

どこまでが本当かは知らないけど、第一班が受けた損害は相当なものだった。非能力者班員の死亡者一名。結界師の死亡者二名。戦闘要員の能力者の死者一名。他、重軽傷者多数。班員の六割が何らかの害を被つた計算になり、どれだけ被害が甚大かが分かる。相手は四人。それだけであれだけの被害を受けたのだから、なるほど、確かに大失態だろうし、課長が激怒するのも分らないでもない。

「でも第一班相手にそれだけ戦えるってすごいことだよなっ？」

ビルの壁にもたれかかってある建物の様子を伺う僕に、水城さんがどこか興奮したように話しかけてきた。

S・T・E・A・Rで動ける人間全員を動員した一大捜索劇は、あっさりと終わりを見せた。ただ単に聞き込みをしただけで。

警察に所属してるとは言え、僕らはその身分を公にはできない。だから警察手帳とかそういう身分証明できるものは普段は一切持っていないのだけど、課長は全員分のそれを持ってきて仮支給してくれた。どこから持ってきたのかは全く以て不明で、もしかしたら偽造してるんじゃないかとも思わないでもないけど、ともかくこれを使って、テレビとかでよく見る聞き込みなんかを僕らは行った。

その行為自体は、まあ多少のあこがれみたいなのもあって楽しかったといえは楽しかったけど、最初、僕はこの行動に疑問を抱いていた。そもそも、この街にはもういないんじゃないかと。というか、普通ならどっかに逃走してるはずだ。強盗して奪った金と一緒に。声を大にして聞くのははばかられたから、一緒に捜査をした佳人さんにコソツと聞いてみたところ「たぶん大丈夫だよ」という返事が返ってきた。ただ、理由は教えてくれなかった。

ともかく、犯人の容姿とか特徴は分かっているわけだし、疑心暗鬼ながらも僕と佳人さん、水城さん、それに唯ちゃんの四人で探し回ったところ、二日掛けたただけであっさりと、ホントにあっさりと居所が分かってしまった。

戦闘能力は皆無な僕だけど、事、能力者の捜索に関しては自信があった。タバコの灰みたく吹けば消し飛ぶ程度の自信だけど。そんななけなしの自信を頼りに担当範囲の中で僕だけが感じる違和感を中心に捜索にあたって行った結果、それらしい目撃者情報が見つかって、最終的には恐らく犯人たちが集うであろう建物にまでたどり着いてしまった。捜索場所は各グループに割り当てられたから、たまたま僕らの担当範囲が当たっただけなんだろうけど、何と云うか、拍子抜けもいい所だった。

「しかし、まだこの街にいるなんて間抜け過ぎやしませんか？ 僕らに顔が割れてるわけですし」

「一班を返り討ちにしたくらいだから、やっぱ自信があるんじゃない？」

「それなら尚更、突入部隊に加わりたくはないんですけど」

話しながら僕はこの間の課長の話を出す。様子がおかしいとは言っていたけど、こうして面と向かって話している水城さんにおかしな様子は見つからない。この二日間もずっと一緒に行動していたけど、何も変なところは無かった。

いつも通り笑って、いつも通りイジラれて、いつも通り話して。

そこにいたのは、まだ知り合ってから短い、でも僕の知っている彼女でしか無かった。

「二人とも。話すのは構わねーけどさ、ちゃんと見張っててくれよ？」

「あつと、スイマセン」

「大丈夫だよ、さつきから佳人クンと唯ちゃんがずっと見張ってるんでしょ？ ねー？」

そう言って水城さんが佳人さんの足元でずっと見張ってる唯ちゃんに同意を求める。唯ちゃんは黙って水城さんを見上げていたけど、無言のままブイサインをした。

「ん〜、やっぱ唯ちゃんは可愛いよお……ねね、このままお姉ちゃんどっか行かない？」

「仕事ほっぽり出して少女誘拐するのは止めて下さい」

まあ唯ちゃんは十六歳らしいけど見た目は小学生だし。そんな彼

女が頬染めてハアハア言ってるなんて絵面は誰がどう見てもアウトだ。出来る限り知り合いから犯罪者は出したくない。

そんな二人を見つつ、佳人さんは深々とため息を吐いた。

「そりゃそうだが、俺一人だとどんな見落としするかワカンネーし」

「今回へマしちやったら、課長から殺されちやうんじやない？」

「それは……有り得るなあ……そうなったら俺ら三人連帯責任ってところか？」

「四人じゃないんですか？」

「課長も唯だけには甘いんだよ……」

「さいですか……」

実はS・T・E・A・R最強は唯ちゃんじゃないだろうか。極悪上司を裏で手玉に取る見た目幼女。有り得そうで怖い。

水城さんに抱き締められてる唯ちゃんを見ると、唯ちゃんは無垢そうな眼でこつちを見上げると、小さく小首を傾げた。

……考えるのを止めよう。世の中知らないでも良い事は腐るほどあるし、唯ちゃんは唯ちゃんだ。僕の知る唯ちゃん像を壊さないようにしておくのがきつと僕の精神衛生上一番適切な行動だと信じてる。

「はあ……半殺しで済ませてもらえるかなあ……」

悲觀的になつた佳人さんがまた深々とため息を吐いて頭を抱えた。さすがにそこまでは課長もしないとと思うけど、あの人だと、どうだろう。ああ、あの人だと「むしろ殺してくれ」ってレベルのことをしてしまっそうだな。

「なんだ、お前らそんなに私に殺されたいのか？」

突然背後から掛けられた声に、僕ら三人仲良く背筋が伸びた。そおつと後ろを振り向くと、いつも通りのタイトスーツ姿で腕組みをししてる課長の姿が、予想通りあった。

「いえいえ、まだへまはしてませんから。……たぶん」

「そうか、ご期待に応えてやれなくて残念だな」

そう言っつて課長は僕らが見張つてた建物を見る。

何の変哲も無い、至つて普通のアパートの一室。少々ボロくて、周りのマンションとかのせいで目立たないけど、事件を知つてる僕らとしては、その平凡さが逆にいかにもな感じに思えてくる。

課長は隠れる事もせず堂々と仁王立ちでその玄関を眺めると、小さく鼻で笑つた。

「それで、課長。いらつしやつたのは課長だけですか？ 他の突入部隊の方々は……」

「ここにいるので全員だが？」

周りを見回す。通行人すらまばらで、ここにいるのは僕と、佳人さんに水城さん、そして今来た課長の四人（唯ちゃんは結界師なので突入はしない）。他には……誰もいない。

「嘘……ですよね？」

「私は嘘が嫌いだな」

「マジですか？」

「マジだよ」

「冗談だよねっ？」

「だとしたら笑えない冗談だな」

僕ら三人の希望と願いを完膚なきまでに完全に潰しきつて、課長

は一人アパートの方へ歩き始めた。緊張も、気負いも一切合切無い、いつも通りの課長のままでこれ以上無く自然体。

(何で課長だけなんですか!?)

(知らないよっ! ていうか、どうしてトップが現場に出てくるかなっ!?)

(課長つてやつぱどう考えても現場向きの人間だよな)

(だからって最前線に出てきちゃダメでしょ、常識的に考えて!)

確かにこの人の性格から考えてデスクワークより体動かすほうが好きだつていうのは分かる。分かるけどさ、一人で来るつてどう考えてもおかしい。これだけ堂々としてるんだから自信はあるんだろうと思う。だけど、無茶が過ぎるとしか思えない。

中に何人いるのか分からない。でも、最低でも二人はいる。それは確認した。

あの厳しい山江班長に訓練された、たぶん第二班より強い第一班をも退けた連中だ。ハンパなく強い連中だろうと思う。ましてこっちは僕と水城さんは戦闘要員じゃない。実質的な戦力は課長と佳人さんの二人。敵うはずが無い。

僕がやられるだけならまだいい。どうせ死なない体だ。痛いのは、それこそ死んでも嫌だけど、嫌だで済む分問題は少ない。僕が我慢すればいいだけの話だ。

でも課長がケガをしたら? いや、ケガならまだ大丈夫。だけど、死んだら? 佳人さんが死んだら? 水城さんが……死んでしまったら? 近づいてくる、起こり得るなんて表現じゃ足りなさ過ぎる現実の足音に体が冷えていく。無意識の内に手は拳銃へと伸びていて、だけでもその感触は心細い。そもそも僕は、まだ人を撃ちたくない。

(恨みますよ、課長……)

頭の中で考えられる状況をシミュレートして、その時に僕は何をすべきか、何をできるのかを弾き出そうとする。けれどもできることは多くなくて、最善は僕が覚悟を決める事。撃つ事ができないなら撃たれるしかない。

「課長。俺らで突入するのはもう止めないっすけど、せめて課長の力を教えてくださいよ。じゃないとフォローもできないっすよ」

「私か？ 私のはコイツだ」

そう言っ取り出したのは一丁の大型拳銃。ただし僕とかに渡された様な物じゃなくて、見るからに使い込まれた傷だらけの銃身を持ったそれ。

自分の顔の前に掲げ、その向こうからは鋭利な課長の眼が覗く。

「コイツがあれば、私は負けんさ。例え相手が能力者だろうが魔法使いだろうがな」

驕りじゃない、絶対の自信。間違いも失敗も起こらない、起こさせない。ただ成功しか見えていない。

課長が唯ちゃんを見ると、彼女は自然な動きで水城さんの腕の中から抜け出した。ペコリ、と水城さんに向かって頭を下げると、トテトと足音がしそうな感じで僕の方に駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

「大丈夫、きつと上手くいきます」

「え？」

それだけ告げて彼女は何処かへと走っていった。僕が声を掛ける暇もなくビルの影に消え、僕ら四人だけが残された。今の言葉は何だったんだろうか。唯ちゃんなりの励ましの言葉か？僕らが不安に

なっているのを見て、元気づけてくれたんだろうか。だとしたら、こっちも気合入れてしっかりしないとイケないな。

「鏡」

課長が僕を呼ぶ。視線はすぐ目の前に迫った安っぽいドアに釘付けのまま。

「中から結界が作られた感覚はあるか？」

「……いえ、距離までは分からないですけど、ここ数分でこの方向からはそんな感覚は無いです」

そう応えようと、課長が左手をサツと上げる。それを合図としていたのか、全身に纏わり付く、結界の違和感を感じた。

「悠。戦えるな？」

「できれば使いたく無かったんだけどね……」

濃い苦笑いを浮かべながら水城さんも銃を取り出す。小型の拳銃で、装弾数も少ないリボルバータイプ。課長が持つもの比べればずっと小さいけど、「人の死を消す」彼女の能力とその元になっている性格とを考えればひどく似つかわしくない。

「行くぞ」

静かな声で告げる。

課長の拳銃が炸裂音を響かせて鍵を破壊。足を包んだ頑丈なブーツが薄っぺらな扉をぶち抜いた。

蝶番ごと弾け飛んだかと思うくらいに勢い良くドアが開き、そしてまた銃声。

ほぼ同時に突入した三人に比べて僕は一拍遅れて中へ入る。

暗い室内。どんよりとしていた。だろつと容易に推測できる部屋に、苛烈な空気が侵略していた。足を止める事無く課長が奥へ進む。踏み抜かれた床が悲しげな悲鳴を上げ、シンクに置きっ放しの食器の山が崩れて擦れ、甲高い耳障りな音を立てる。

課長の前には台所と居室を隔てるドア。けどもそれを無視して引き金を引く。マズルフラッシュが刹那の時間だけ中を明るく染める。そして悲鳴が耳をつんざいた。

ダン、ダン、ダン、と連続した発砲音。その度にドアに穴が穿たれて木片が散る。

二つめのドアも蹴り飛ばされる。ジメツとした空気が僕に向かって流れてきた。

中に男が二人。札束が乱雑に床に散らばったその部屋で一人は腹から血を流しながらも、こちらに手を向けていた。

ヒヤハ、と奇妙な笑い声がほんの一瞬だけ室内に響いて、だけどそれもすぐ銃声にかき消される。殴られたみたいに男の頭が弾けて壁に叩きつけられる。ベチャリと音を立てる。

その横を課長の体が通り過ぎ、もう一人に肉薄。体ごと男を壁に押し付けると肘で顎を打ち抜き、そのまま腕を掴むと地面へとたたき落とした。

一瞬の出来事だった。唾然として僕は男を冷たく見下ろす課長の姿を見つめる。突入して一分も経っただろうか。あるいは三十秒、いや十秒も掛かっていないかもしれない。たった一人、たった一人で能力者二人を殲滅してしまった。

呆気に取られたのは僕だけじゃない。水城さんも佳人さんもポカッ、と口を開けていた。課長以外部屋の中に入ってもいない。

「課長つて、何者ですか……？」

「俺の方が知りてえよ……」

「うーん……只者じゃないとは思ってたけどさ、これは流石に予想

して無かったよ……」

口々に僕らが感想を漏らす中、床に倒れてる男の腕がピクリと動いた。

「あぶな……」

叫ぼうとしたけど、その必要は無かった。声を上げると同時に弾けた音がして男の肩から血が吹き出した。

「がああああああつっ!?!」

「ピーチク叫ぶな、やかましい」

もう一方の腕も撃ち抜き、一万円札が赤く染まっっていく。くぐもった声でうめくその表情は泣いているのか、それとも笑っているのか、僕には判断がつかなかった。課長が男の胸元をつかむ。そして一息で男を持ち上げると壁に叩きつけ、ゴツイ銃を喉元に押し付けた。

「へ、へへへへへへヒハハアハハハ、な、何だよ、金が欲しいのかよ。金ならやらねーよ。絶対にやらねーぜ」

「そんな汚い物はいらん。それより私の質問に遅滞なく偽証なく正確で簡潔に返答しろ」

言いながら課長は男の喉により強く拳銃を押し付けた。男の方は上手く呼吸ができないのか、コフ、と咳こんで、だけど笑いながら話を続ける。

「ああ絶対に絶対に絶対にやらねーやらねーよ。金は俺んモンだ。アンタが何処の誰だろうがこれは俺のモンだ絶対に誰にも奪わせね

「よ、ヒヤツハハハハ！」

金、金、金、か。

力に飲まれた能力者は自分の欲望を最優先で行動する、とはどこかで聞いたけど、彼の場合はそれがお金だったって事なんだろうか。大金にそれほど魅力を感じ無い僕には到底分からない欲望だけど。しかし、そうか。だから彼らはこの街から逃げなかったのか。何よりも欲しかったお金を手に入れてしまったから。そこから先の事は彼らにとってはどうでもよかったと言うことか。まあ今更そんな事分かったところでどうでもいいのだけれど。

僕らが彼らの行動に納得しているのをよそに、課長の方は彼らと話にならない、と判断したのか、質問の仕方を変えた。

「他の二人にも渡さないのか？ お前たちは四人で金を奪ったはずだが」

「ああやらねーよ。あのヤローは力も無エクセに取り分だけ要求してきやがるからよ、俺の電気で真っ黒に焦がしてやったぜギヤハハハハハハハ！ 面白かった ぜい！ 電氣流すたびによ、打ち上げられた魚みてーにピクピク跳ねやがんの！ テメーは魚かつつーの！ あ、焼き魚か？ どっちでもいいか、ヒヤハハハハ ハハッ！」

「ほう、二人とも殺したのか？」

「ヒヤハハハハ、ハ？ いんや、もう一人のヤローは金はイラネーつつつて事が終わったらどっか行っちまったぜ？ ま、元々金はいらねーつつつてたから仲間に加えてやったんだけどな？ 金が欲しいとか言い出したらまた殺しちまえば文句はねーし、それはそれで面白そうだったんだけどよ」

「なるほどな。つまりウチの連中をいたぶってくれたのはじゃなくてソイツという訳か。私は恩には恩で報いるタイプでな、貴重な情報くれた貴様に感謝してやるよ。ありがとう。それじゃあな」

「あ？」

タン。

妙に軽い音だった。重苦しきも何も無い、淡白な鉄の声。引き金が引かれて銃の喉が男の喉に穴を開けた。男の後ろの壁に赤黒い血が叩きつけられて、壁をずり落ちる男の体が赤い線を引いた。部屋の中で立っているのは課長だけだった。

「……私だ。ああ、とりあえず最低限の責任は取らせた。処理部隊をこっちに回せ」

ワインレッドの携帯を取り出して電話の相手に指示をする課長。簡潔に用件を伝えるとスーツのポケットにしまって無言のまま僕の横を通り抜けていった。

「……とりあえず今日は出番なし、か」

佳人さんがぼやいて、頭を掻きながら外へ出ていった。僕も外へ、と思ったけど、何となく部屋の方へと足を進めた。

カーテンの締め切られた室内に散らばるコンビニ弁当のカス、ビールの空き缶、焼酎のビン、そして強盗の結果の札束とその上で寝転ぶ男二人。生臭さと酒の臭い、錆びた鉄の臭い、硝煙の香り。あんまりにもあんまりな臭いの集合にむせ返りそう。

まだ男二人の体からは暖かい血が流れていて、少しずつシートや札を濡らしていた。

僕は思い出す。先日に関連していた事件現場の惨状を。その時に残っていたのはバラバラにされていた死体に首だけの女性。口に出すのはばかられるようなあまりに前衛的なオブジェが部屋に飾られていた。それと今、僕が立っているこの場所。この二つは、主観的に見ればあまりに違うだろう。背景も手段も目的も印象も全く違う。だけど客観的に、たった一言で表すならば大した違いは、き

つと無い。ただ人が死んだ。それだけの話だ。

僕は僕らがしている事を否定しないし、否定できない。必要な事で、S・T・E・A・Rが無かったら困る人はたくさんいて、必要だからこそ、望まれたからこそ僕らはここにいる。だからといって肯定もしていいものか、僕には分からない。僕らがしている事と、彼ら狩られる側がやっている事に本質的な差はどちらもない。ただの人殺しだ。生死の曖昧さの中に、明確な境を引いている、そんな仕事。

部屋の中に背を向けて、冷蔵庫にもたれかかっている水城さんの前に並ぶ。そして通り過ぎるけど水城さんは逆に部屋の方に体を向けた。

「水城さん？」

「うん、ちょっと鏡くんは先に行ってくれないかなっ？」

ニコツと笑って、僕を外へと促す。僕が考えていたみたいに、水城さんも何か思うところがあるのかもしれない。特に彼女は人の生き死にに対する思いは強いだろうし。だから、わかりました、とだけ応えて彼女を置いて外に出た。曇天の空に太陽は無い。汗ばむような蒸し暑さがシャツの下の肌にまでまとわりついて、ひどく不快な気持ちにさせる。

外に出て数歩歩いたところで立ち止まって、もう一度アパートの方を見た。何か引つかかっている様な、よくある例えなら魚の小骨が喉に引つかかったというところで、敢えて別の比喻を用いるなら歯の間に食べかすが引つかかった時の様なそんな気持ち悪さ。例えと違うのは原因が分からないことで、それがますますイライラさせる。

「ん？」

顔に当る冷たい感触に空を見上げると、雨が降り始めて、見る見る間に雨脚が強くなってきた。

「……まあいつか」

雨は嫌いだけど、何となく今日はこうやって雨に打たれていたい気分だった。どうせ傘も持ってきてないし、今濡れるか、後で濡れるかの違いしか無いし。後は風邪を引かないことを祈るだけ。

頭が冷えていって、その感覚が心地いい。その心地よさに任せて、僕は水城さんが出てくるまでの間、そうして雨に打たれ続けた。

・三・

電話が掛かってきたのはその日の夜だった。いや、夜と言うには時間は朝に近過ぎて、朝と言うには世界は暗過ぎる、そんな時間。枕元でガチャガチャとうるさい音を立てる携帯を僕は掴むと「ふあい？」と寝ぼけた声で返事をした。

「ゴメン、鏡クン。眠ってたよね？」

「そりゃまあ、時間も時間ですから。それでどうしたんですか？ 事件ですか？」

そう聞き返すと、水城さんは慌てた様子で、電話越しでも首をブンブンと横に振ってるのが分かるくらいに否定した。

「事件も起こったことは起こったんだけどね。でもそっちはもう解決したから。ただ……」

「ただ？」

何か言いたそうな様子に、僕は寝ぼけ眼を擦るとメガネを掛け、自分一人の部屋で姿勢を整えた。何となく、何となくだけど彼女が何か重要な事を言いそうな気がして。

けれども僕の予想とは裏腹に「ううん、何でもない」と殊更に明るい声で彼女自身の言葉を遮った。

「夜中に電話しちゃってゴメン。もう切るね」

「水城さん」

「うん、大丈夫。ホント、大したことない話だから。何となく鏡クンの声を聞きたくなくなっただけだから」

「それはそれで嬉しいんですが……本当に大丈夫ですか？」

「ダイジョーブダイジョーブっ！ 心配かけちゃってゴメンよ、ホント。んじゃねーっ、おっやすみい！」

夜中だというのに元気な声を残して彼女はいなくなった。耳元の受話器からはツーツー、という音だけが鳴り響き、静かな僕の部屋にひっそりと広がった。

一体、何の様だったんだろう。半分寝たままの頭で考える。事件があったというから、たぶんそれ絡みで何かがあったんだろう。それは僕に関係してくることなのかもしれないし、彼女自身に関係することなのかもしれない。だけど、いずれにせよ、彼女は殊更に知らせる必要は無いと、電話を掛けた後に思った。

大したことなのかもしれないし、本当に大したことじゃないのかもしれない。

（明日、課長にでも聞いてみるか）

もし何か特筆すべきことがあったのなら、伝えるべきことは僕にだってキチンと伝えるし、そうでないなら何も僕には言わない。課

長ならその判断は間違わないだろう。その程度にはあの人は信頼できる。そう結論付けて、僕はまた布団の中に潜り込んで眼を閉じた。数秒も経たずして意識が遠のき、夢の中へ吸い込まれていく。そしてそのまま僕はその晩の事を忘れてしまった。

- 四 -

二週間という時間がどれほどの時間なのかは僕にはよく分からない。分からない事が僕には多すぎて、そして理解が及ばない事があまりにもこの世には溢れているのだけど、時間というのは本当に度し難い事の一つであると言わざるを得ないと考えるのは僕だけだろうか。「神はサイコロ遊びを好まない」と言ったとある物理学者の理論によれば、時間は不変でもなければ普遍でもない。観測者が光速に近い速度で移動していれば、静止している観測者との時間の進み方が違うというのは、どうやら二十一世紀初頭の現代においてはこの上なく真実に近い事実であるらしく、だからと言ってそんな小難しい理屈を聞かせられたところで、「で、何？」で片付いてしま

う。いくらそんな特殊相対性理論の恩恵を知らず知らずの間に享受しているしても、今生きている人の大多数の中でそんな情報は全く意味を成さず、意味を成して更に僕が理解をすることができないのは物理現象では無くて主観としての時間の進み方だ。光速で活動する人間なんているわけが無いから時間の進み方は万人で同等。なのに人によっては時間経過を速く感じたり遅く感じたり、はたまた同じ人間でもシチュエーションによって違いが現れるのは誰だって知っている。とにかく違う。長い時は果てしなく限りなくどこまでも長い。なのに短い時は極端なまでに一瞬。

僕が僕という人間の在り方を自覚して以来、僕の中で時間が経つ

のは遅くて遅くて、耐え難いとは言わないまでも苦痛だった。だけ。

ここ数カ月はとんでもなく速い月日だったと言い切れる。雨の夜、傘の下で明々と輝く携帯のカレンダーを見ながらつくづく思った。

魔法だか超能力だか分からないけど摩訶不思議な世界に巻き込まれて、何故か死んで、何故か生き返って、死ねない体になって。

水城さんに出会って、課長に出会って、佳人さんやら七海さんやら八雲さんやら唯ちゃんやらS・T・E・A・Rの連中に出会って僕の時間は加速し始めた。そしてそれは今現在目下進行形で加速中だ。最近二週間は極力S・T・E・A・Rに顔を出すようにしていた。目的は水城さんの監視。

課長は課長が水城さんの近くにいない時だけでいい、と言ったけど例の事件のおかげで元々の忙しさは更に増加してみたいで、S・T・E・A・Rに行っても課長がいない事が多い。だから特に他に目的もやる事も無い僕としてはできるだけS・T・E・A・Rにおいて水城さんの近くにるように心掛けていた。

で、だ。監視が目的と言っても、行動自体にこれまでと大きな差が生まれるわけもなく、やっつてことは変わらずいつも同じ。いつも通り話して、いつも通りに仕事して、その時に少し注意を払うだけ。

だというのに。

彼女はやはり異常だった。そう結論付ける事はしたくないけれど、観察の結果、そんな結論以外を導くのも不可能だと思える。

何が異常か、と問われれば僕は間違いなく答えに窮する。傍から見ても、どの角度からどの時間にどのタイミングで彼女を見ても彼女自身に変化は無い。一緒。当たり前だ、彼女は一人なのだから。

だけでも、何かが違う。決定的な、何かが。それを感じる様になったのは、四人で突入して、結局は課長一人で解決してしまったあの事件以来。

水城さんだけ部屋に残って、僕は雨に打たれながら待っていた。

けれどそれもたいした時間じゃなくて、程なく彼女も外へ出てきた。

「濡れてるよ？」

「そんな気分なんです」

「アタシもおんなじ気分なんだっ」

と、そんな会話をして二人で濡れながら帰ったあの日。

別れ際に水城さんは笑った。

「それじゃあ風邪ひかないようにっ！」なんて言いながら笑ったその時の笑顔。見慣れたはずの笑顔が何だかひどく純粹で、なのにひどく歪な物に僕は感じてしまった。何もおかしな事なんてないはずなのに。

そう、おかしくなんて無いのだ。だから、恐らくは僕よりも水城さんの事を知っているだろう課長でさえ、課長のキャラに似合わない曖昧な表現しかできなかったのだ。ぽっと出の僕が少々頭を捻ったところでより適切な表現なんてできるはずがない。残念ながら「何か違う」としか言えない。

「それはそうとしてもさ……」

家へと帰る道すがら、独りごちる。おかしいのは分かった。それで監視を続けたは良いけど、それがどう今後に繋がっていくのかが見えない。本人が自分自身の異変を自覚してるのかどうかも怪しいし、またその異変が誰かに悪影響を及ぼしてるかといえはそうでもない。彼女は彼女の中にしか変革をもたらしていないのだから、第三者が口を出すのもおかしいし、そもそも何に対して口を出せばいいんだか。

「ま、そこは課長が考える事かな」

あつさりと思考を放棄してそう結論付ける。監視の件も課長の指示だし、それが当たり前だ。何か問題があると感じたからこそその監視だろうし、ならば異常を発見した時の解答は課長の頭の中に、僕が予想もつかない形で入ってるんだろう。だいたい第三者の監視なんてものを趣味でやるほど僕は酔狂ではない。

だけでも。

あつという間に過ぎた二週間。それはすなわちこの二週間に僕が充実感を感じていた、ということになるのだろうか。課長の状態も落ち着いてきて、僕は僕でまた明日から以前の状態に戻る事が決定したけれど、それはそれでどこか残念な気もしている。

嫌なこと程時間が経つのは遅く感じて、楽しい時間はあつという間に過ぎ去ってしまう。これはきつと世界中どの人種、どの国の人であつても共通な事だと思うし、僕もその例からは漏れることは無かった。

だからもう断言してしまおう。僕、雨水鏡は今この時間を楽しんでしまっているのだ。

非日常と日常が接する境界線上のスリルを楽しんでいるのでは無くて、最低だ何だと散々こき下ろして毛嫌いしてきたこの世界そのものを楽しんでしまっているのだ。非日常は僕の中でとつくに日常へとその居場所を移してしまっているし、それでもなお僕は日常を楽しんでいる。

大学での授業も、正祐とのアホ臭い会話も、寝不足の毎日も、危険な仕事も、事務所での事務仕事も、S・T・E・A・Rのみんなとの会話も、課長の暴言も、そして水城さんとの一日も、全てが僕に満足感を与えているんだ。

モチロン全てが楽しいことばかりじゃない。有り得ないことに死んだりもしたし、講義は退屈だし、事件現場を見た時なんかは陰鬱な気持ちにだつてなる。仕事がメンドクサイ時もあるし、疲れて何もしたくなかつたりもする。

だけどそれらを全部ひっくるめて「生きる」事を楽しめる。少

なくとも、このまま生きていても悪くない、と思える程度には。

「まったく、どういふ心境の変化なんだろうな……」

ホント、ワケが分からない。あれだけ生きることが嫌がっていた僕が今、正反対の事を考えている。梅雨のこの季節は天気がコロコロと変わりやすいけれど、それに負けにくいくらいあっさりと変わった。例えるなら乙女心と秋の空。

「……………」

なんか違うな。

まあ我ながら気持ち悪くもあるけど、少なくとも健全な変化であることは 変わりない。死にたい死にたいとそればかり考えながら生きるよりは良いはずだ。

ピシャピシャと歩く度に足元で水が跳ねて、だけでも気がついたら傘と地面を打つ雨音は消えていた。傘をどかせて夜空の下に体を晒すけれど、冷たい感触は無い。いつの間にか雨も上がっていたらしい。

傘を折りたたんで、雨の止んだ夜道を歩く。何となくだけど今日はいいい夜になりそうだ。

…………… っと思っただけけど、やっぱり現実は厳しいらしい。もしくは神様は僕が嫌いなのか。そうなのか。そうに決まってる。まあ僕も嫌いだから文句は言わないけれど。

夜中だから辺りはメツチャ静かだし、静かだということは当然昼間なら聞こえないような小さな物音でも聞こえてくると言う事で。

異変、というか異音はすぐそばの公園からだった。暗い茂みの方からガサガサと何かが動いて擦れる音が聞こえて、それだけならモノ好きなカップルがイチャついてるくらいにしか思わなくて僕もス

ルーして行つたと思う。そんな現場に居合わせて観察するほどモノ好きでも無いし、むしろ気まずい。

だけでも物音はそれだけで終わらなくて、続いて男の押し殺した怒鳴り声と殴るような打撃音が聞こえてきた。

どうしようか。僕は迷った。男の叫びの自身はよく聞き取れなくて分からないけど、声の調子から言つてまずい感じが強くした。まるで、理性と本能の狭間のギリギリを綱渡つてゐるみたいに。

近づくべきか、それとも聞こえなかつたふりをしてこの場から遠ざかるべきか。倫理を考えるならば当然様子を伺うべきで、そうじやないにしても警察に通報する方が良いに決まっている。でも面倒事に巻き込まれたくないのも事実で、このまま立ち去るのが僕にとつての一番の平和。厄介事に慣れたとは言え進んで関わりたくは無し、怖いお兄さんと面と向き合うには、僕には勇気が足りない。大声で怒鳴られればきつとすぐにビビつて謝つてしまふ。喧嘩だつて小学生以来したことは無いし、ここ最近の荒事でも相手を殴つた事は一度も無い。だから本当に何もしないで、耳を塞いで眼を閉じ、早足でかつ足音を立てないようにしながらいなくなるのが一番なんだ。

なのに半端な反発心が僕を縛る。

命のやり取りをしてきたのにこの程度で尻込みするのか、と考えれば情けなくなってくるし、ソレ以上に厄介なのが今の僕の立場。バイトで、公にできない身分であっても僕は一応警察官であつて、それなのに犯罪から眼を逸らしていいのか、と役に立たない義務感が僕を急き立てる。

人生が楽しくなつてきて調子に乗つてゐるのだろうか。後押しする声が僕の中で次第に強くなる。せつかく変わつてきたのにこれまでと同じ道を歩むのが、心のどこかで嫌なのかもしれない。

「……………行つてみる、か」

そんな自分の決断にため息をつき、誰に見られてるわけでも無いのに勝手に体は「嫌々やってます」という言い訳をする。そして「行く」と決めたのに、「どう かもありませんように、自分の勘違いでありますように」と願っている自分の姑息さに深いため息をつく。変化を嫌ってきた人間に、急な変化はやはり無理らしい。

「誰か……いるんですか？」

公園の方に近づき、恐る恐る声を掛ける。だけど、予想していた通り返事は返ってこない。ガサガサというざわめきも消えて、そして風が代わりに木々を揺らす。

「誰か、いるんですね」

公園の中に入り、フェンス近くの幅広い植え込みの方を見て断定的に僕はもう一度声を掛けた。別にハツタリでもなんでも無くても、確信が僕にはあった。

見られている。

それに気づくことは、僕にとって火事を見て煙が出ているというくらいに至極当然な事で、毎日生きる中で自信を感じる事が無くても、誰かの視線に気づくことに關しては最大級の自信を持っている。誰もいない静かな公園の中で一人、茂みを見つめる。僕は一言もしゃべらない。相手もしゃべらない。

やがて茂みが動きを見せた。一人、二人、そして三人目。それぞれが舌打ちをしながら立ち上がって、個性のあるようで無い似た服を晒した。

「つんだよお、テメーは？」

「何か俺らに用でもあんのかよ？ ああ!？」

実に頭の悪そうな話し方をしてくれる。頭は悪そうだけど、僕に對してはひどく効果的だ。突然怒鳴られたせいで一瞬ビクっと体が反応してしまった。震える体。それを見て男たちが笑う。

「なんだよ、ビビッてんのか？ ダッセ」

僕は笑われるのが一番嫌いだ。何よりも大っキライだ。プライドが妙に高くて、自分が嫌いなクセに貶められるのは耐えられない難儀な性格。

醜態を見られたせいで頭に血が上って顔が赤くなるのが自分でも分かる。握った拳に勝手に力が入って体が強張る。でもそれが功を奏して、足の震えは止まった。

「オラ、さつさとどっか行けよ。殴られてーのか？ あ？」

「女の人の悲鳴が聞こえましたよね？」

上がった血液は落ちていくだけ。まだ少しだけ早口だけど、ゆっくり呼吸をして自分を落ち着けながらそう問いかける。

一瞬、男たちの動きが止まる。

「何言っただよ、テメー。ツマンネー事言っただじゃねえぞ、コ
ラ」

「コツチの方から聞こえましたんで来てみたんですけど……ちよつとこちら辺を探してみてもいいですか？」

返事も待たずに僕は植え込みを越えて男たちの足元を覗き込みもうとしたけど、それを一人が肩をつかんで抑える。

「離してください」

体をひねって、少しだけ力を込めて男の手を払った。それだけの

つもりだったのに、男の体は大きく揺れてたたらを踏んだ。

「てめっ！ 何しやがる！」

怒鳴り声を無視。一度目はともかく、二度目はもうビビらない。

果たして、覗き込んだ先には上半身裸で女の人が倒れていた。服は切り裂かれて顔には殴られた痕があつて、痛々しい。気を失つてゐみたいで、ぐったりとしたまま動かない。

「オラッ！」

頬に突然衝撃が走つて、不十分な姿勢だったこともあつて僕は地面を転がった。女の人に気を取られすぎってしまったらしい。

頬を抑えながら体を起こすと、三人ともどこからかナイフを取り出してこれ見よがしに街灯のライトに反射させる。

「余計な事しなけりや良かったのにヨオ」

一人がこっちに向かつて近づいてくる。カチャカチャと折りたたみ式のナイフを出したり入れたりさせながら、侮蔑の表情で僕を見下す。

「黙つてビビつときゃ無事に帰してやつたのによ、俺らの優しさをダメにしやがつてさあ」

「そうそう、せっかく慈悲深く見逃してやろうと思つたのになあ」

「何せ俺らお釈迦様より優しかったからな。ギャハハハハ！」

僕は黙つて立ち上がる。そして彼らと正対する。

威圧してるつもりなのか、人を小馬鹿にした笑いを浮かべて、僕が逆にそれを鼻で笑つてやると途端に不機嫌そうに睨んでくる。

「テメエ……」

刃物を見て怯むのは怖いから。痛いのは嫌で、ケガをするのも嫌だ。もしかしたら後遺症が残るかもしれない。長い間痛い思いをするかもしれない。誰でも何かしら抱えてるものがあるから死ぬのは嫌だ。傷付いた自分の姿を想像して、失う何かを思い浮かべてそれを恐怖するんだ。

だけど僕には当てはまらない。想像の中でしか死ねない。どれだけ傷ついてもすぐに治って痛みも取れる。痛いのが嫌なのは抜けないけど、死ぬような痛みを何度も経験してる。それ以前に、痛みは僕にとって恐怖の対象にはならない。

「ホンっ気でブツ殺すぞ」

「できるものなら」

それは僕の願いで、僕からしてみれば何の偽りも無い本心。でも、向こうにしてみればただの挑発にしか過ぎないな、と言った後で気がついた。

ギリ、と齒軋りの後、一人がナイフを突き出す。視力の悪い僕には、暗い中でナイフの位置は正確には見えない。ただ何となく体をひねる。

着ていたシャツが少しだけ引っ張られて、あっけなくナイフに切り裂かれる。そして振り向いた先には無防備な背中。これだけ大きければ外し様が無い。

握りこんだ拳を思い切り叩きつける。決して太くは無い僕の腕。だけど男はそのまま地面を派手に転がった。

ナイフが手から離れ、コンクリートの上を滑ってシャリシャリと擦れる。

静まり返る公園。転がったままの男を呆然と眺める残り二人。そ

して僕もまた同じ。

断言する。僕は非力だ。いや、非力だった。だからこんなに自分のパンチに威力があるとは思ってもみなかった。想像の埒外。自分の状態をすっかり忘れていた。

ジャリ、と地面を踏みしめる音が足元からする。その音をきつかけに残り二人が同時に襲いかかってきた。

僕は後ろ向きに逃げ出した。通り過ぎ際に転がった男の背中をキチンと踏んで。

体の調子は重畳にもいつも通り。結界の中ほど自由には動けないけど、少なくとも彼らに捕まるほどノロい動きではない。

だけどわざと彼らと同じ程度の速さで走る。そして急停止。靴底と擦れた土埃が夜空に舞う。

今度は全力で彼らに向かう。ただし相手は一人。いくら前と比べ僕の身体能力が上がっているとはいっても、二人を同時に相手できるほどに僕は自分に自信を持ってない。

肩に重い衝撃。胃の中身がひっくり返りそうな感覚がするけど、ぶつかった彼に比べればなんて事はないだろう。相手を担ぐような格好になりながらもそのまま男を吹っ飛ばす。そこまではいいけど、僕の方も勢い余って転んでしまい、その時に相手の顔にひざをいれてしまって「ツゴー」というくぐもった声が寝転がった耳に届いた。ゴメン、今のはわざとじゃない。

心のこもってない謝罪を口の中だけでしてまたすぐ起き上がる。グルン、と下から上へと視界が振れる。灯りに照らされた深緑の葉が輝く。そしてそれよりも鋭い光が僕の目の前に迫っていた。

ナイフが切り裂く。鋭く、深く頬を切り裂く。間一髪で避けて、それでもよく研ぎ澄まされていた鋼が遠慮無くためらいなく頬肉を抉り取っていく。

「いつ………!」

脳へと届く鋭い痛み。激痛の部類。生きている証。だけどそんなもの邪魔でしか無い。生きているのを知るために痛みを感じなければならぬのなら、痛みなんて要らない。

「つてえなあっ!!!」

痛みを怒りに変換して思いっきり、全身全霊を込めて全力で遠慮無く手加減なく右ストレートでぶっ飛ばす！振り抜いたパンチはカウンター。気持ち悪い感覚と何かが壊れる音がして、男の体が宙を舞って、そして地面で跳ねた。

「~~~~っ！」

痛い。頬も痛いけど、それよりも自分の殴った拳が痛い。これは、骨が逝ったか。でも。

「……何とか成るもんなんだな」

それが正直な感想だ。武器を持った相手三人に勝てるとは思わなかった。死なないだけの体かとずっと思ってたけど、こうして一般人を相手にすると能力者の異常さがよく分かる。戦闘向きじゃない、喧嘩慣れしていない僕でもこれなのだ。佳人さんや八雲さんみたいな人が敵に回れば、普通の人にとってどれだけの脅威になるか、想像するのは簡単だ。

「つと、忘れてた。あの人を起こさないと……」

茂みで気を失った女性の事をようやく思い出す。伸びてる三人が眼を覚まさないうちに早く逃げないと、またメンドクサイ事になってしまう。

すっかり元居た場所から離れてしまい、緊張が解けたせいか急に重く感じる体を動かして女の人の所に向かう。

茂みの方に近づいた所で僕は足を止めた。寝転がっていた男の姿は無い。

男はすでに起きていて、だけでも膝立ちの状態から立ち上がろうとせず、じつと下を向いて頭を抱えていた。

ブルブルと小刻みに体が震え、口からは嗚咽ともうめきともつかない声が漏れ続けてる。

唐突に頭を掻きむしり始めた。咆哮。いや、断末魔の方が近い。

深夜の公園に男の叫びが響く。両腕で体を掻き抱いて、荒い呼吸を繰り返したま叫ぶ。

男の異常行動を前に僕は立ち尽くす。何がどうなっているのか、全く分からない。理解が及ばない。走ったせいで掻いた汗がシャツにピツタリと貼り付いて気持ちが悪い。

不意に、本当に不意に「違和感」が襲う。何度と無く感じて、もうすでに違和感と感じなくなっていたあの「違和感」。今それが僕の目の前から感じられた。

男の声が止み、ゆっくりと状態を起こす。そしてまたゆったりとした動作で立ち上がった。

「アハ……」

夜空を仰ぎ、両腕を精一杯広げて蒸し暑い梅雨の空気を吸い込む。小降りだった雨粒が大きくなる。僕を、そして天を仰ぐ男を打ち付け始める。

ポツリ、ポツリ、ポツ、ポツ、ピチャ、ピチャ、ビシャ、ビシャ、ザア、ザア。数分どころか数秒と待たずして雨脚は強くなる。頭から足まで全身をビッシヨリと濡らしていく。頬の傷がしみてズキズキと痛む。

「アハハハヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤハハヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤッ！！」

男も全身がずぶ濡れになり、だけでも嬉しそうに意味の分からない、甲高い耳障りな笑い声を上げ続ける。

「イイぜえ……イイゼイイゼイイぜえっ！ 気持良すぎっぜえ！
ヒヤハッハッハヒヤッ！」

そしてピタリ、と声が止む。と、突然首が折れて横向きの視界で僕をギョロとした瞳で見た。

「良いんだヨオ、気持ちイイんだヨオ、イッチまいそうな程に気持良すぎんだヨオ……でもなあ、まだ足んねんだよ、一つだけ足んねんだよ。何か分かるかヨオ、分かってくれっかヨオ……」

不気味な口調でこっちに向かって尋ねてくる。だけでもそれは質問、というにはあまりにも彼の中で完結していて、確認すら求めない。あるのは答えの強要。それを証明するかのように、彼は嬉しそうに口を三日月の形に歪ませた。

「てなわけでヨオ……切らせろや」

言葉と同時にとっさに僕は体を一步引いた。コンマ数秒前まで体があった場所を鋭い何かが通り過ぎて、だいぶ伸びた前髪が宙を舞った。

髪を切り裂いたのは剣だった。それまで彼の手の中には何も無かった。なのに突然現れた大振りな両刃刀は彼の手の中にしっかりと握りこまれている。まるで佳人さんの様に。

「つんだよ、避けんな……よオツ！」

叫びながらデタラメに剣を振り回す。素人の僕から見ても、基本も何もあつたもんじゃない剣筋。ただ力任せに振り回しているだけ。その様子は駄々をこねて暴れる子供みたい。

だけど、例えどんなに適當だろうとも能力者が操れば、僕みたいな人間にとって最大級の驚異となる。剣筋がどうだつて評論できるのだつてただ単に彼の構えが適當だということから判断してるだけだ。剣がどこを通り過ぎたかなんて分かりはしない。

「オラオラオラオラオララララアツヒヤアアハアツ！」

僕はひたすらに避ける。もう避けるなんて大層なもんじゃない。彼がデタラメに剣を振り回しているなら、僕はもつとデタラメにカツコ悪く転げ回りながら逃げて、単に致命傷を負っていないというだけだ。

それでも傷は増える。そもそもが何度もかわせているのが異常なのであつて、ならば薄い切り傷は際限なく増えていくのが道理というもので、シャツは傷だらけ、ズボンもボロボロで血もにじんでる。この程度の痛みは痛みの内に入らない。だから動きは阻害されない。阻害されない、なのに僕の動きは鈍つてく。何故か。理由は簡単。僕にはスタミナが無い。どれだけパワーとかスピードが強化されたとしてもスタミナだけは大きく変わらないらしい。

ヤバイ。耳障りな息切れ音が満ちた中でそんな思考が頭の中を駆け巡り始める。そもそも僕はこんな戦闘向けの能力者と一対一で対峙したことなんて無いわけで、それをチャラにする武器も無い。この男が能力に目覚めたばかりなのだとしたらそこに付け入る隙がある、なんていうのは熟練者が言うセリフであつて間違つたつて僕が言える言葉じゃない。

つまりは、だ。こんな状況になつた時点で僕の負けは確定。死な

ない以上敗北と言っていないのかは分からないけど、勝負としては黒星と言わざるを得ない。

そんな、どうしようもない状況。息切れは加速して体が重くなる。なのに。

「キヤアアアアッ！」

体が切られるのを防いだせいで腕が深く切りつけられ、雨が赤く染まる。それを見て、眼を覚ました女性が悲鳴を上げるのを僕は聞いた。

どうしてこのタイミングで……！

せつかく眼を覚ましてくれたのに、僕の口には彼女に対する悪態だけが溜まっていく。どうして眼を覚ました、どうして声を出すんだ、と助けた相手に罵りたい気持ちが満ちていく。

男がニヤリと笑う。嫌らしげに舌舐めずりし、口を再度三日月形に変形させる。

案の定、男は僕から彼女へと標的を変えた。男にとってはきつと相手なんて誰でも構わない。ただ切り裂ければ男でも女でも、老いても若くても関係ない。

僕は男に飛びかかった。それは攻撃のためなんかじゃなくて、少しでも相手の動きを阻害するため。

「……アア？」

すでに男は女性に向かって走り始めていて、ぬかるんだ地面に寝そべってまで僕がつかめたのは男のズボンの裾だけ。でもそれを僕は必死につかんで離さない。

「分かってるって。テメエは後でじっくりと、な？」

下から男の顔を見上げる。街灯が逆光となつて男の顔は見えない。彼の持つ大剣だけが反射して眩しかった。

衝撃が背中を中心を貫いた。重いのか軽いのか分からない。ただ何か僕の手を通り抜けていった感触だけが残つて、一拍遅れて形容できない痛みが一気に脳へ走りこんだ。

「……………っ！」

声が出ない。僕の意志に反して体が仰け反り、涙と吐き気が同時に押し寄せてくる。胃から込み上げてくるものを吐き出したい衝動を抑え切れず、僕は真っ赤な血を水溜りへ吐き出した。

吐くたびに痛みが走って悶える。そして背中を貫通した剣が僕を傷つけまた血を吐き出す。目の前の水溜りが見る見るうちに赤く変わり、雨に流されてく。喉が焼けるように熱くて、痛い。動けない。縫いつけられた僕の体はとづくに機能を停止してもいいはずで、僕は苦しみから解放されてもいいはずで、なのに即死とも言えない半端な致命傷は回復と斬撃を交互に繰り返して僕をつかんで離さない。痛い、痛くて痛くて痛くて堪らない。気持ちが悪い。吐き出した血が気持ち悪い。まわりつく雨がなんて不快。喉が熱くて体が寒い。痛い。怖い。終わりのない痛みが、僕は怖かった。

変な正義感なんて出すんじゃないな。所詮僕は戦わない人間。そんな人間が誰かを助けようなんておこがましかったんだ。

この公園に来たことを心底後悔し、自分の浅はかさを恨み、調子に乗つてた自分を責める。傷つけられ続けるなんて、こんな恐怖があるとは思わなかった。耐え切れない痛みなんて一瞬で終わってしまふものだとばかり思つてた。

後ろ手に剣をつかむ。指の節が傷ついてるんだろうけど、今僕には感じる事ができない。剣を抜こうと試みるけど、動かない。こんな体勢じゃ力も入らない。

きつと恨めし気になつていよう視線を男に向ける。男はもう

コツチを見ていなかった。もう一本の剣を作り出して女性を見てる。腰を抜かして恐怖で満ちた瞳で男を女性は見上げてた。逃げる、とかいう声は出ない。声さえ出せないし、そんな気もなかった。

「……………柔らかそうだなあ」

男は舌なめずりをした。手に持った剣を上段に振りかぶる。空が明るく怪しく光る。雨音をかき消す雷鳴が響いた。僕は眼を逸らした。

「……………は？」

閉じたまぶたの向こうから間抜けな声が聞こえた。そつと眼を開けると、一本のナイフが男の左腕に刺さっていた。雨と混じりながら血が流れて、それに連動するように男の左腕も力無くダラリと下に落ちた。

「……………えなあ……………誰だよ、テメエ」

邪魔されたからか、それとも痛みからかは分からないけど、心底苛立った様にナイフが飛んできた方向を男が見た。痛みを堪えながら僕も何とかそつちを見る。

そこにいたのは女の人だった。土砂降りの雨の中で傘もささずに雨に打たれて、長い黒髪からも雫が滴り落ちてる。シャツもズボンもビツシヨリに濡れて、細身のラインを表してる。

女性がこつちに向かって歩き始める。街灯に近づいて光が彼女を照らし出し始める。

七分丈のズボンと長袖の白いブラウス。表情は貼り付いた髪の毛のせいで見えない。

「まあいいや……切れる人間が一人増えてくれたんだからヨオ」

男は左手に刺さったナイフを抜こうと、右手に持っていた剣を左手に持ち替える。はずだったんだろう。

「ああ？」

だけでも剣は左手からスルリと抜け落ちて地面に転がった。

「力が入んねえんだけど？」

つぶやきながら男は掌を握ったり開いたり繰り返す。だけでも、次第にソレすらもできなくなったのか、指先はただ下を指すことしかしなくなった。

バシャ、と水溜りが跳ねる音がした。寝ている僕の隣を一瞬で通りぬけ、踏みぬいた水溜りの飛沫を僕に掛けながら女性は男へ接近する。キン、と金属同士がぶつかった。両手に持ったナイフで男に斬りかかり、男はまた剣を右手に作り出して斬撃を受け止める。それと同時に僕に刺さっていた剣が消えて、ようやく解放された。

「カツ、ゲホツ!!!」

傷が胴体に開いた穴がゆっくりと塞がって行って、痛みからも解放される。口に残った血溜まりを吐き捨てて、未だ口の中に気持ち悪さは残るけれど、やっとひと心地つく事ができた。

男に切られそうになった女性を見ると、彼女は再び気を失って仰向けに倒れていた。白目を向いて、冷たい雨が絶えず体を濡らし続けているけど、もうどうにかしようなんて思っていない。

僕は興味を戦いの方へ移した。女性は両手に持ったナイフもしくは短剣と言えるかもしれない。で絶え間なく斬りつけ、男の

方は右手一本でそれを防ぐ。

「っんだよんだよなんだよテムエはっ！ さっさと切らせるよ切らせるよ切らせるよオおおっ！！」

男が叫ぶけれど、彼女は一切の反応を示さない。与えられた仕事をこなすみたいに淡々と攻撃を加え続ける。街灯の光と夜の闇の間で見える彼女の動きは、女性とは思えないほど無骨で、力強く、そして乱暴だった。素人眼で見ても優雅さや洗練さ、女性のしなやかさは無くて、愚直なまでに切れ目の無い攻撃を繰り返した。

能力者である男と対等以上にやりあつてるということは、彼女も能力者なのだろう。それも戦闘用の能力、例えば八雲さんみたいに身体能力向上タイプ。もしくは佳人さんみたいなタイプだろうか。彼女の手にある短剣も彼女が作り出しているのかもしれない。

「なめてんじゃねえぞコラアアアアっ！！」

だけど、それでもやっぱり男の方が地力があるということなのか。ひとしきり受けきると、力任せに剣を振り上げて短剣を彼女の体ごと弾き飛ばし、宙に浮いた体を蹴り飛ばした。

「くっ……！！」

初めて彼女の口から声が漏れる。雨音で聞こえづらいくけど、女性にしてはかなり低い方か。中性的な印象の声だった。

開いた間合いを一気に詰めようと男が走った。女の人の方はまだ体勢を立て直せていない。おまけに短剣を一本失っている。男にとってはチャンスで、それも本人も分かっているのか口元を嬉しそうに歪ませていた。

そして発砲音が雨に混じった。

「あ？」

男は自分の脚を見た。ということは発砲音にもたらされた異常は彼の脚で起きたということ、それを証明するみたいに左脚から彼の体が崩れ落ちる。稲光が一瞬だけ強い光を発して、彼女の手の中にあるシルエットを映し出した。小型の銃だろうか。手の先から指みたいに飛び出した銃身があった。たぶん、どこかに隠し持っていたんだろう。

「んな豆鉄砲なんか効かねえっーの」

ニヘラと笑って男は立ち上がるうとするけど、膝立ちの状態から動かない。それどころか体全体が傾いていつて、ついには泥水の中に体を沈めてしまった。

「な…んだよコレ…どうなってんだヨオ…」

男の声に初めて恐怖が混じった。困惑八割に恐怖が二割。震える声で騒ぎ続けるけど、その二つの割合が次第に逆転していくのが僕にも分かる。

右手を使って上半身を起こすけど、はいつくばった彼の前に女の人が立ちほだかる。

「くっそおおっ！！」

喚いて右手の剣を振り回す。だけど剣先さえ彼女には届かない。ブンブンと駄々をこねるみたいに、迫り来る大人から逃れようとする子供みたいに左右に振り回すだけ。

左手に持った短剣で彼の右手を傷つける。剣先が彼の二の腕を数センチに渡って切り裂く。たったそれだけで彼の右手からは剣が落

ちて、そして彼は抗う手段を失った。

彼は右足だけで彼女から離れようと地面を蹴る。だけど彼女はそれを許さないのか、今度は右足を切り裂いた。彼は動くことすらできなくなった。

僕は立ち上がった二人の近くに移動する。何が起こっているのか、それを理解しようとして、そして彼女が何者なのかを知るために。更には、彼女が正気なのか判断するために。もし、S・T・E・A・Rの誰も把握していない、新しい能力者なら課長に連絡しないと。

雨に濡れたからなのか、体が重い。痛みで散々痛めつけられて僕
の精神もだいぶ参ってるに違いない。歪んでしまったメガネをかけ直して、重い足取りで二人の方へ向かう。

たいして離れてない距離だったけど、僕が到着する前に彼女は短剣を握り直し、そして彼の喉に向かって振り下ろした。一切のためらいなく。

ズブリ、という音が聞こえてきそうだった。確実に、正確に彼女の剣は男の喉を貫いて、そして血が溢れてくる。赤い血液に空気が混じって泡立つ。口をパクパクとさせて、その動きも緩慢になっていって、やがて彼は死んだ。

それにあわせて傍らに落ちていた大剣も、まるで初めから無かったみたいに消えていった。残ったのは男の死体と、僕と、そして女の人。

「あの、すみません……」

僕の今の目的を果たすために、女の人に話しかけた。だけど彼女は僕の方をいちべつだにせず背を向けると、そのまま公園の出口に向かって歩き出す。いつの間にか短剣は仕舞われて、濡れた髪の毛を邪魔そうに掻き上げ、両手をポケットに突っ込んでる。

「ま、待ってください」

「嫌だね」

静止の声も即却下。冷たい声に貧弱な心が折れそうだ。とはいえ、ここで引くわけにもいかないので、一度深呼吸をして腹に力を入れる。

「そついう訳にもいきません。僕と一緒に来てもらう必要があります。アナタも能力者なんでしょう？ たぶん知らないと思いますけど、一応能力者を管理してる組織があります……」
「うっさいな」

苛立った声。その直後、僕の体は地面に叩きつけられていた。強かに背中を打って肺の空気が押し出されて息が詰まる。

「お前も殺すよ？」

僕の体に覆いかぶさり、彼女はまた短剣を取り出して僕の首に押し当ててきた。吐息が掛かる程に近い距離で彼女はそう囁き、僕は言葉を失った。

一瞬、彼女の顔が驚いている様に見えた。驚いて、でもすぐにめんどくさ気に顔を歪めると体を起こして僕から離れる。そして独り言みたいになにかをつぶやき始めた。

「……ん？ ああ、分かってるよ。いいじゃねえか、どうせ死なねえんだし。……ああ、わあったよ。だからそんなに喚くな。頭イテエじゃねえか。」

なあ、お前、明日は一日中家にいるよ？ 誰からの誘いも断れ。例え相手が課長でも、だ。彼女が会いに行くって言ってるからな」

後半部が僕に向けられた言葉だと気づいたのは、もう彼女が立ち

去り始めた後だった。大の字になって泥の中で寝転び、ライトに反射した雨粒の軌跡を追う。ひたすらにそれだけ続けた。頭の中はデタラメで、何も考えられなかった。

「……水城さん」

止まない雨に打たれ、立ち去った彼女の名前だけが口から零れた。

・第六話 切る、悠 (kill you) ・ (前書き)

次でラストです。

- 第六話 切る、悠 (kill you) -

- 第六話 切る、悠 (kill you) -

- 零 -

欲しい物は絶対に離しちゃいけない。誰かが持って行ってしま
うから

- 一 -

夢を見ていた。

目の前には道がある。白く細い道。それはどこまでもどこまでも
伸びていて、足元からずつと辿って行って、顔が真下から真正面に
戻ってもまだ続いている。終りの無い道が真つ暗闇の中にあつた。唯
一の道しるべがそこにあつた。

僕はその上に立っている。もっと正確に言えば、その白い道をま
たくようにして立っていた。足の裏には地面があるのかないのかよ
く分からない、曖昧な感覚だけが残ってて、確かに僕は立っている
のに、急にどこかに落ちてしまいそうな不安を強く感じる。だから
僕は白い線の上に足を乗せた。今度は確かな感触があつた。

僕は歩き出す。何も考えずに。白い道の上を歩いて、ただどすぐ
にそれに飽きてしまう。だから今度はわざと白い線を踏まない様に
歩いた。何故か恐怖は無い。黒い地面を歩き、またそれに慣れてし

まうと、今度は二つの境界線上を歩く。適当に境目を靴の裏で擦るようにして。擦りながら歩いてると、不意にその境目がぼやける。白が黒に混じったのか、それとも黒が白に混じったのか。白は灰色になって黒は灰色になる。足元から広がったそれは瞬間にして広がっていき、二色刷りの世界はあっという間に一つになった。

世界が壊れた。壊したのは僕か。せつかく美しい景色だったのに。僕はぼんやりとそんな事を思った。

曖昧な世界を歩き続ける。やがて駆け出す。

必死じゃない。何となく、という理由に急かされて走り始めて、ゆつくりとジョギングでもするような速度で、でも脚には力がこもり始めて、いつの間にか僕は全力で走り始めていた。途切れ途切れの呼吸。絡まる足。走ることをずっと辞めていたから、全力を出すことを諦めていたから思ったように体は動いてくれない。息がツライ。走るのがツライ。歩くのがツライ。でも止めることもツライ。疲れた。いつから僕は疲れた？疲れたからもう走るのを止めていいの？それでも僕は走り続ける。歩くような速度で。

見つかる出口。だからこそ見つかった出口。何がだからこそなんだろう。走ったからこそなのか、それとも全力を出したからこそか。答えは出ないまま、何となくなままに出口に近づく。それにつれて、灰まみれの向こうにある鮮やかな景色が僕の視界を埋め尽くす。

出口の入り口。そこに立っている誰か。顔は見えない、光が強過ぎて、輪郭さえぼやかしてしまってる。人ということしか教えてくれないシルエツト。だけど僕はそれが誰であるかを知っている。

力の入らない両脚に力を込めて、そして手を必死に伸ばして僕は触れようとした。

近いのに遠い人。遠いのに近い人。届きそうで届かない、だけど届いて欲しいと切に願う。

後、三步。残り、二歩。最後の、一歩。

眩しい光が溢れてくる。僕を染め上げる。溶かして融かして解かし尽くす。

伸ばした手が光の中に溶けこんでいって、彼女が僕の方を

そこで僕は眼を覚ました。

ジリジリと容赦無くアパートを照らす太陽。閉めきった窓の向こうからでも聞こえてくる蝉の声。ムン、とした熱気が同情もなく遠慮もなく呵責もなく僕を蒸し焼きにしまおうと企んでいるらしい。

「あづい……」

寝たままの状態で見えるのは天井だけで、かといって天井を眺めていても楽しくなんて一つも無いのは自明の理というにはおこがましいほどに当たり前の事であり、だから僕は体を起こして汗でじつとりと湿った布団の上に座ったまま外を見る。閉め忘れたカーテンのせいで容赦無く西日が差し込んでいて、どうやら太陽は蒸し焼きだけじゃ飽きたらず僕を照り焼きにしたいらしい。

「西…日……？」

家賃月二万八千円で風呂トイレ付という破格の安さを誇る我が家は、当然ながらそれ相応の欠陥を保持していて、その中の一つが西日しか日が差し込まないというもの。で、太陽は東から上って西へと沈む物。僕は枕元にある時計に眼を遣った。

「あー……」

デジタルの時計はすでに午後三時を示していて、今日は平日。なれば当然学校があったわけだけど完全にサボってしまった。

「しゃーないな……」

僕にとってはあるまじき失態ではあるけれど、いつまでも失態に頭を悩ませていても全く意味が無い。ボーツとした頭を覚まそうと冷蔵庫に向かう。未だにまぶたは重くて体はどういう訳か節々が痛い。変な寝方をしたかな、と思いながら布団から降りて畳に足を踏み入れた瞬間ジメツとした感触がした。視線を下に向ければ、どうやら濡れていたらしくて一部が変色してた。なんでだろう、と疑問に思いながらも冷蔵庫を開けて炭酸飲料を取り出す。ラツパ飲みをして胃の中に冷たい感触とシュワーとした炭酸の弾ける刺激が喉と胃を殴りつける。僕は大きく息を吐き出した。そして不意に思い出す。

(彼女が会いに行くって言ってるからな)

思い出した瞬間、僕は勢い良く部屋の方に振り向いた。

(ヤッホー、お邪魔してるよー)

そんな声が聞こえた気がした。だけどそれは幻聴でしか無くて、部屋の中にはさっきまで僕が寝ていた布団と、何も置かれていないテーブルがあるだけだ。他に何があるわけでも、誰がいるわけでもない。

それでも僕はそれが信じられなくて、いつの間にかペットボトルを置いて部屋の中へと戻って彼女の姿を探し始めていた。

押入れの中に隠れていないだろうか。開く。いない。

ベランダに隠れていないだろうか。開く。見回す。いない。

トイレ。いない。風呂場。いない。どこにもいない。

もしかしたらココに来ただけで、僕が眼を覚まさないから帰ったのかもしれない。ならばどこかに書置きがあるかもしれない。そう思ってテーブルを見るけど何も無い。郵便受けを開いてみるけど

やっぱり何も無い。

どれくらい探したんだろう。一通り彼女がいた痕跡を探ったけれど、何一つとして手掛かりは見つからなかった。

当然だ。水城さんがこの部屋に来たことなんて数えるほどしか無いのだから。

壁にもたれかかって、だけでも足は僕を支えきれなくてその場に座り込む。そう、目が覚めて彼女がいたのだって、たった一回きりだ。何十回とこの部屋で眼を覚ましたけれど、起きた時に誰かがいたのだって一回きりしか無い。だから、今のこの状態が当たり前なんだ。水城さんがいたあの時こそが異常だったんだ。

だというのに。僕は体を丸めて、自分の胸を強く掻きむしった。汗で湿ったシャツの上から爪が皮膚に食い込む。

どうして、こんなにも不安なんだろう。

不安で、怖くて、僕を構成する全てが消えていつてしまっそうで、暑いはずの部屋の中で体が震える。

まだだ。

頭を振って考え直す。まだ、三時じゃないか。今日という日が終わるまでまだ九時間も残ってる。気まぐれなあの人の事だから、この後すぐ来るかもしれないし、日付が変わる前に来るかもしれない。もしかしたら日付が変わった後に来るかもしれない。どうせ学校もサボったんだ。だから、のんびりと僕は彼女を待てばいいだけだ。

立ち上がった部屋に戻り、枕元に置いてあったタバコに火を点ける。ライターから伸びた小さな火花が小刻みに震えて、それが僕の手が震えているせいだという事実を押し殺して時計を見る。一秒毎に点滅を繰り返すデジタル表示がやけに遅く感じて、僕はタバコと時計の間の往復を繰り返した。

水城さんは来なかった。

そうしてまた日常が始まる。

どれだけ寝不足でも僕の体はいつも通りに朝の決まった時間に目が覚めて、シャワーを浴び、ヒゲに沿って飯を食べる。ルーチンワ

ークを一通りこなした後は、タバコを一本吸って自転車に乗り、狭いキャンパスの大学に到着。歳はそう変わらないはずの大学生を見て若々しく感じ、僕と同じく冴えないヤツを見かけると同類に親近感を感じ、そしてすぐにどうでもいい思考を切り捨てて教室に入っ
て、だいたい決まってきた席に着いて筆記用具とノートを取り出す。授業が始まれば熱心な学生の振りをして板書を何も考えずにただ写し込んでいく。

それはいつも通りの日常に過ぎなくて、歳を取り、姿形が変わって、場所も変わって、でも繰り返してきた作業は一緒で。

慣れ親しんだはずの、退屈な毎日。なのに違和感が残る。そしてそれはもう拭えない。

ここが、僕の日常だっただろうか。客観的な事実としてそれは真実のはずなのに、頭を働かせれば、いつの間にかそんな思考が僕の中を占める。

あの夜の事を僕は誰にも話さなかった。事件の事はどうしようもないから課長に連絡したけれど、水城さんの事は話さなかった。あの男は僕が殺したことにして、そしてその通りに事件は処理された。だから、書類上初めて僕が人を殺したことになる。そしてそれは僕と、彼女だけが知る事実と真実を押し隠して対外的な事実となった。駆けつけた八雲さんや佳人さんに何か声を掛けられたけれど、デタラメでとりとめもない思考が続いたままになるのが嫌で、曖昧な返事だけをした。疲れたから、とだけ二人に告げて僕はすぐにその場を辞して、帰り着くと濡れたシャツやズボンを脱ぎ、そのまま何も考えずに眠った。

そして水城さんが来なかった日が終わり、僕は課長に電話を掛けて水城さんの事を尋ねた。今日は、仕事に来てるか、と。

そこにいて欲しい、と願ったけれども残念ながら彼女はいなくて、代わりに電話があったらしい。しばらく旅行に行くんで休みます、だそうだ。

おかしい。そう思ったんだろう。課長は僕を問い詰めて、そして

僕は応えた。何もありません、彼女の様子も極普通でしたって。至って普通に、何のためらいもよどみも無く、頭は全くと言っていいほど働いてはいなかったけどそんな言葉がつつらと出てきて、そして僕は一方的にならないよう自然に電話を切った。

気がつけば三日が経って、あの日の事を確かめることさえできないままいつも通りの毎日を送る。頭の中でグルグルと否定と肯定を巡らせながら。

授業の終わりを知らせるチャイムが鳴る。聞き慣れた当たり前の音がして、なのにどういふ訳だかそれすらもいつもと違って聞こえてきてしまふ。

いや、これが僕の日常だ。僕は頭を小さく振って言い聞かせる。昼間は学校に行つて、週に何回かS・T・E・A・Rにバイトに行く。適当に正祐の相手をしながら笑つて、夜に事務仕事に苦しんだり、時々死にかけたりなんかする。一般的な普通とはもうすっかり違つてしまつてるけどそこまでをひつくるめて僕の日常だ。違和感なんてあるはずがない。生きていけば時が流れて人も変わる。巡り逢う人もいれば一時的に別れる人もいて、別れたきりそれが今生の最後となつてしまふ人もいる。水城さんだつて所詮その中の一人でしか無かつたというだけの話だ。

そこまで考えて、僕は自分がもう彼女と会えないのだと決めつけていることに気づいて、つい笑いがこみ上げてくる。たった三日だというのに。

(それに……)

例え彼女が僕と会う気が無いのだとしても、縁があればまた出会うだろう。彼女が能力者である限りS・T・E・A・Rに僕がいればまた会えるだろう。悲観することは無い。別れがあんな別れ方だったから少し衝撃を受け過ぎてしまっただけだ。

それに、慣れるのが早い僕の事だから、きつとまた後三日もすれ

彼女は彼女のいない生活にも慣れる。違和感も何も感じず、彼女は薄れていく記憶の中だけの住人となって日々の記録の中に埋もれていく。それは僕という存在にとって既定路線であり予定調和だ。疑う余地なんて無い。

「チーツス、鏡ちゃん。今日暇か？」

だから少しだけ早く忘れてしまおう。彼女の事を。

「暇といえばそうだけど、今日の夜はバイトだから。もう帰って一回寝てしまおうと思ってる」

「よし、んじゃ行こうか？」

「……だからお前は人の話を聞けと何度も……」

「いや、だからよ、寝るまで遊ぼうぜ、と俺は言ってるわけだ、鏡ちゃん」

ニコニコと、いやニヤニヤと笑いながら誘ってくる正祐を見てわざとらしいため息をついてみせる。S・T・E・A・Rにいる間は寝る暇は無いわけだし、仕事の事を考えれば今のうちに六時間くらいは寝ておきたいんだけど、ちょっと僕は迷った。

迷ったことは迷ったけど、こういった時に長々と悩むのはメンドクサくて、何より今は頭を使いたくない。だから正祐の期待にこえて、思考を放棄してしまって「いいよ」と応えてやる。

「……え？ いいのか？」

「ああ、別に行かなくていいなら帰って寝る。お疲れっしたーおやすみー」

「ちよちよちよちよい待った！ ジョーダン、冗談、な、な？ オーケーオーケー、ノープロブレム。俺らはこれから遊びに行く。これで問題ないよな？」

まあ期待を裏切ったのは分かるけど、ちょっと慌て過ぎじゃないだろうか。そんなに僕って付き合いが悪かったつけ、と自分の過去の所業を思い出してみて、ああ、やっぱり付き合いは良くないよなあ、と自分で納得してしまった。

「別に問題は無いけど、あんまり遠いところ無しな。できれば近場で宜しく」

「っしや！ ならさっさと行こーぜっ！」

何というワガママ。だけでも正祐は気にした風も無くて、僕と横並びで歩き出した。こんな僕と遊んで何が楽しいのか自分じゃよく分からないけど、たぶん僕と正祐の波長が合って、得てしてそういう相手とは何をしてても楽しいものだ。僕も悪くない、と思ってるし、正祐が楽しいならそれでいいだろう。そして今日は僕も愉しめばいい。今を楽しんで、頭を空っぽにしておこう。そうしてまたいつもの僕へと戻る。こんなに女の人のことで悩むなんて僕らしくない。さっさと忘れてしまおうんだ。

しつこく頭の隅でチラつく彼女の顔。僕はそれを追い出した。

ピピピピピピピピピピ

ガチャン。

力の入らない腕が重力に従って目覚まし時計に落ちて、時計が壊れそうな音を立てた。痛いはずだけど寝起きで鈍い腕の感覚がいつもよりも遥かに遅い速度で頭に届いて、そこでようやく僕の頭が覚めてくる。

時刻は午後十時。正祐と別れて部屋に戻ったのが六時前だったか

ら、都合四時間は寝た計算か。夏布団を跳ね除けて大きく背伸び。寝汗で濡れたシャツを洗濯機に放りこんでシャワーを浴びる。

今が十時なら、あんまりゆっくりできないな。熱めのお湯のおかげで少しづつ血の巡ってきた頭でそんな事を考える。十一時には向こうについて、この三日で溜まつてるだろうメールをチェックして、ああ、あの書類も書き上げてしまわないといけないな。いやいや、第二班の事だ。きっと机の上には書類が乱雑に捨てられてその整理から始めないといけないだろうな。事務所についてからの自分の仕事を頭の中だけで整理し、スケジュールを立てていく。

さて、今日は書類仕事だけで終わるだろうか。それともまた現場仕事に駆り出されるのかな。そういえば他の県に出張に行つてた人たちが今日帰ってくるはずだから、人手は足りてるか。なら今日は平和に過ごせそうだ。平和が一番。何事も無いのが重畳。

シャワーを止めて乱雑に体を拭く。適当に髪の毛の水分を吸い取つて、乾かさないうままに着替える。その足で色落ちした黒のジーンズに足を通し、同じく黒のシャツに袖を通した。長袖のシャツの袖を巻きあげて七分にするお気に入りのスタイルを作り上げる。

敷きつぱなしの布団に腰を下ろしてタバコに火を点けた。最近本数が増えてきているのは良くない兆候だと思う。バイトのおかげで金的には余裕はあるけど、あまりタバコに精神安定を求めるのは褒められたものじゃないな。

時計を見る。時間は午後十時半。そろそろ出る時間か。夜だから自転車は通りやすいし時間は掛からないけど、飛ばして汗を掻くのも嫌だし早めに出るのがいいだろう、と僕はタバコを半分くらい吸ったところでもみ消して電気を消そうと立ち上がった。

ピンポン。

というところで来客を知らせるチャイムが鳴る。僕にとってはまだ生活時間だけど、世間一般的にはもう非常識の範囲に入る時間だ。こんな時間にくるのは……正祐だろうか？ 居留守を使うことも考えただけ、電気のせいでそれも不可。軽く鼻から息を吐き出して玄

関へ向かう。そして非常識な相手を確認するために、覗き穴から外をうかがった。

歪んで広がるアパートの廊下。切れかけの電気がチカチカと目に悪い明滅を繰り返してた。

ドクン、と一度心臓が鳴る。覗き穴から見えた相手は、なるほど、確かに非常識な人だった。

出てこない事にしびれを切らしたのか、ドアの向こうの相手はもう一度チャイムを鳴らす。一度、二度、三度四度五度六度七度。

ピポポポポポポ!

音がやかましい。

まったく、この人は……

「近所迷惑ですから」

ガチャリ、とドアを開く事で相手の嫌がらせを終了させる。そして狙い通りに相手の手を止めさせる事ができて、僕は彼女と対峙した。

「むーっ。鏡クンがさっさと出てくれないのが悪いんだよっ」

「そいつは失礼しました」

言葉だけの謝罪をすると、押しかけたチャイムから手を離し、手はむくれて頬を膨らませる。相変わらずだ。まあ、そもそも三日やそこらで人が変わるとも思えないけど。

「それにしてもお久しぶりです。約束破ってのご旅行は楽しかったですか?」

挨拶がわりの皮肉を一つ。コッチとしては三日間も悶々とした時間を過ごさざるを得なかったんだ。コレくらいは許して欲しい。

「ホントはちゃんと約束通り来るつもりだったんだよ？ でもちょっと予想よりも時間が掛かっちゃってさ……」

そう言いながら僕から眼を逸らす。申し訳なさそうにチラリと僕の方を見て、一度また視線を外し、そして再度僕の方を見る。

「うん、でもやっぱり謝らないといけないよね。ゴメンナサイ」

彼女は深々と頭を下げた。

こうやって素直に頭を下げられると僕の方も困る。茶化された方が心に優しい。僕は別に怒ってなんかいないのだから。むしろ、また彼女に会えた事がただ純粹に嬉しかった。

「頭を上げてください。別に怒ってませんから。むしろ上げてください」

「……許してくれるの？」

「怒ってないって言ったでしょう？ これくらいで怒るほど度量は小さくないつもりですよ」

「嘘だーっ。鏡クンこういうのにうるさそうだし」

「それは否定しませんけどね」

玄関で待たせて一度部屋に戻る。自転車の鍵を持ってまた玄関に戻って靴を履いた。

「ともかく、一緒にS・T・E・A・Rまで行きましょう。歩きながら話を聞かせてください、水城さん」

そう、僕には彼女に聞きたいことが山ほどある。この三日間何をしていたのか、あの夜の女性は本当に水城さんなのか、どうしてあんな

なに戦えたのか、そして

彼女がこれからもここにいてくれるのか。

「うーん……それはちょっとムリかな？」

だけど、少しの逡巡を見せた後、彼女はそう言って断ってきた。

「あ、まだ休みですか、ひよっとして？」

「ううん、そうじゃないんだけどね……」

どうにも歯切れが悪い。なのに水城さんは少しだけ申し訳なさそうに顔を伏せて、次の瞬間には笑顔を見せて僕に一步近づいた。そして僕の手を握る。

悲しそうに笑って。

「水城さん？」

「今日はね、鏡クン……鏡クンに言わなきゃいけないことがあるんだ」

「ん？」

なんだろう　　尋ねようと口を開きかける。だけどそれに類する言葉は音にならない。

唇に伝わるぬくもり。柔らかな感触。三日ぶりの彼女の顔が僕に見える世界いっぱい広がった。

梅雨の湿った風が彼女の長い黒髪を揺らして僕の鼻をくすぐる。眼を閉じて頬を染めた彼女がすぐそばにいる。そして彼女から心地良い香りが漂ってくる。甘い香りだった。柄にもないけど、突然の事で混乱する頭でそんな事を思って、もっともつとその香りに身を委ねていたかった。

優しい口づけが終わり、そっと彼女の体が僕から離れていく。唇

に残る感触はあまりにも儂くて、切なくて、まるでつかもつとしてもつかめない、陽炎のようで。

「えへへっ」

頬を真っ赤にした彼女が笑う。恥ずかしそうに、でも今度は嬉しそうに。呆気に取られてた僕にもその笑顔が伝染して、思わず笑ってしまう。

「うん、良かった……」

そうつぶやいて、水城さんは僕の顔を見つめる。

風が吹いた。赤かった顔が少しずつ元に戻っていく。嬉しそうだった顔も、笑顔も消えてまた憂いを多分に含んだ表情へと変化して、そして彼女は僕に向かって言った。

「鏡クンの事、本気で好きだったのかもしれない」

トン、と軽い衝撃が僕の胸に突き刺さる。

僕に向かって伸びる彼女の白い腕。そしてその掌から更に伸びる見たことのある短剣。公園の灯りに照らされていたソレは今度は僕の部屋の灯りに照らされて光を放つ。それを介して僕と彼女の境界は曖昧に消える。

「みず、き……さん……？」

「さよなら、鏡クン……地獄でも会えたらいいね」

足から力が抜ける。体から血が抜けていく。止まらない。世界が揺れるのが止まらない。傾いていくのが止まらない。心臓が脈打つて、その度にダラダラと傷口から僕が零れ落ちる。倒れていく僕。

遠ざかる彼女。短剣が心臓から抜かれて、噴き出した僕の血が僕らの境界を明確に引いていく。

もう、何も考えられない。心地良い眠りに就く前みたいに、まぶたが自然と視界を閉鎖していく。そして閉じる視界と繋がってるのか、と思うくらいに同じタイミングで玄関のドアが閉まっていく。

視界と彼女との境界。どちらが閉じるのが早いんだろう。そんな考えを抱きながら見た最後の景色は、彼女の泣き顔だった。

・二・

「……い……きる……」

体が重い。体が重いからまぶたも重い。何もしたくない。もっと寝ていたい。だってまだ外はこんなにも暗くて、人間が人間活動を開始するには早過ぎる。あ、そういえば僕ってまだ人間の範疇に含まれるんだろうか。含まれるんならまだ寝ても大丈夫。含まれないなら別に人間活動しなくてもいいから寝ていよう。結論、まだ寝る。だって眠いんだから。

「おき……きよ……」

だと言うのに、誰かが耳元で騒ぐ。何を言ってるのかなんて理解できないし、理解しようとも思わない。思考を完全に筭、いや放棄誰かさつさとこの雑音を外に掃きだしてくれないかな。眠いのには僕を起こす誰かのせいでそんな事を考えられるくらいには覚醒してしまっただ。ならしょうがない、もう起きてしまおう。そして起こしてくれた誰かに皮肉の一つでもお見舞いしてやろう。

そうだった。意識を失う前を思い出して体から血の気が引いていくのが自分でもよく分かった。跳ねるように体を起こし、驚いている正祐に詰め寄る。

「正祐、今、何日の何時だ！」

「き、今日は五日で二時過ぎだけどよ……て、お前そんな動いて大丈夫なのかよっ!? メツチャ血い出てんだぞっ！」

「何言ってるんだよ、どこに血なんて出てるんだ？」

「どこっってお前自分の胸……あれ？」

もう僕のシャツには血なんて付いてない。拭った僕の手にも、そして僕との間を往復してる正祐の手にもそんな跡は無い。まだ少し痛むけど、この痛みもすぐに消えて無くなる。

そんな事よりも、だ。

「悪い、正祐。今すぐ出かけなくちゃいけないんだ」

だから留守番しといてくれ。そう一方的に告げて僕は部屋を飛び出そうとした。だけど正祐が僕の足をつかんでそれを許してくれない。

「ワリイ、じゃねえよ。普段大真面目なお前が二日も連続して学校休みやがって、しかも携帯にも全く出やしねえ。心配になって来てみれば玄関で倒れてやがるし」

「それは悪かったよ。ちよっと急な用事が立てこんでさ、携帯も途中で電池が切れちゃうし、散々だった」

「ここで倒れてたのは？」

「疲れてたんだよ。ちよっと休憩のつもりで横になったらそのまま寝てしまっただけだ」

「嘘つけ」

「嘘じゃないさ。嘘みたいに聞こえるとは思っけど」

肩をすくめ、何でも無い風を装って苛立ちを正祐にぶつけまいと自分をごまかす。正祐の疑問は至極もつともで、心配してくれてる相手に八つ当たりなんてとんでもないけど、今は説明する時間も惜しい。このままじゃ本当にぶつけてしまいそうだ。

急いでも何もならないって分かってる。もう二日も経ってしまったし、彼女がどこに行ったかなんて検討もつかない。だけど、気持ちは抑えきれない。こういうのを理解はできても納得できない、というのだろうか。何にせよ、このまままた座して待つなんて事はできない。

「……いい加減、離してくれないか。本当に急いでるんだ」

言葉に刺が混ざるのを止められない。舌打ちが出そうなところで引っ込めて、でも苛立ちは隠せない。剣呑な視線をぶつけてる自覚はあって、だけど正祐はそれを受け止めながら立ち上がって僕と正対する。

「お前、何を隠してるんだよ？」

「何だよ、急に。そりゃ正祐に隠してる事はあるよ。もちろん親にだって。人間誰だって隠し事の一つや二つあるもんだろ？」

「ごまかすなよ、鏡」

正祐の眉間にシワが寄って、僕の眼を捉えた。初めて見る正祐の真剣な眼差しに、僕は眼を逸らす。

「なあ、何があった？」

「別に何も……」

「無くはないだろ？ じゃなきゃ俺はここにいない。お前の事だし、

本当に大変だからって俺には悟らせない。そういうヤツだよ、お前は。心配も掛けさせないし、下手に自分に対して気を遣わせ無いよう連絡の一つも入れるよ、本来のお前なら。だから逆に言えば、俺がここに来てる時点でお前には何かあったって事だ」

「……………」
「言えないって事か。いや、どっちかって言えば言いたくない、だろうな」

僕は答えない。応える必要も無かった。正祐の言ってることは全部本当で、正祐だからこそ僕は話したくない。話してしまえば楽になるだろうけど、そうしてしまえば、正祐もコツチ側に関わらせてしまうことになってしまうから。

正祐は一度顔を伏せて、視線をどこかにさまよわせながら深くため息をついた。眉間のシワが深くなって、唇は真一文字に結ばれている。

「分かってるよ。まだ付き合いは浅いけどよ、お前は本当の事は誰にも話さないヤツだって分かってるさ。けどよ、俺はお前の何なんだ？ ただの友達か？ たまたま同じ大学にいて、たまたま同じクラスで、たまたまお前と出会っただけの人間なのか？ もしそうならそうとはつきり言ってくれ。でも俺はお前の事を親友だと思ってるし、お前も俺の事をそう思ってくれてるんだと思ってる。うぬぼれかもしれないけどさ、本気で思ってる。だからお前が大変な時は助けてやりたいし、愚痴だって聞いてやるよ。困ったら手伝ってやりたいんだよ。押し付けがましいって思ってもいいけど、そう俺は思ってるんだ。だから余計イライラすんだよ！ 何も知らねートコでお前だけ大変な思いしてて、俺はそんなの知りませんでしたーって一人気楽に生きてたのかって思うと自分にムカツクんだよ！ お前が何を考えて、何を思ってるのか想像するくらいしかできないけど、それが俺には歯がゆいんだよ！ お前が傷ついてる

のに何も教えてくれないで、その事に対して怒る事も許されなくらいに俺はお前にとって軽い存在なのかよっ!!」

僕の胸ぐらをつかみ上げて、正祐は叫んだ。

そんな事は無い。そう言うのは簡単なはずで、でも言葉が出てきてくれない。

正祐には感謝してる。だけど、僕には正祐の言葉が否定できない。だってしている事は正祐の言う通りだから。

「なあ、俺ってそんなに……いや、何でも無い。忘れてくれ」

僕から手を離して、正祐は僕の脇を通り過ぎていく。伏せ気味の顔からはうまく表情を読み取れない。だけど、正祐のそんな様子を見るのは初めてだった。いつも明るくて、バカで、女好きで、不思議と憎めないキャラクター。似たヤツには今まで会った事はある。でも僕の人生に交差した友人は正祐が初めてで、そんな 彼が離れていってしまう。

水城さんに対する焦りが今度は正祐に対する焦りに変わったのが分かった。

正祐は軽くなってる。僕には勿体無いくらいで、だからこそ尚更に大事な事は伝えたくない。重荷を背負わせたくないから。

だから僕にはこんな言い方しかできない。

「ゴメン、正祐。僕は本当に大丈夫だからさ……その、この隠し事はホントに誰にもしゃべっちゃダメなんだ」

背中越しに正祐に僕は話しかけた。座って靴紐を結んでる正祐からは何も返事が戻ってこない。

「たぶん、この事は親にも話さない。一生活さなくて、死ぬ時まで

黙ってると思う。だから……別に正祐を蔑ろにしてるわけじゃなくて、その……」

「……いいって。コッチこそ問い詰めるような事をして悪かったな」「心配してくれたんだから、謝る必要は無いよ。それと、ありがとう。心配してくれて。僕らは……親友だよな?」

卑怯だ、と僕は僕を責める。こんな事を言えばもう相手は僕を責められない。正祐はいいヤツで、だからこんな聞き方をしたら絶対に違うとは言わない。でも、僕は卑怯だとしても正祐まで失いたくなかった。

エゴむき出しの質問に正祐は振り向いて、いつも学校で見せている笑顔を僕に見せて予想通りの答えを返してくれる。

「ったりめーだろ? まだまだ鏡ちゃんには俺の世話が必要だかな」

「どつちかって言うと、正祐の方が僕の世話が必要な気がするけどね。主にレポートとかレポートとかレポートとか」

「バツカ。俺が本気出せばそれくらい……」

「もうすぐテストだけど、ノート取ってないじゃなかったっけ?」

「ああ、まあそれはだな……」

「まあ僕らは持ちつ持たれつ、ということだ」

「そうだな」

いつもに似たやりとりを交わし、僕は正祐に心配してくれた事とは別の感謝を心の中で述べた。正祐は何気に鋭いから、きっと僕の心中も何となく察していると思う。その上できつと、いつもと同じ風な言葉を掛けてくれる。また一つ、正祐に借りができた。これでまた、僕は死ねなくなった。

靴ひもを結び終わって立ち上がり、ドアノブに正祐は手を掛ける。

「んじゃ、元気そうな……かどうかはまだ分かんねーけどよ、とりあえず大丈夫そうなんで俺は帰るわ」

「うん、心配掛けて悪かったね」

「最後にもう一度だけ聞いてやるからな? …… 本当に体は何ともねーんだな?」

「大丈夫。ピンピンしてるよ。今のトコだけど」

「そこは断言しとけて。明日からはまた学校に来るんだろ?」

「どうかな、断言はできないなあ……やる事が終わり次第、かな?」

「じゃあ次来たときには俺の素晴らしい授業ノートを見せて鏡ちゃんをびっくりさせてやんよ」

「期待しないで待ってるよ」

ぬかせ、と苦笑いを浮かべながら正祐はドアを開けて出ていき、僕も手を振って見送る。ふう、と深い溜息が肺から吐き出されて、ただこの後すぐに僕にとってもう一つの関門が待っている事を考えるともう一度深いため息を禁じ得なかった。

「スイマセン、お待たせしました」

急ぎたいのは本当だ。だけど、どちらにしる彼女の情報を得るにはこの人から当たるしか無い。逃げるわけにはいかない。

「忙しいというのに、小っ恥ずかしい友情シーンなんて屁の足しにもならん物を見せやがって」

「僕にとって数少ない親友ですから。たまには大目に見てください」「さて、どうするかな?」

言いながら勝手に課長は部屋へと上がる。汚い部屋だな、なんて隠そうともせず言い放ってどっかりとテーブルに腰を下ろした。

「コーヒー。ブラックで思い切り濃いヤツを」

「インスタントですけど文句は無しでお願いします」

電気ケトルで沸きっぱなしのお湯を適当なカップに注いで課長に手渡す。足を組んで受け取ったそれを、一度香りを楽しんで口を付け、さて、と僕が一息つく間もなく切り出した。

「忙しいはずの私がどうしてわざわざここに来たか、察しはついてるな？」

「ええ……水城さんの事ですよね？」

課長は悠揚にうなずき、僕はこっそりと深くため息をつく。

「なら今、何が起こってるか、大方の察しはつくな。

話せ。悠の事、この二日間の事、お前が知っている事全てを」

その言葉通り、僕は話した。あの夜に公園で起こった全ての事、人格が変わったとしか思えない水城さんの行動、話し方、話した内容、傷つけられる度に動かなくなっていく男、そして嘘をついた僕の事。インパクトの強い記憶に埋もれてしまそうな細かい事象まで記憶を掘り返し、記憶の開始から順に僕の見た全てを辿っていく。ここに来ると行った彼女。ここに来なかった彼女。どこかに行ってしまった彼女。

待ちぼうけの僕。苦しかった僕。忘れようとした僕。笑った彼

女。キスをする彼女。

嬉しかった僕。愛おしいと思った僕。

僕を刺す彼女。

彼女に届かない僕。

泣いた彼女と見ているしかできなかった僕。

話しながら、僕の中である時間だけの記憶が繰り返し流れていく。泣きそうに笑って、心から笑って、また泣きそうな笑顔になって、最後には涙を流したあの姿。

彼女を僕が好きだといった。好きだと言ってくれた。何も持っていない、何も与えることができない僕が好きだと言ってくれた。ならば僕を刺して殺そうとした、その真逆とも言える行為にも意味があるのだろうか。

話し終えて何度目か分からない深いため息が出た。話しながら昂っていた感情も呼気と一緒に吐き出されて静まっていく。

落ち着いてみて自分を振り返る。そして思う。自分は何がしたいのだろうか。彼女を探し出して何をしたいんだろう。

いや、そもそも僕は彼女に対して何かできるのだろうか。どこまでも自分が嫌いで、どこまでも大好きな僕。それはつまり僕は僕自身にしか本当の興味を持っていなくて、他人なんてどこまで行っても僕の興味を引く存在では無くなった。そんな僕が決して他人以上になりえない彼女に対してしてあげられる事はあるのか。そんな事があるはずがない。

そんなはずが無いんだ。

それに彼女は好き「だった」と言った。ならばそれはつまり今の僕は好きではなくて、もう会いたくなくとも取れる。会いたくないと言ってる相手の意思を無視してまで僕は自分のエゴを押し付けるのか。そんな事をするくらいなら僕は

「鏡」

名前を呼ばれて僕は溺れそうな思考の渦から引き上げられ、顔を上げた。

瞬間、視界がグルリと回転した。何が起こったのか分からないまま背中を打ちつけて、頭の上に本が落ちてくる。次いで熱を持って痛む頬。遅れて背中からも痛みがやってくる。

切れた唇から垂れる血を拭って課長を見上げた途端、今度は蹴り。座った状態のまま弾き飛ばされて、起き上がる間もなく胸ぐらをつかんで持ち上げられた。

「くっ……!!」

うめき声を上げながら課長を見る。冷たく僕を見る課長は明らかに怒っていて、だけど僕は、それもしようがないことだと何も言わない。

片手で持ち上げたまま、課長は僕を押し入れに向かって叩きつける。肺から空気が押し出されて息ができない。安普請のふすまはあつという間に折れて僕に覆いかぶさってくる。

「これくらいで許してやるよ」

僕を見下ろして課長はそう言い放った。本当にこれで満足したのかは分からない。きつとまだ殴り足りないだろう。だからたぶん、課長はこう言うんだろう。

「残りは悠を連れ戻してきた時点でチャラにしてやるよ」

だけど、僕はどうすべきなのだろう。水城さんの事が、分からない。僕の気持ち分からない。彼女は僕の事をまだ好きでいてくれるのだろうか。僕は彼女を好きだと言えるのだろうか。死ぬ事を望んだ僕が、誰かを好きだなんて思っても良いんだろうか。

「僕は……水城さんを好きなんでしょうか……?」

「……悪い。頭はぶつけないようにしたつもりだったんだが」

「茶化さないくださいよ。恥ずかしいとは思いますが、本気で聞いているんですから」

上目で課長を見ると、タバコを取り出してジッポで火を点けている。一度煙を吐き出すとまた最初みたいにテーブルの上に腰を下ろす。

した。

「私はお前じゃないからそんな事は知らん」

「でしようね。そう言うと思ってたよ」

「だが……客観的に見れば好きなんじゃないか？ お前が自分の中で何をグジグジと悩んでるのは分かるが、初めて会った時と比べれば悠と話してる最近のお前は楽しそうだったぞ。もっとも、悠の方がお前にベタばれだったかな」

「外から見ても分かりますか？」

「存外にお前は分かりやすいぞ。特にお前が死なない体になったと分かった時の顔は見物だったな。必死に隠してる様だったが、シヨツクを受けているのがバレバレだった」

「なら分かるでしょう……死にたがりが誰かを好きになる。そんな事はあり得ないって」

「じゃあ今のお前は死にたがりじゃないって事だな」

「そんな事は……」

「あり得ない、か。本当にお前は自分を否定するのが大好きだな」

「自分ほど信じられないものなんてありませんよ」

「他人よりも、か？」

「他人は疑えても否定はできませんから」

「人は他人を本当の意味で知ることにはできない。だから否定するほどの情報を得られない、か……なるほどな。その結果が、流され続けた今のお前を作り上げた訳か。ならそれはそれで構わんさ。私はお前の考えを否定してやるだけだ。お前はもう、死にたがりでは無いよ」

「だからそれは……あり得ません」

かたくなに僕は僕を否定する。これは感情だ。僕を否定するには何の根拠も無くて、ただ僕を信じるに値するものが何も無いから。本当に欲しい物が何も手に入らなかった過去の記憶が今の感情を作

って、それが僕を否定する。

「あり得なくもない話なんだがな」

課長は吸い終えたタバコを灰皿に押し付けると、続いてもう一本取り出して火を点ける。空気の流れの無い部屋で、口元にくわえたタバコから煙が真っ直ぐに立ち昇る。

「二日。それがお前が無断欠勤した日数だ」

「二日、か。随分と僕は長く眠っていたものだ。のんびりしてるにも程がある。」

「なぜお前は悠に刺された後、蘇生するのに二日間もかかったと思っ？」

「それは……それだけ致命傷だったという事じゃないですか？ 最初に死んだ時だって時間がかかってますし」

「違うね。確かに最初こそ時間がかかったが、その後はどうだ？ 頭を打ち抜かれた時はどうだった？ 一瞬で蘇生しただろう？ 傷だってまた然りだ。戦闘で負った傷は一分もかからずに修復していったのに最近の傷はどうだった？」

確かにそうだ。初めて水城さんに連れて行かれた現場でも僕は二回死んだ。そのどちらも致命傷だったにも関わらずすぐに復活し傷もすぐに治った。その度に僕は絶望感に苛まれていた。

「だけど、あの時はどうだったか。この前の公園での事件。腹の致命傷こそ比較的早く塞がったけれど、体の痛みや男に切られた傷跡は翌日まで残ってた。」

「お前が初めてウチに来た時、私はお前の事を調べ上げたと言った

な？」

「ええ、ずいぶんと事細かに調べてました」

「あの時は流石に私も驚いたよ。まさかお前が有名な不死能力者と出会っていたと思わなかったからな」

「不死能力者……まさか、僕みたいな人間が他にいたんですか!？」

「私を知ってるのは一人だけだったかな。そいつと話したこともある。まあお前にそっくりなヤツだったよ。話し方とか考え方がな」

その人はどういう人物なのか。どうやって死なない自分を受け入れたのか。思考が似ている、と課長が評するのならば、恐らく彼女か、その人もきつと死にたがり。そして僕の先輩に当るわけだ。しかし、僕にはそれらしき人物と出会った記憶は無い。いや、もしその人がそうであることを悟らせない様にしていたのならば、僕はたぶん気付けない。

「それで、その人はどこにいるんですか？」

「死んだよ。今年の二月に」

「死ん……だ……?」

どういう事だ。不死能力者という事は死なない体になったはずだ。まさか老衰なら死ぬるのか？

「そしてお前はその死に際に立ち会った」

「死に際に……? まさか……!」

今年に僕が今際の際に立ち会った人間なんてたった一人しかいない。

「お前が救急車を呼んだその男は、何か言ってなかったか？」

課長の問いに僕はうなずいた。そしてその時の言葉を僕は簡単に思い出すことができた。

死にたくない

きっと彼は見つけたんだ。僕と同じ様に毎日に希望を見出せなくて、死にたくて死にたくてたまらないまま死ねなくて、何十年も生きてやっと見つけた生きる希望。それを手に入れた。

「死を望んだ人間を殺すのが生きる希望だとはな……」

深々としたため息をタバコと一緒に課長は吐き出した。そのまま僕も課長も黙りこんで、じっと時間が経つのを待った。テレビも何もついていない部屋で、タバコが焼ける音だけ響く。やがて課長は二本目のタバコを消すと立ち上がって玄関へと向かう。

「水城さんは……この事を知ってたんでしょうか？」

「さあな。お前が死にたがってるのは気づいてたかもしれないが、だが恐らくお前の体の事は知らなかっただろうな」

「どうして、そう思うんですか？」

「さっきも言っただろう？ アイツはどういう訳かお前にベタぼれだ。他人と触れ合うのが怖いくせにお前にキスをするくらいには。だったらお前が生きていたいと思ってるのに殺そうとするか？ その可能性が無いとは言いつけないが、アイツの性格上そうするとは考えにくい。お前の話から察するに、普段のアイツとは違う新しい能力を手に入れたんだろう。その力で恐らく、最後にお前の願いを叶えてやろうとした。そして……」

「水城さんも……」

「アイツが何をしようとしてるのは分かんが、最後にはそういう道を選ぶつもりだろう」

だとしたら、彼女はどんな思いで僕に刃を向けたのか。想像してみただけど、僕にはその時の心境がどうしても想像しきれなかった。苦しかっただろう、悲しかっただろうと陳腐な言葉しか思い浮かべることができない。

でも今、確実に言える事は、僕はまだ死ぬわけにはいかない。そして僕はまだ生きていることを彼女に知らせなければならぬ。彼女は死ぬべき人間じゃないんだ。伝えなければいけないんだ。僕はまだ生きていたいという事を。

「だから鏡、さっさと悠を捕まえて私の前に連れて来い。私の許可無く死のうとした罰を脳髓深くまで刻みこんでやらなければ気が済まん」

強く、強く拳を握りしめる。血流が止まるくらいに強く握りしめて、僕は声を心の底から搾り出した。

「はい………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867z/>

モノクロ潰し

2012年1月4日10時50分発行